女子文壇

第八年　十一月號　第拾壹號



女子文壇拾壹月號（第八年第十一號）目次

口繪


ヴワイオレットねり製水製
壽美禮おしろい
西洋色白くなる化粧剤
壽美禮あらひ粉
壽美禮煉白粉
壽美禮水白粉
壽美禮粉白粉
壽美禮打白粉
壽美禮玉白粉
壽美禮おしろいは即座の化粧に適し使用最も簡便にして濃くも淡くも自由にして殊に多量の花精を含有し品雅なる芳香を放ち湯上り等に用ひて爽快を覚へ美は益々艶に發揮すへし
煉製水製粉製其他各種純白の外肉色種々有れば如何なる人の如何なる化粧にも適す
壽美禮洗粉は西洋色白くなる洗劑にして朝夕用ひれば皮膚のあれる事なく顔に汚を落し色白く美しさに至るべし髪洗ひに用ひ髪のねばり取り油あか等を生ぜず凡て半襟を洗ひてよごれを落し物を漂白する性あり
賣捌店は全國到る處有名の小間物化粧品店及藥店にあり
東京両國元町
製造本舗
壽美禮堂
電話本所四一一番

秋晚



([illegible])

以下十一種の書物は何百年後にても（三重縣桑名矢田磧弘報館）で販賣す
◎割引五冊ヨリドリ郵稅共一圓

萬物 製法秘術寶典

代價郵稅共廿二錢郵便切手又は振替貯金なれば廿四錢

目錄、輕便電燈●輕便晴雨計●輕便電話機●煙火●鼠糯玉●齒磨●石鹼●洗粉●白粉●香水●紙石盤●のみ取●萬年用インキ●メッキ法●朱肉●空氣銃●萬年手帳●墨●朱墨●鼠取藥●無刀彫刻術●酢●豆腐●汁粉水●果實酒●屠蘇酒●燒酎●葡萄酒●魚煎餅●罐詰●ラムネ●リモナーデ●ロンロヤール●密柑水●甘酒●味噌●醬油●水彩繪具等の製法其外大發明器械 **早取寫眞術** 不用機械 **早印刷法** 等 **百** 餘種記載してあるが害いらず、あり合せの道具で出來る樣にしてある、殊に早取寫眞術は名の如く器械を用ず僅かの藥品を以て器械にて寫せし者と少しも異はぬやうに人物風景其他如何なる者にても大小の差別なく何枚にても鮮明に寫し得る愉快なる寫眞法である、藥品のなき地方は送る、又器械にて寫せし通りに寫らねば何時にても **返金** ●附言 珍奇を好むは人情なり故に早取寫眞術を以て自分の寫眞を名刺紙に速寫し早印刷法で自分の姓名を好む書畫入を製せば頗る面白く人をして感心せしむるに印刷し **寫眞入名刺** も又愉快也

奇々妙々 手品種あかし

郵稅共廿二錢 郵券代用は廿四錢

本書を讀で酒席又は多人數集會の折り手品をして見せたならば拍手大喝采疑ひなしである。（目錄）●鬼火の妖術●口中より火焰を吐く術●不思議な水の魔術●月世界の術●針を吞む法●皿廻し術●カルタ逆立ち術●銀貨をふやす術●水上に文字をかく術●カルタをならべ他人の思ひ居るのをあてる術●互碁の上にて鳴樂を廻す術●碗に水を入れる術●火を喰ふ術●熱湯中に手を入れる術●空のマッチ箱よりマッチを見せる術●帽子の中より色々の物品を出す法●黒インキを金魚にする法●三尺の棒を丸吞みにする法●水を燃す法●淸水を牛乳にする法●銅貨を水に溶す術●ステッキを帽子の中に隱す術●刃物の先より水を出す術●水中又は机上にて鷄卵を踊す法 附錄 **驚神的大魔術** 其他面白き手品が澤山載せてあるが甚子供でも出來る

學理應用 世界奇術大全

一週間で思ふ樣に白色となる法●人間百歲迄生きる法●人の生死を前知する法●必ず子を姙む法●必ず子供の出來ぬ法●胎内の兒の男女を知る法●他人の年齡を當る法●胎内の兒を男女自由にする法●顏を櫻色にする法●書き損ひの字を拔く法●百日百夜眠らずとも氣力負へぬ法●歌がるた人に必ずまけぬ法●老人でも白髮とならぬ法●口にやけぬ法●習字速成法●身を肥す法●身體を自由自在●其外斯の如き奇術を澤山やせさす法●附錄には **催眠術** 集めたる書物は郵稅共廿四錢

破天荒の快書 破格の大安賣 最新大奇術

郵稅共廿二錢 郵券代用は二十五錢

目錄大略、天空に怪人の姿を顯す術●風を吹す術●吹き居る風を止める術●天に文字を顯す術●飛ぶ鳥を地上に落す術●川中の魚を地上に踊上る術●水の流を止める術●夢に天國へ遊ぶ術●忍術●仙術●人を空中に眠らす術●妖光幻術●十字 **切支丹バテレン** 術の妖術●モルモット術●架殺人術●千里一飛の魔術●太き火箸を指先にて自由に曲げる術●金錢自由吸集の妖術●釋拔けの妖術●武道 **隱身術** ●人の力を取り我身を輕くして上げられぬ術●七竹折術●八歲の子供を重くして上げられぬ術●棒を掌につけ押しても取れぬ術●讀心術●三人にて持ち居る椅子を指二本にて取る術●不動金縛の妖術●二本の指にて **大人** を自由に上げる奇術●數人にて一人を倒せぬ術其他奇術妖術山の如しそして何人も實行し得る獨習書なれば早く求めて朋友を **驚** かすも愉快ならん、奇術師天一も跣足で逃げ出すばかり

道具不要輕便 食パンに並和洋菓子製造書

有り合せの道具で米よりも費用が少なくて一度に十日分も拵へて置ける食パンや和洋菓子が手輕に製造出來る樣にしてある書物は郵稅共廿三錢

禮法及婚姻法

日本の禮法は悉皆洩さず婚姻式には媒酌●見合●結納の受渡●婚姻の前支度●三三九度盃の仕方●嫁と舅姑と親子盃の仕方●寢室に入る時の心得●フトンの敷方●其他婚姻に關する事柄は洩らさず附錄には婚姻出產死亡屆其他澤山。定價郵稅共廿三錢

男女 無上の快樂

本書の内容は祕密に付掲載する事は出來ないから本書を讀んで初めて愉快なる事が出來る者と思へばよい。（他の人に見えぬやうにして密封にて送る）定價郵稅共二十四錢

一讀千金 滑稽頓智笑話

面白くてアゴのはづれぬ用心して讀み給へ本書を讀んで居れば退屈する時がない郵稅共廿二錢

大好評 機械不要輕便 早取寫眞インキ

特別上製大瓶 郵稅共十五錢

此インキのみにて他に器械藥品を用ひずして人物風景其他如何なる者でも自由に寫す事が出來る萬一寫らぬ時は返金す（說明書を添付す）

振替口座 東京一六九二八番 大阪一四五一七番（三重縣桑名矢田磧）**弘報館**

THE LADY'S GRAPHIC
婦人畫報

十一月一日　十一月卷　一冊廿五錢　郵税二錢五厘　三冊八十錢六冊一冊五十三十十錢冊二冊二十九十四錢[?]

畫報

●野路の露（岡田三郎助氏作 二百大美人油繪）●兩名家の菊花壇
▼落葉かき ▼加藤博士夫人と令嬢 ▼御挨拶 ▼掛受兒
●伏見桃山御陵 ●在米本邦婦人の職業
▼西郷侯後室居間ノ庭園 ▼渫茶の席 ▼新婚の前田伯令嗣夫妻
●皇后陛下御座所 ●兩女學校の修學旅行
▼新婚の御披露 ▼コンノート殿下の香蘭女校台臨 ▼下條氏の家庭
●乃木將軍夫妻殉死當日寫眞 ●奧樣の買物ぶり
▼別莊に於ける青山博士夫人と令嬢 ▼逝る遠山女史 ▼鏑木清方と丞景[?]
●文展出品三間秀畫家と其傑作 ●如花諸名家令嬢
▼ビルマの留學生 ▼山羊 ▼佐々木侯爵令嬢と本多子爵令嬢

讀物

▼大正に婦人警告す　新渡戸博士 ▼女は何處までも女也　田代博士
●子供同士の愛情　久保學士 ●塔の澤より　長谷川時雨
▼當世細君氣質　山路愛山 ▼姿をよくする法　田邊學生
●五十錢會　X文學士 ●歐洲より　與謝野晶子
▼戰慄すべき女學生墮落の徑路　警視廳警部　坂口鎮雄
●家庭かきのぞ記　記者 ●育兒衞生　加藤博士
▼危險な處女時代　三田論道[?] ▼女記者女中住込の記
●文展出品三間秀畫家作品　藤懸學士 ●男まさりの女　しゆん
▼貴婦人の道樂　記者 ▼懷しい母　伊原氏夫人　加藤氏夫人
●小説ある婦人に與ふる手紙　藤村 ●この頃の料理、裁縫、家事

東京麹町區飯田町四ノ四番　東京社　電話番町二三一八　振替東京三一九八　（全國各書店にて販賣す）



一日より
新柄ショール賣出し
四大畫伯新作品展覽會
十一日より
洋畫小品展覽會
右いづれも開會致し候間
何卒御來觀の榮を蒙り度
奉願上候

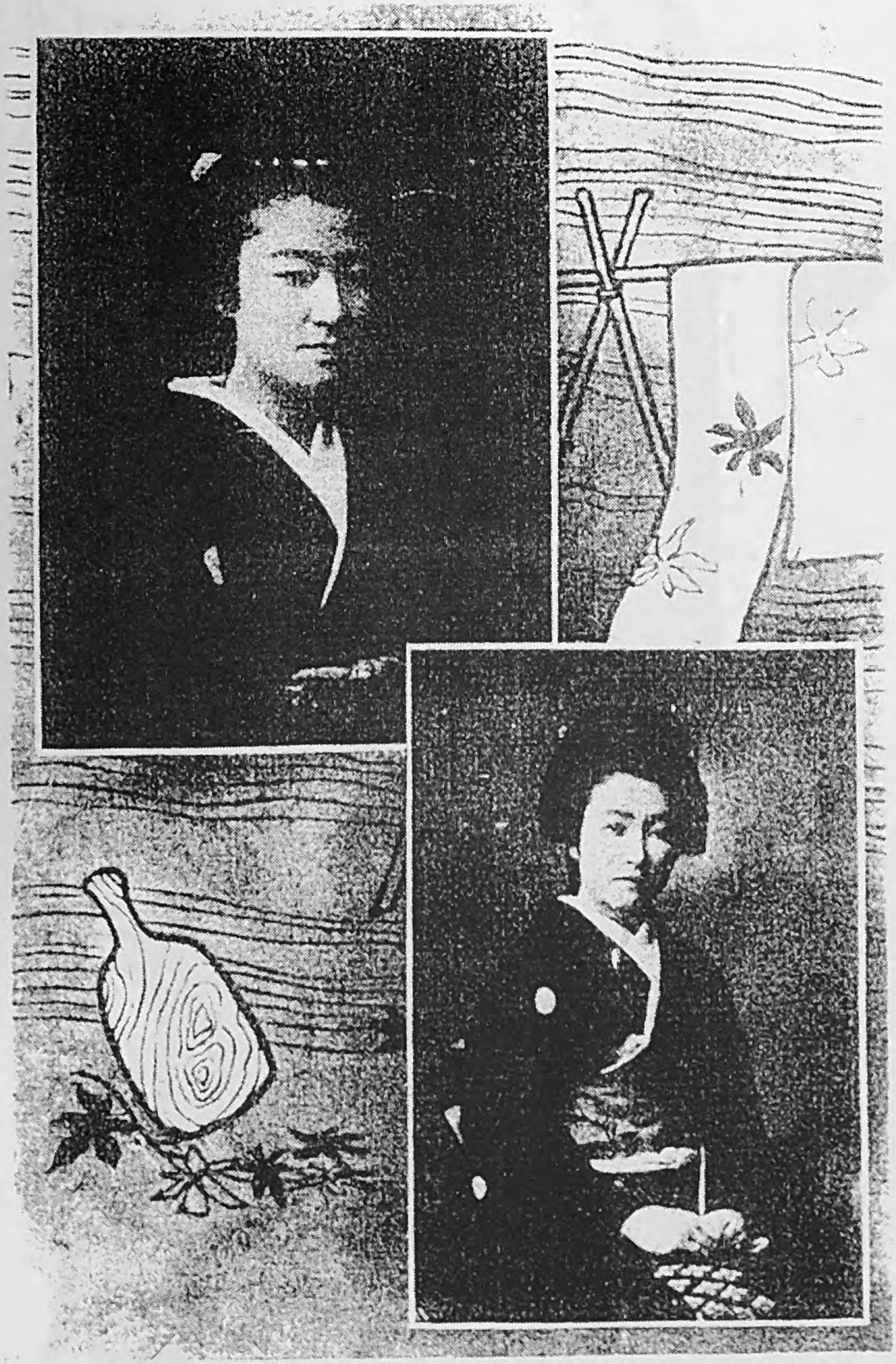
東京駿河町
三越呉服店

卓の前



伯爵奥平昌恭氏夫人嫃子

いてふ葉



子爵牧野忠篤氏夫人茂子

法制局參事官松村誠一郎氏夫人美

花の夢



帝國劇場女優初瀬須子孃

遠き想



帝國劇場女優佐藤千枝子孃

◎美顔と化粧法

又製本出來ました切手三十錢にて御分ち申上げます
●著者　東京神田錦町三ノ二　高柳こう子

●色白くなる

色黒き方、青き方、赤すぎる顔の御方は勿論、寒くなつて御顔のあれて困る方は切手貳錢封入御手紙下さい必ず生れかはつた程色白くなるよい藥を御知らせ致します

●東京神田錦町三ノ二　高柳こう子

●生れつきの人が何で藥位で色が白くなるものかとお思ひなさる方もありませう實際私方の藥を用ゐるとふしぎにも色白く美しくなります。それで只今まで寫眞や織物や菓子や魚類や其他地方の物產などをば、色白くなつた御禮にとて御送り下された方多く、禮狀などは大きな箱に山ほどになりました。此數千通の禮狀はどなたにも御出下された方には御覽に入れるので皆私方の藥の効能には驚きなさいます、其の禮狀の二三通を御覽に入れませうか。

●一寸御知らせ申上ます、あなた樣の御藥にて美顔散を愛用致しました處はじめて用ゐました時は少々白くなつた樣な氣がいたしそれから二日三日と引續ゐ用ゐましたら五六日にてハタケ等なはりました十二日目には自分ながら美しくなりましたあなた樣の爲めに性來色黒くて困つて居りましたのにはかに白くなつてこんな嬉しい事ありませんわ、厚く御禮致しますうれしさのあまり一寸御禮まで。(神田連雀町の御方より)

●文して申し上げます先達は早速御送り下されありがたく存候引續き使用致し候處三日目より顏がすべ／＼となり昨日叔母樣まわりたいそう色が白くなりましたねと驚いてゐましたこれも皆貴女樣のおかげ故、これから友だちにすゝめます先は嬉しさのあまり御禮申しあげます。(神奈川縣橘樹郡の御方より)

●寒さ相增し候ところあなた樣には御機嫌よくお暮しなさいますか御伺ひ申上げます先頃は早速御送り下され有がたく存じ候また一袋も使はぬ内、すゝめあらはれ此頃大へん色白くなり誠にうれしくあなた樣は私に取つては美人の神樣と日々拜んで居ります先は文して御禮申上げます失禮の處は御許し下さい。(京都府舞鶴の御方より)

●秋風のけはひうるはしく四方の景色も一と時雨毎にさびれきてあはれ冬されの姿となり候常さへいとう身の上は又來る此冬をいとはれ候ものを貴女樣の御藥を御願申してより顏もあれずきめも細かになり化粧も思ふ樣になりいとも嬉しき極みにこそ以下略。(神戸市の御方より)

冬期最好化粧料

ベルツ水　無代進呈

ベルツ水は東京帝國大學名譽教授ドクトルベルツ氏選用の化粧料にして冬期御使用になればアレ、ヒビ、アカギレ、シモヤケ等を防ぎ皮膚を潤沢ならしめ併てニキビ、ソバカスを去り天與の麗質を保護するの効あるは既に諸姉の熟知せらるゝ處也弊堂義今回開業紀念としてベルツ水參千本を限り送料容器料實費として二錢郵券三枚御送附ある向へは何誰樣にても進呈致べければ至急御申越あれ

東京市本郷區根津宮永町十二番地
化粧品輸入製造　芳香堂

皮膚科種類　特に

●アザ　●ワキガ　●黒ナマズ
●入レズミ　●ソバカス　●タムシ
●ホクロ　きずあと
其他外科的手術等の痕跡隆起

あざ専門　**大明堂醫院**

本所區横網町二の十八番地
電車石原停留場前＝新道

診察時間　毎日　自午前九時　至午後四時

日本女子大學教授　赤堀菊子
赤堀料理教場主　赤堀峯吉
女子美術學校講師　赤堀道子
三先生共著

通俗 家庭和洋料理

菊判洋裝　三百餘頁　頗美本
定價八十錢
郵税十錢

發行所　東京社
東京麹町區飯田町四ノ四
電話番町　二三三九
振替口座東京　一一八一八

●●●●●●●

手軽で

美味い物が出來たら如何に夫の満足を買ふ事が出來ませうか。美味くて滋養になる物を進めたら如何に老人は喜ぶでせうか。滋養になつて美しい物を與へたら如何に子供は嬉しがるでせうか。**本書は三先生**が多年の經驗に依りて最通俗的に何れの家庭にも適用すべき**和洋數百の**料理法を然も叮嚀懇切に説き示されしもの。本書によりて先づ家庭の料理法に一大改良を加へられん事を希望致します。

姉妹



園 喜美子（學習院女學部卒業）

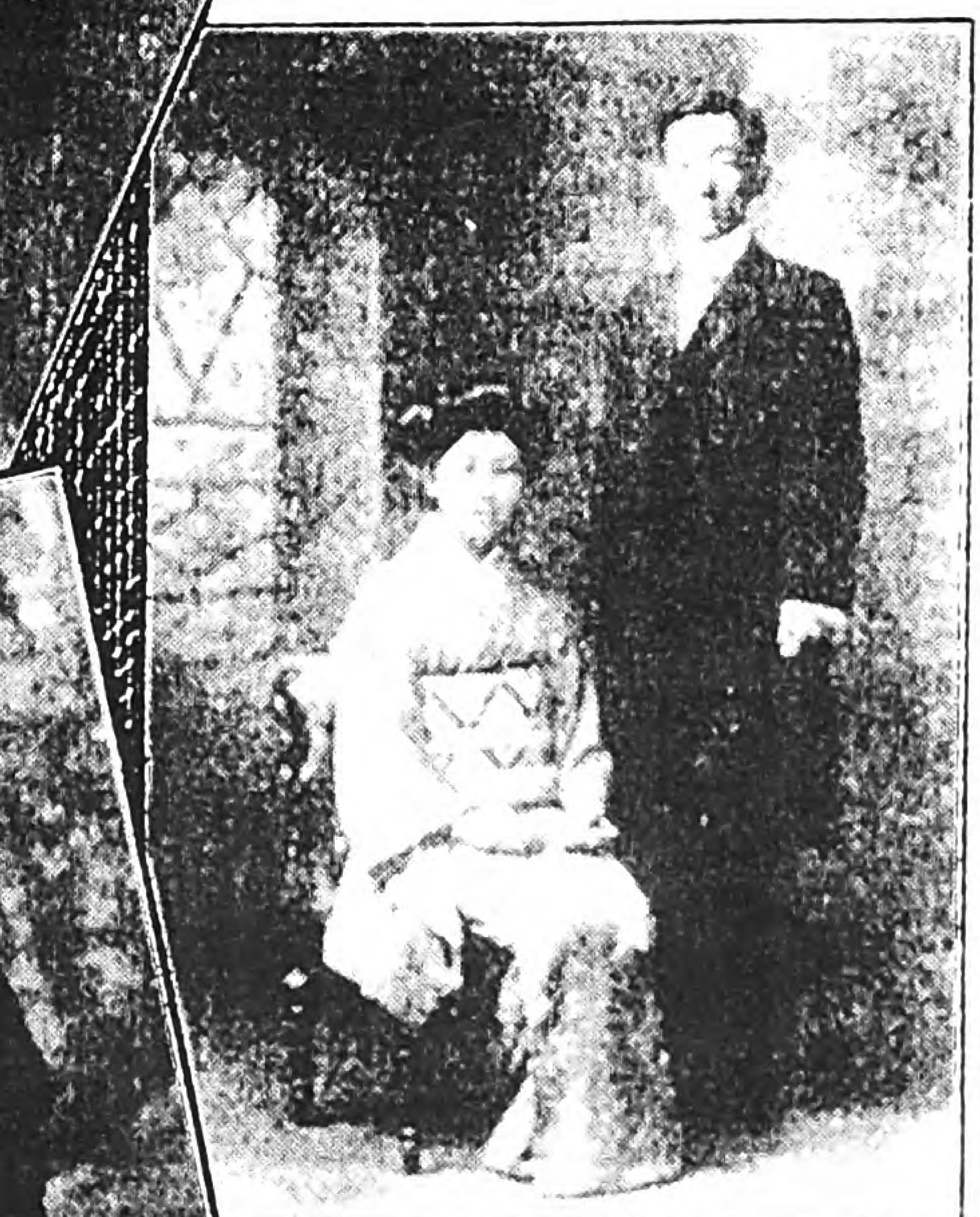


園 喜枝子（お茶水高女在學）

新婚の面影



東洋移民メキシコ支店長田中芝助氏と夫人みつゑ子



本山海軍少將令嗣と夫人あや子



エルレポルト商會員瀬氏と夫人隆子

惡筆は一生の不幸

敬愛なる諸姉よ！諸姉は從來字の拙いため損失をしたことや恥しい思をなされたことはありませんか？手紙を書くたびにつく〲自己の惡筆なることに愛想の盡るやうなことは無かつたでせうか？女子諸藝の中筆蹟が一番重きををかれて居ります。御婦人として筆蹟の美事なることほど生涯幸福で利益なことはありません。

若し短日月の間に字が巧くなりたいと思ふ方があらば從來の習字法は斷然廢して、文明的習字法による特許速成法で練習なされば性來如何なる惡筆の方にても羨まるゝやうな能筆家になられます。其方法を知りたき方は東京本郷區大學正門前帝國習字速成學會（電下三二一〇番）へ「ハガキ」で住所姓名を御知らせなさい。無代で委しき方法を御知らせします。近來類似物澤山出來御注意なさい。



最も完備せる大畫報として好評湧が如し

最大畫報[illegible]特別號

御大葬儀記念大畫報

增版又增版
第四版愈出來
速に申込まれざれば
絶版とならん。
本號に限り
送料共四十錢

●寫眞七十二頁二百有餘●讀物九十六頁絶好の記念

▼先帝陛下御尊影 ▼宮城青山間及桃山御葬列十九頁續きの縦從 ▼輜車 ▼靈柩列車通御 ▼靈柩を列車に移し奉る ▼伏見桃山御陵 ▼陛下御誄奉奏 ▼伏見宮殿下御染筆御陵誌 ▼埴輪と樂器 ▼兩陛下御名代宮 ▼大喪使總裁宮 ▼伏見總裁宮衣冠單桐杖 ▼桃山雜觀 ▼皇后陛下御喪服御靴御中啓 ▼各御名代宮御旅館 ▼御大喪準備中の桃山 ▼兩御名代妃殿下桃山に向はせ給ふ ▼當日市中雜況 ▼赤十字救護班と軍隊堵列 ▼青山葬場殿と二重橋大觀 ▲各婦人團奉送 ▼各女學校奉送と遙拜式 ▼英獨西御名代三親王と十八ヶ國の代表諸員 ▼沿道の大裝飾 ▼御棺側に納奉りし御物 ▼喪服の女流教育家諸氏 ▼七ヶ國奉奠花輪 ▼乃木大將夫妻、辭世筆蹟、葬儀 ▼桃山葬場殿晝夜の偉觀

▲二頁大抽繪大附錄、寂しき夜、…………石川濤伯筆

東京市麴町區飯田町四ノ四
振替口座東京一一八一八番

東京社

各地到る處の書店に在り
電話番町二三三九番

女子文壇叢書第一編

水野葉舟氏序

前島優梨子作

第壹編

新版 小説 町むすめ

製本既成

全一冊二百七十頁洋装
作者最近肖像入
正價金三拾錢
送料金四錢

女性の作物と云ふ事を最も明かに示せるものは前島優梨子の小説となす、優梨子の小説には女性らしき同情あり、女性らしき理解あり、彼女の作れる多くの短篇小説は、其一篇毎に、それ〴〵異りたる人を引きつける力ありて、讀めば讀むほどしみ〴〵と人生の味ひを感得せしむ、世に閨秀作家を以て標榜する者少からずと雖、多く其名ありて、其實空し、此處に其名を知られずとも、其實力の充實せる若き婦人作家、前島優梨子の處女作を一般の讀書社會に推奬するの機會を得たるは吾人の誇とする處なり、

東京市京橋區大鋸町十一番地
女子文壇社出版
（振替口座 東京壹七貳九）
全國書店取次販賣

最も安價で家族中の樂しみは本誌に限る

講談世界

十一月號發行 | 價 一冊 二十錢（送料二錢）半年分一圓二十錢 壹年分二圓三十錢

△侠妓音羽（石版密畫 大判口繪）……山中古洞筆
●乃木將軍と夫人●小春の磯●名優の面影●ほほゑみ●艶富貴●黃菊白菊●講談及落語家（以上寫眞銅版光澤紙刷）

△武士道 銘々傳 龜田大隅（英朋畫）……寶井馬琴

△大岡政談 音羽丹七（古洞畫）……錦城齋典山

△侠客 新門辰五郎（同上）……小金井蘆洲

△喜劇 亭主關白（春帆畫）……桁山朝夢

◎乃木將軍（英朋畫）桃川若燕

△吉原奇聞 怪談手振坊主（春帆畫）……邑井貞吉

△落語 三軒長屋（古洞畫）……三遊亭圓喬

△探偵實話 車中の毒（春帆畫）……蓁々齋楽柳

雜錄

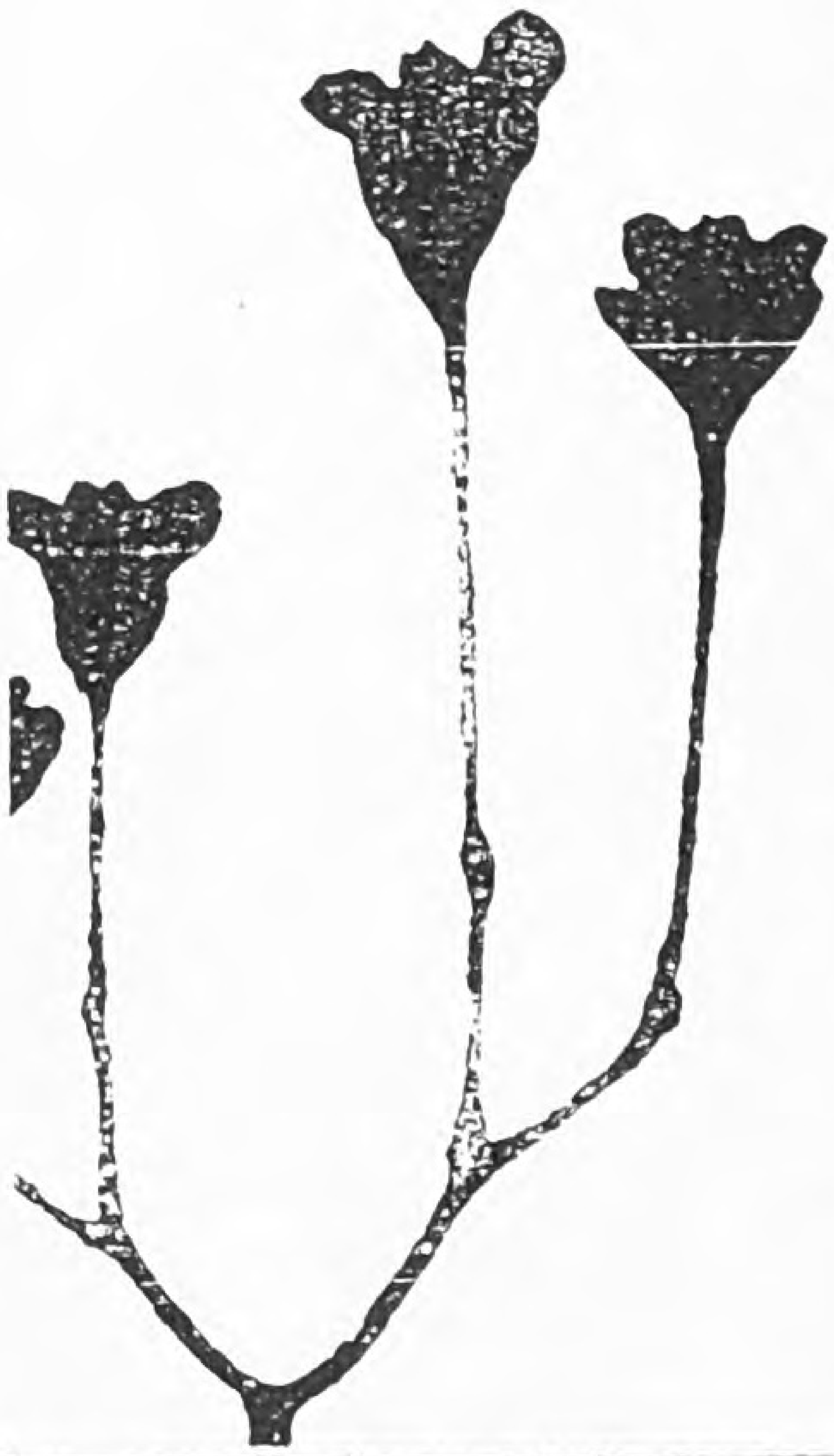
●空板氣焰……むかご
●料理店の女將の見た客……近藤燕雨
●女でなくては……や・をとこ
●藝評家先生……不破雷堂
●藝界覺え帳……九太夫

講談文藝（俳句●都々逸●一口噺●冠句●川柳●讀者くらぶ）

發行元 東京神田旅籠町一丁目 （電話下谷四八一九） 文光堂 振替東京一九五五番

（賣捌所は全國各地書籍雜誌店にあり）

梅もどき





工學士光岡丈夫氏夫人鶴子



醫學博士喜多村朔治氏夫人直子



誌友



（誌友諸孃の寫眞續々御寄贈を乞ふ掲載の上はお返しいたします）

[illegible]田不二子
松岡君彩草
[illegible]藤[illegible]子

村山美枝子
向山よし子
牛尾耶榮子

よわ子
引地こま子
米岸部來乃

●少年少女達の家庭最良讀物

佐々木邦氏作 好評

一人やんちゃん

再版

▼中判美装 武山斎氏石版彩色畫 木版色刷挿畫六葉入

正價金參拾五錢 送料金六錢

いたづら小僧日記で有名の、佐々木邦先生の作ですから、大人にも小供にも面白いこと請合の讀物です。世の中に出ると、到る處評判になつて、何處の家庭でも爭ふて購求され。此頃の好著として、持て囃されて居ります。（諸新聞好評あり）

出版元 東京 京橋區大鋸町十一 振替東京壹七貳九 女子文壇社

どこの本屋でも取次販賣して居ます

▷青年文藝界の覺醒者たる本誌を見よ◁

海内唯一

秀才文壇

青年伴侶

十二月一日 普通號 價｜一冊送共 金十六錢 三ヶ月分六十九錢 半ヶ年分一圓三十五錢

△無限に新らしかるべき藝術……島村抱月

△偶感數則……森田草平

△新通俗小説に就て……相馬御風

△斷片……上司小劍

作家と郷土

明るい國……南薫造

憂欝な自然……秋田雨雀

郷土藝術に就て……後藤宙外

信濃の自然と人……吉江孤雁

△踏繪(小説)……水野葉舟

△慰安(ソログーブ)……米川正夫譯

○基督の歌　赤い假面

○異國少女と其追憶　YSH生

○哀歌　山村暮鳥

○詩數篇　福士幸二郎

○學界の人々

○文壇の人々

每號懸賞文藝○小説○評論○散文○長詩○小品文○消息短文○短歌○俳句○[illegible]○六號文壇

發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂 (電話下谷四八一九) 振替東京一九五五番

(賣捌所は全國各地書籍雜誌店にあり)

▼御婦人の寶……新發明化粧唯一品（總て品物の外見を飾らず有効一天張の無類珍品）

女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
實驗發明

美髪劑

「美髪劑」は十有二種悉く人體皮膚面の毛髪の營養となる純植物性のものより成り、大抵のチャレ毛には些しも効能はありませんが、クセ毛なら何んなひどいものでも直ります、殊へクセ毛の人でなくとも、毛がやはらかで過ぎて、ハエギワもピンもタボも下り易い毛髪でも、之を防ぐことが出來ます、又毛髪が硬くて自由の利かない人でも、すなほな好い毛髪となります、加ふるに毛髪の色澤を美しく致します。

小瓶價金參拾錢
中瓶價金五拾錢
大瓶價金壹圓
（紙布代用一割増）
送費 市内四錢地方六錢 清韓臺灣各拾錢

責任ある

女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
實驗發明

美髪香油

「香油」は美髪劑のすべての効能を具有してある外に、一時的にチャレ毛を直し、毛をフクラマス力をもつて居りますから、如何なる毛の薄い御方でも、これをつけて髪を御結びになれば、フックリとして澤山の毛のやうに見えます、又皮膚から剝脱してフケが出たり、毛髪の赤く細く枯痩するのを直す構成を備へて居ります。

一瓶 價金壹圓五拾錢
（紙布代用一割増）
送費 市内四錢地方六錢 清韓臺灣各拾錢

化粧料は

女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
實驗發明

日やけどめ

此「日やけどめ」は季節々々に、朝夕郊外の散策又は海邊の漫歩の折、之を御顔に御つけになつて出られ、御歸りになり又御つけになれば、日に焦ることなく、又やけたのを綺麗に除ります、化粧水の代用としても結構です。

一瓶 價金四拾錢
（紙布代用一割増）
送費 市内四錢地方六錢 清韓臺灣各拾錢

本品のみ



女子文壇

十一月號

（第八年第十一號）

明治年間の婦人

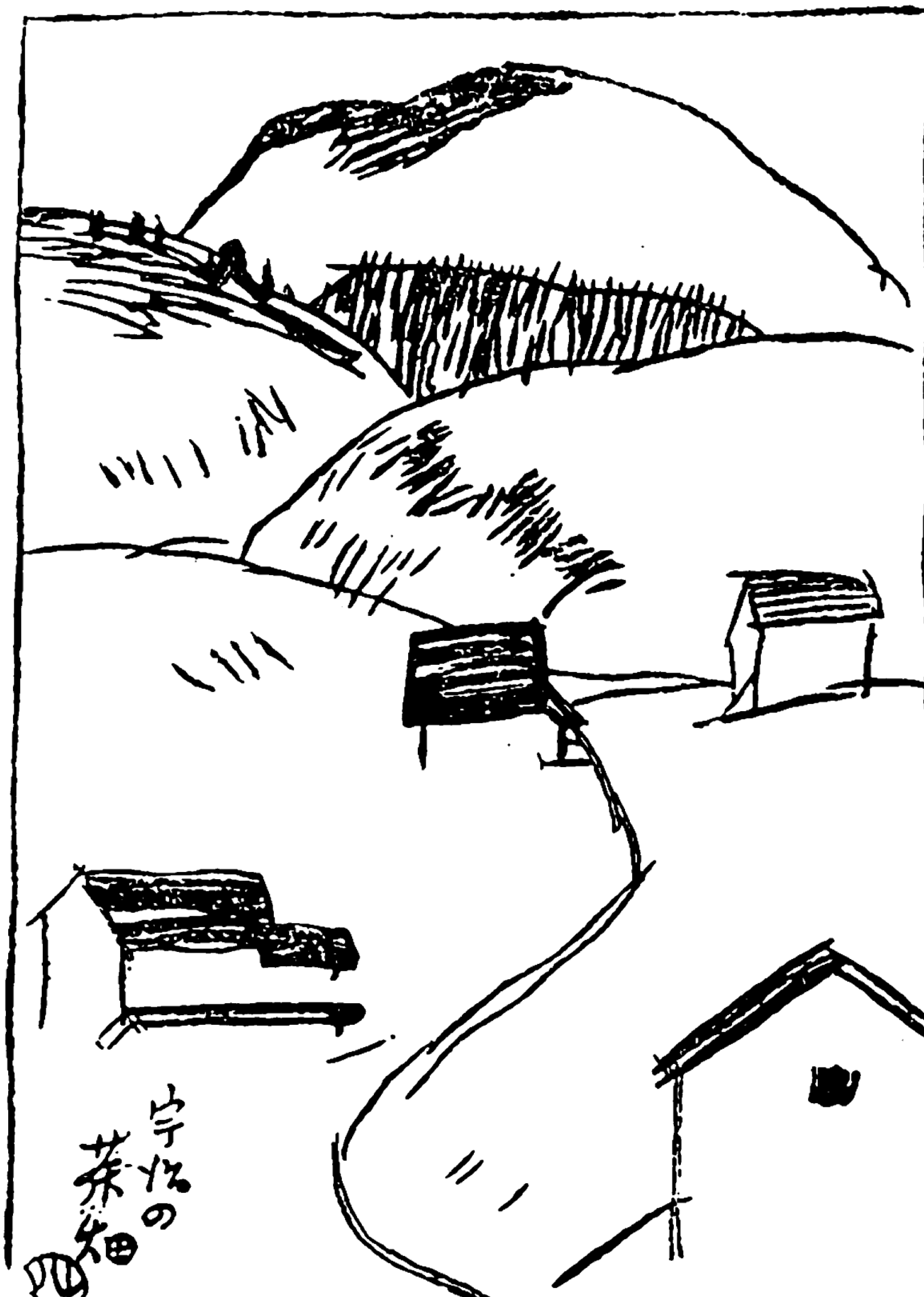
男女とも上を見ならふた時代

東京高等女學校々長　棚橋絢子

世の中の森羅萬象は、何時の世、如何なる時でも變化はいたしません、明治年間には凡ての物事に變化があつたと申しますけれど、山は山、川は川、草は草、木は木で森羅萬象には何の變化もございません。人間も進化しない時分には、尾があつて四這に這つたさうでございますが、それも形の上の變化で、昔から人間は人間で、此から後世も人の子は仍且人の子だらうと思ひます。斯く世の森羅萬象の本來に變りない處を見ますと、明治年間の婦人であらうと、大正年間の婦人であらうと、仍且人間本來の面目には變る處はないと思はねばなりません。形の上とか、心の持ちやうとかに、變化は生じて來ましても、人そのものは何處までも人ですから、人の通る道を破壞しようとした處で人間の力では出來ないことで、例へば山は山、川は川

と云ふやうに自然に備はつたもので、動かすことの出來るものではありません。

本來はそれとして、明治年間に一寸眼につ いた婦人の變りやうと云へば、おてんばになつたことでせう、以前の婦人は凡て溫順で、女らしい美しいものでしたが、明治も末年になつてから男だか女だか境界のつかぬやうなことを言つたり行つたりする婦人さへ出て來たやうです。以前は世の中に御數が嚴しくて、婦人と云ふものは引込んで居るべきもの、知つたことも知らぬ振して默つて控へて居るべきものと、他から壓制的に溫順くせねばならぬやうにせられて居たので、十人が十人とも皆溫順いものに極つて居たのですが、明治年間には、西洋の敎育が入つて來て、世界が博くなり、今まで奧座敷に閉ぢこめられて居た女が、俄に廣い世界に



放たれて、自由になつたものですから、つまり以前の閉ち籠られて居た反動に、おてんばに見えるやうになつたのでございませう。

以前は女自身で、男に直接應對するやうなことは決して無かつたもので、男女七歳にして席を同うせずの言葉は固く守られて居たのですが、これも只今では、とし〴〵男に向つて應對する女が出て來たと云ふやうな次第でございます。

また明治年間には、男女とも人の眞似をするやうになりました、此眞似も下を見ならはずに、必ず上の人を見ならふやうになりました、世の中が以前のやうな階級制度がなくなり、四民平等になりましたから、眞似ようと思へば、自分より上の人の眞似が出來ます、その爲に見次第、聞き次第にずん〳〵上の人を眞似するやうになりまして、明治年間の男女が贅澤になつたのも此が爲でせう、贅澤が高じて虛榮心と云ふことにもなるのでせう。

婦人と生れた以上は、昔も、今も、今から後も、婦人としての天分――天職は變らないのでございます、子を生むこと、之を育てること、家を治めること、此等は婦人が自然に履むべき道でございます。それを強て婦人に世の中に出て働けとか、外へ出て活動せよとか云ふのは、天職に背かせることになります、體力その他の點から申しましても、婦人を外へ出して働かさうとするのは、自然に背き、常規を逸してゐることだと思ひます。

智識、感情、意志の導き方

鳩山春子

明治年間の婦人に就いてと申されましても、餘り漠とした問題で、一朝一夕には纏つたお話も出來ません

から、只此處には智、情、意の三つの方面からざつとしたお話をいたしませう。

　男女を問はず世間に立つて働いて行くには、明かな智識と、美しい感情と、強い意志との此の三つを具へてゐなければならないのは、誰も知つてゐることです。殊に今後の世の中に立つて行かうとする婦人には、何うしても此三つの行ひに注意して、明治年間の短所を再びしないやうにせねばなりません。

　第一、智識の點に就いて言ひますと、明治年間の女子は人としての敎育を充分に受けなかつた、只單に女と云ふ小さい範圍に入れられて敎へられて居たのです、女は遺傳的に智能の發育に缺てゐるといふ見地をする人もありますが、之は一種の謬



見であらうと思ひます、寧ろ其界は世の中にあると思ひますが、それは別としても、斯る複雜な世の中に立つて行くには、何うしても相當の智識が入ります、世に處すると云ふ上ばかりでなく、自分の生を守つて行くのにも亦智識は大切なものです其根本を辨へずに若い女が單に學校へ行く爲に學校へ行くと云ふやうな人の多いのは困ります、何の目的があつて學校へ行つて智識を得ようとするのか、其根柢が自分に分つてゐないと、何にもなりません。人も行くから自分も行くと云ふのでは餘りに漠然として居ます。先づ此の智識を得るのは、世に立つ爲め自分の爲めと云ふことを自得して、自分から進んで智識を得るやうにしないと、勉強する功がないのです。

其覺悟の如何に因つて、智識を吸集する度合が大變に違ふだらうと思ひます。同じく智識を得るならば、深いと淺いとでも非常な相違があります、智識は他より與へてくれるのを待つと云ふのではなく、自分自身に智識を得ようとする氣にならねばならないのです。

次に感情ですが、昔から女は嫉妬心が強いと云はれて居ります、嫉妬心はつまり忍ぶことが出來ないから起る情で、忍ぶことさへ出來て、或る度まで此情を抑制すれば宜いのです。

又女子には虚榮心がある、人に好く思はれたい、好く見られたいと云ふやうに、斯う云ふ感情は女子の誰にでもあることで、男にも勿論あります。けれども之は小さな人間一個の情で、大いなる感情の動きとは云へません。今少し博い世間的な感情を持つて欲いと思ひます、情は自然に任せると吾儘になりますから、吾儘にならぬやうたしなむと云ふことも必要です。

第三に、女子の意志ですが、一般の說では女子の意志は弱いものとされて居ます、けれども私の見る處では、忍耐力などは男子よりも強いのです、例へば身體の一部に手術を施して切開すると云ふやうな時にも、女は泣きますけれど痛さに耐へ切れなくて泣くと云ふのではなく、切開後のことを考へて泣くのであります一家の中でも、女子は恒に代表的に忍耐心を持つて居るのです、零落した場合にも、夫を勵まして、始終元氣を附けるやうにするのは女子です、それだけ忍耐心が強いのであります。

感情でも、意志でも、女子には相當の要素を持つて居ますが、只それを導くだけの智慧が乏しいために、發達しないのであります。之を發達させる爲に女子も學問するので、明治年間の婦人のやうに只漠とした學問のしかたをせずに、此の覺悟を以て今後の婦人は學問をして頂きたいものです。

何事をするにも、只、仕方がないとか、出來ないとか云つて、打捨て了ふのは宜くないと思ひます、今後の婦人は、何事も出來すといふ覺悟で大に進んでゆかねばなりません。

おてんばとは何ぞや

渡邊工學博士夫人　渡邊美子

に神經質になり、悧怜になつたのでございます。

此間も或る人が來て申しますには、明治年間の婦人は、おてんばになつて大變惡くなつたと、云ふことを申されました。おてんばと云ふのは、何う謂ふ意味か私共には能く解釋がつきませんが、世間の人は女が學問をすれば、おてんばになるとか、生意氣になるとか申します。併し之は甚だ通じないことだと思ひます一體婦人に限らず男子でも、高等教育を受ければ受けるほど、謙遜すべきもので、決して學問をした爲に高慢になつたり、高ぶつたりする筈はございません、高等の學問を受ければ受けるほど、自分の足らぬことが分つて來る筈です。してみれば女が學問をしたから生意氣になるとか、高慢になるとか一概に言つてしまふのは、誤解であつて、其處に何等かの故障があつて生意氣な婦人や、高慢な婦人が出來て來たものでせう

明治年間の婦人と云つてもなか〳〵範圍の博いことですから、極くあらづかみに申すより仕方がございませんが、明治以前の婦人は、明治年間の婦人に比べますと、反撥力に乏しく、挫け易く、欺かれ易く、何處か間が拔けて居たやうです。女性と云ふものゝ受けて來た習性其まゝに、抵抗もせず、覺醒もせず、同じ天地に、同じ型の人々と相隣り合つて住んで居ますから接觸する範圍も狹し、變化といふものもなく、全く一本調子の、單純な風潮が明治以前の婦人界の大多數を支配して居たと思ひます。處が明治年間の婦人となりますと、それが變つて參りました。弱くては世間に立てない、一本調子では世渡りが出來ない、自分はじつとして居ても、外界からの複雜な刺戟は單純な夢を見て居ることを許さないと云ふところに、自覺の芽が生じたのでございます。ですから以前の婦人よりは、遙

誤つた觀察を以て、直ちに婦人の教育を罵るものは、世の中の進歩を咒ふものでございませう。

虛榮といふこともいろ／＼解釋のしやうがございまして、婦人其人の罪と云ふよりも、社會全體の調子が虛榮に傾き、贅澤に赴いて行くのでせう、之は獨り吾國ばかりでなく全世界を通じて、人間の虛榮心が強くなつたのだと思ひます。之も直ちに教育の罪に歸するのは間違ひで、依つて來る原因はなか／＼遠く且深いものがございませう。

世の中の調子が變つて來たと云ふことに就いて、一つの例がございます。着物のことですが。以前は着物を拵へますに就いても、先の先のことまで思つて、出來る時は一度に幾枚も拵へて置き、お嫁入するにしても隨分一時に澤山拵へて先の用意を考へたものでございますが、當節では其をり／＼で、色合が變り、柄が變り、品が變ると云ふ風でございますから、一時に澤山拵へて置いても無駄になりますから、寧ろ流行々々のものを一枚づゝ拵へると云ふやうになりました、此等も亦虛榮とか何とか云ふ人がございますけれど、一度に不用意なものを幾枚も拵へて置きますよりは、宜しい仕方で、私なども矢張一枚づゝ拵へて居ります。

それから友情と云ふやうな方から申しますと、明治年間の婦人は一般に薄情かと思ひます、直になれ／＼しくなる代りに、直に離れてしまひます。熱し易いものは冷めやすいと申しますから然うなんでございませう、明治年間の婦人は多くの方に自由に交る機會がございますから、その結果博く淺くと云ふ交際の仕方になりまして、早く人を忘れると云ふ傾向がございます以前の方は其點になりますと、知人友人の爲には命をすら惜まぬと云ふやうな深い交際が成立つて、其が一つの美點でございましたが、その代り何の人此の人と云ふやうに交らず、深く狭く友情を保つてゐました。

結婚費用十五圓

辰野工學博士夫人　辰野秀子

明治も初年頃の婦人は、誠に女らしく、おみで、おぼこで、控へめで、內氣で、人の前へ出ると含羞むと云

ふやうな風でしたが、次第に變つて來まして、今では婦人一般に活潑になつて、引込んでばかりは居りません、婦人の世界が別に開けて來たやうで、其なかでも若い女達は思ひ切つたことを話す又思ひ切つたことを行ふと云ふ風で私共でさへ呆れて物が言へないやうなこともございますし、全く片腹痛く思はれるやうな事も多くなりました、併し然う云ふ人々からみると私共が馬鹿に見えるかも知れません。



私の父は九州の唐津の藩士で、浦山奉行をして居りましたが、兄二人は佐幕黨に加はり、函館に脫走しましたので、急に捨扶食になりまして、一家が食べて行くことが出來ませぬ

私は其中に育ちましたのですから、幼少い時から隨分苦勞はいたしました。當家に嫁入つて參つたのが十七の時でした、その當家も負けず劣らずの貧乏でした、です

から嫁に來ると申しましても、木綿の手織衣服が二三枚と、縞繻子の帶が一つと、式に着るものは祖母の小紋縮緬の着物を下着にして、上着には唐縮緬を買ひまして紋を附けて着たので、其外には支度らしいものもないのでした、帶と云つたら祖母が締めた舊い緞子の帶を締めて行きましたので、若し今の方にそんな風を見せたら何とお思ひになるかと、をかしい位です。嫁入るまでは、髮も男髷にばかり結んで居りまして、簪などは挿した事もなく、根がけ一つ持つて居りませんでした。

今でも覺えて居りますが、結婚の費用は只た十五圓で濟んだのです、上着の唐ちりめんが主なもので、外にこま〳〵したものを買求め、簞笥は二圓五十錢でした、兎に角三日目の里歸りも濟まして、結婚全部の費用が僅に十五圓で間にあつたのでございます。

そんなことで、嫁に參りましてからも、畑には出ますし、人の賃仕事はいたしますし、子供を負つて朝の暗い內から、夜遲くまで、隨分能く働いたものです、それでも實家に居りました時から、四書五經などを習つて居りまして、當家に參りましてからも、二年の間寺子屋式の松原小學校に通つて居りました。

其當時の婦人は、老幼の別なく一般に武家風の氣質を具へて居りまして、萬事が武士道でかたまつて居りました、お世辭や交際の下手なことは迚も現今の婦人と比べものにはなりません。その代り卒直で、正義を重んずることは確實なもので、一度思ひ込んだことは何んな困難があつても成し遂げるといふ氣慨を持つて居りました、また一方から云ふと馬鹿正直な處もあつたのですが、それだけ人に信用があつたのです。女同士の間でも何かと云ふと、武士に二言はないとか、武士の女ぢやないかと、頭から武士道を楯にしたものです、隨つて風俗なども朴訥で、着物などもパリ〳〵した手織木綿の外は用ゐない、それさへ自分で糸から作りあげると云ふ風でした。

子供等にも私共夫婦が、苦んでこれだけになつたと云ふことを能く言つて聞かせます。人間は苦しい經驗

を持たぬと、樂みの味ひも分りません、身體を多く使つたものは、使はぬものより強壯ですし、精神も多く働かしたものは、働かさぬものより健全です、樂ばかりして育つたものは、何うしても心身が薄弱で少しの苦みにも堪へ忍ぶことが出來ませんから、樂は眞の樂でなく、苦は非常に苦に感じます、此等の人は眞の人生の幸福を得ることはむづかしいのです初めから富貴に生れた人は、眞に富貴の味ひは知らないでせう、私共が今日此處までやつて來ましたのも、艱難を嘗めましたお蔭だと思つて居ります、殊更に眼前の金錢の收入に氣を採まずとも、絶えず職責を重んじ、苦みに勝つやうにして居ましたら、必ず天運が循環して其人は幸福になるでせう。



出來る方は身分相應になさるのも宜しいが人間は苦勞した時のことを忘れてはなりません、初め苦しく、後樂しいのが眞の樂しい一生です、然う思つて苦勞してゐる方は、つまらぬと思はずに、頓て來るべき、幸福を期待するのが妻たり娘たる人の心得でせう。

一喜一憂

立花陸軍中將夫人　立花寛子

明治以前は只今のやうに女學校と云ふものがございませんでしたから、女子が教育を受けると申しましても、所謂寺子屋へ行つて受けたもので、其教育と申しましても、迚も只今の教育とは比べものになりませんそれはかりでなく、其寺子屋でいろは教育を受けるものも、今のやうに何處の娘でも彼處の娘でもといふわけには參りません。その教育を受ける女子は、今で謂ふ中流以上の婦人に限られたのですから、其他のものは言はゞ、無教育で終つたのでございます。

明治になつてからは學校が出來ました、併しそれも初めの間は今のやうに、數學、地理、歷史を初め理學化學まで習ふと云ふのではないのですから、智育の點は、明治の初年と末年とで大した相違がございます、兎に角教育の進んで來たことは、婦人全般に取つて結構なことで、幸福な時代です。

私は之を喜ぶと同時に、一、憂ふべきことがございます、それは今日のやうに誰も彼も學校へ通へるやうになると、粗製濫造の弊が出來てきます、昔の人は或る一つの目的を立てゝ天才のある人とか、志の強い人とかに限つて學問をしたものですが、今日では雷同的に、誰も彼も行くと云ふ風で、勢ひ學問を輕忽にする風があるやうです。

全體、明治以前の婦人は概して意志が強かつたやうです、尤も奈良朝や平安朝時代の婦人は、意志が軟弱なやうでしたが、それから下つて鎌倉時代には、世が戰國となつて、油斷が出來ない、男子もいざ鎌倉と云ふ覺悟を始終持つてゐましたが、女子も亦一層堅固な覺悟を持つて居たのです。それが明治の初年頃までも

續いてきた所謂武士氣質と稱するものであつたのでせう、婦人でもものかたい貞操の堅固な、時には生命を犠牲に供しても情操を守るといふ精神が、全般の婦人にゆきわたつて居たので、その精神は今後の婦人にも持たせたいものでございます。

德川時代の教育は儒敎が根本でしたから、女德と云ふものを主とし、多少女子を抑へ過ぎた傾きがあつて、智識を高めることをしなかつたと云ふ缺點はありますが、却つて其智識を薄からしめたことが、女子の幸福であつたと思ひます。（ある一面からは不幸といふかも知れませんが）縁附いた以上は、何んな苦しいことがあつても里へは歸らないと決心し、苦痛を辛抱し、不平を漏らすのは自分の恥辱を吹聽するものだと心得て堅く決心の臍をかためて大抵の苦痛は辛抱したものでございます。



處が明治年間の婦人は、一般に自分といふものを主張して、家庭を持つても舅や姑に服從するのは盲從だといひ自分の淺薄なる考から、直ちに家族と衝突して遂に一生を誤るやうな女子が多くなつたやうに思はれます。つまり辛抱氣が薄くなつたのですから、もつと忍耐力を養はないといけまいと思ひます。

引締つた婦人が多くなつた

女子商業學校學監　嘉悅孝子

明治年間の婦人は、果して何んな傾向を持つてゐたかと云ふやうな事は、今少し時日が經つた後に、ゆつくりと考へてみたいと思つて居ります、今お話するのは少し時機が早いやうにも思ひますから、さしあたり其問題に關係したやうなことを二つ三つお話いたしませう。

明治年間の婦人社會で、際立つて眼に立つたことは一般に派手な風になつたことでせう、それは餘り好い傾向でなかつたのです、それが所謂女子の虛榮で、忌はしい風潮でしたが、其を抑へる爲に勤勞を說き、質素を叫ぶものが起りました、一方に派手な風が起つたと同時に、一方に經濟的な、引締つた風の起つて來たのは其爲でした。

引締つた婦人と云ふのは、派手な婦人と反對に、萬事つゝまやかで、風俗なとも淡泊を喜び、着物も着方が上手だとか、お化粧の仕方がうまいとか、一見しても心に引締りのあることが分ると云つたやうな婦人です、斯ういふ風潮は、主に相當な教育を受けた婦人にあつたのです。此等は喜ばしい現象の一つです。

斯く明治年間の婦人の一部に、引締つた人の出て來

たのも、一つは學校などで、帳簿や、家計の豫算と云ふやうなことをやかましく云ひ出したからです、其効果があらはれて、今日では大分各方面に引締つた婦人を見るやうになりました。

又一つには時代の要求にも因るのです、もはや以前のやうに武士道ばかりを唱へて居られなくなつた結果で、生活の方針が確實になつて來たからです。吾吾は此傾向を一層たしかにしたいものだと思つて居ります。

然う云ふ事から私はこんな考



を持つて居ります、帳簿のことですが、帳簿は二通り遣つて、一つはおち〳〵してでは居られぬ忙しい人の爲の帳簿、他の一つは何から何まで事細かに詳しくつけようとする人の爲の帳簿、斯うして置けば、一家の經濟方針は更に確實に立てゝ行ける便宜が多いでせう。

一家の主婦の經濟方針を確實にすれば、其家庭には必ず餘裕が出來ます、餘裕が出來れば、愉快になり、安全になり、慰安も多くなります。

とは云へ私は女の權利とかを

主張するつもりで言ふのではありません。唯女も男と同じやうに役に立つものである、大事なものであると云ふことを實際に示して、女の尊敬を維持したいからです。何も彼も男性と同じにするといふ事は、許されないことで、つまり夫婦として責任を全うすれば、それで女としては充分であると思ひます。

別の話ですが、近頃女子解放とかいふことが行はれ出して、女が夜歩きをするとか、カフエーに入つて酒を飲むとか、男と一緒に物を食べに行くとか、勝手我儘な行ひをする女があるやうですが、明治の初年にはそんな風は斷じてありませんでした、それが明治の終に行はれるやうになつたと云ふのは、明治年間の婦人の宜くない變遷を語るもので、苟くも良家の子女たる以上は、自ら信ずる處ある以上は、ゆめ眞似るべき行ひではないと思ひます。夜間に外出しやうが、何處へ行かうが、自信さへあれば宜いと云ふ方もあるか知れませんが、夜外出すると云ふこと、或る場所へ行くと云ふ事が、既に自信を傷つける譯ではないでせうか。

うめくさ

SSS

▲若い女が多く袴を穿くといふことも明治になつてから▲女が多く物を讀むやうになつたのも明治になつてから▲女の獨身を世間で認めるやうになつたのも明治になつてから▲女が自分で働いて自分でお金を取るやうになつたのも明治になつてから▲外輪に歩くやうになつたのも明治になつてから▲夫婦連で白晝手を引いて歩くのも明治になつてから▲女ばかりで芝居を演るやうになつたのも明治になつてから▲女が立つて物を食べるやうになつたのも明治になつてから▲帽子を冠るやうになつたのも明治になつてから▲海へ入つて泳ぐやうになつたのも明治になつてから▲富士山へ登るやうになつたのも明治になつてから▲絹ものを不斷に着るやうになつたのも明治になつてから▲戀愛と云ふことをするやうになつたのも明治になつてから▲其明治も去つてしまつたが、女はまだ〳〵何うなるか分らない。

乃木靜子と犠牲の精神

日本女子大學校教授　高島平三郎

乃木大將夫人が、夫君の殉死を追つて倶に自刃をされた。乃木大將の殉死についても、亦乃木夫人の自刃についても、問題として考へる時は、議すべき事もあるであらうが、此の際私は其の方面の話をしたくないと思ふ。私は今心から、乃木大將夫人に同情を持つて居る。夫人の生涯を、一貫してゐる美しい犠牲の精神に對して、私は深く尊敬をして居る。其の意味から、私はお話をするのである。

乃木大將夫人の一生は、まつたく自我を沒した犠牲の美しい生涯であつた。今の世にこんなに犠牲の德の高い人があつたかと思はれる程である。まことに夫人ありての乃木大將、乃木大將ありての夫人であつた。

私はいつかモーパッサンの小說『女の一生』と云ふのを讀んだ事がある。編中の女の一生に同情して、涙を禁じられなかつた。それと乃木夫人の一生とは、事はかはるが私の同情はまつたく同じである。『女の一生』は、小說の事故樣々の脚色もあり、道德的でない事もあつたやうであるが、乃木夫人の生涯は極めて純潔な美しい『犠牲』そのものであつた。實に淸らかであつた。意志の非常に強い人でなくては、出來ない事である。

乃木夫人がいかに意志の強い人であつたかは、何か

らみてもわかるのであるが、乃木家に嫁して母と仕へた、乃木大將の母堂は、えらい人であつたと共に嚴格な人であつたらしい。寫眞を見ても解るが、あの嚴格な姑によく仕へる事はよほどむづかしかつたに相違ない。然し夫人は立派に孝養をつくされたのである。

乃木大將にしても、矢張嚴格な仕へにくい人であつたであらうと思ふ。新聞の傳へる處では、夫人が、乃木家へ嫁した時は、大將は婚禮の當夜にもかゝはらず軍隊から歸らない漸く遲く歸る事は歸つたが、酒を飲んでゐてすぐ寢てしまひ途方にくれたと云ふ話などがある。普通の女に出來ぬ貞節をつくされた夫人には多くの苦心があつた事と思はれる。

姑には孝養をつくし、夫には貞節をつくし、其の間に立派に育て上げた處の、二人の令息が一時に戰沒された時の夫人の心中はどれ程であつたかと思ふ。子供を亡くしたものでないと、此の悲哀を深く察する事が出來なからうが、女は年をとるにつけて、何よりも子供を頼みにするものである。二人きりの子供を同時に失つたけれども大將夫妻は私の爲めに少しも悲しまず、却つて、旅順の戰死者の中に自分の子供のまじつたのをせめてもの事として居られた。然し大將には理想があり、いろ／＼考へる處もあつたであらうが、夫人に取つてはどれほどの悲しみであつたであらう。胸中は察するに餘りがある。夫人は一言も繰り言をのべられなかつた。夫人はよく自己に克たれたのである

其の他、夫人は日常の生活に於ても、伯爵夫人の生活をせられなかつた。出來得る限り質素な、切りつめた暮しをして、夫の精神にそむかなかつた。夫人の一生には物質的の快樂などは決して無かつたのである。五十餘年の間、何事にもよく耐へられた。

今度　先帝の御跡を慕ひ奉りて夫が殉死を決心された時、夫人は一旦後事をひきうけて、その最後を見屆けた後に、男に劣らぬ潔ぎよい自刃をされた。たとへ殘れと云はれても、夫人は後に殘つて居られなかつた、あのやうな場合に夫人が夫に殉するのは情として當然であつた。それが普通の女であつても、やはりさ

うしたに相違ない。

夫人の死をとやかく議するものは、よく夫人の境遇を考へて、夫人の心裏を察したならば、夫の跡を追うより外仕方がなかつた事がわかるであらう。

夫人には既に子供もない。僅にあるのは親類位なものである。夫に遅れて何の希望があるであらう。夫人の死はまことに衷心より同情にたへない。

夫人の意志の強かつた事は前にも述べておいたが、彼の最後の立派なのは、何よりもそれを證據だてゝゐる。落付いた決心と、固い意志とがなければ、あの美事な死を遂げる事は出來なかつた。

日本人には、昔から死ぬ事にも名譽心があつた。此の頃何かの譯で自殺をする人が、藥をのんだり、水に投じたり、或は縊死、鐵道往生等と、いづれも醜骸をさらすのをかへりみない。

日本古來の武士道では、それ〲死ぬには方式があつた。腹を切るのでも、咽喉を突くのでも、其の人は名譽を考へてゐた。今回の夫人の死は、女ながら立派にその死に樣をとられた。

今後何か譯があつて自殺をする人間があるなら、せめては、きたなくない死に方をして貰ひたいものである。と云つて何も自殺を進めるのではないが、乃木大將と夫人との最後は、實に立派な手本である。

乃木夫人は生前あまり人々からとやかくと噂をせられる樣に社會の表面に出られなかつた。夫のかげにかくれて誰にも知られなかつたのは、即ち夫人の淑德の高かつた所以である。

夫人の一生は自己のない生涯で、これを昔に見ても亦比類がないばかりでなく、將來には、日本の女性にあたへる教訓が多からうと思はれる。夫人の死に議すべき事はあるとしても、一概に見て論ずるのは酷であらうと思ふ。私は痛く夫人に同情して居る。（談）





肖像畫の話

東京美術學校講師　澤村胡夷

純粹に肖像畫と云へば實人の容貌を寫したもの丶事であつて、支那では傳神若くは寫貌など丶云つてゐますが、我國では古くは似繪と云つてゐたのである。然し廣く云へば人物の畫像はどれも肖像畫の一種と考へられるので、此畫像と云ふもの丶中にも種々の區別があります。卽ちその一として特に歷史上に有名な人物の畫像を畫いたものがある。是れはその目的が單にその歷史的人物の外貌を寫すと云ふに止まつてゐないので、その人物の事業、性格などを研究して、その人物に就ての無形的なる性格を表現しようと云ふ點に存するのであります。それ故に之れは歷史畫の一種と考へる事が出來ますれども、純粹に歷史的事實などを題材としたものでなく、性格表現を主眼としたる畫であるから、純歷史畫とは多少區別せらるべきものです。

又宗教畫に近いもので畫像の一種と考ふべきものがあります。例へば羅漢畫の中には、一つの羅漢の畫像を一幅に畫いてゐたものがありますが、是れなどは純粹な宗教畫、特に純佛畫とは考へられないもので、かの歷史的性格畫とその性質の類似したるものがある。卽ちかの歷史的の畫像に對して宗教的性格畫と考ふべきものであります。

わが國に於て似繪と云ふものが尤も發達したのはまづ鎌倉時代であつて、殊に鎌倉時代の初めには似繪の名人が輩出して大にその手腕を發揮してゐるのであるそのうちでも尤も有名なのは藤原隆信及び其子信實である。當時の遺作として有名なのは山城の高雄神護寺



にある平重盛、源頼朝、參議光能卿などの畫像で是等は隆信の筆と信せらるべきものであります、隆信が法然上人の像を畫いた事は有名な話であるが、その他承安の頃、御堂御所の障子に平野行啓、日吉御幸等の圖を畫かしめられた時、當時の大家藤原光長に大部分は圖せしめられたが、隆信が似繪の名人であると云ふの故を以て、供奉の大臣以下の面貌だけを實寫的に隆信に畫かしめられたことがある。信實も父と共に似繪の大家で、後鳥羽院御落飾の時その尊影を寫し奉り、また後堀河院の命を奉じて北面下﨟御隨身などの影をものした事は有名な話である。後には似繪は人物の肖像のみならず、牛馬に就ても似繪と云はるゝに至つて。廣く實寫的な畫と云ふ意味にも用ゐらるゝに至つたのです。當時の肖像畫は、支那の唐朝の肖像畫法が日本に入り來つて、之れが日本風に醇熟したのでありますが、その後、南北朝頃に至ると、肖像畫の上に新に宋畫の感化を受けたものが現はれて來ました。次で支那の北宗畫が移入せらるゝと共に其作法に依つた肖像畫も現はれて來るに至つたのである。その後徳川の末に至ると渡邊華山、椿椿山などが明淸畫の盛行と共に一種の肖像畫を作るに至つたので、殊に華山は西洋畫法を研究して、東洋畫にやゝ西洋畫的の調子を盛つたのである。椿山は此華山の畫法を繼承したのであります。

鎌倉以前の肖像畫は多くは僧侶若くは佛教に關係のあるものゝ像であつて、鎌倉の頃に至つて上流廷臣の外に、尚ほ武人の肖像が畫かるゝに至りました。足利時代に入つてより以後は、鎌倉以前からつゞいてゐた國風的肖像畫と國風的畫法に宋畫の法の加味せられたものと、其の他に新來の支那北宗畫の法に從つたものとの三種が併行して行はれてゐました。徳川時代に入るも依然として此三種が行はれてゐたので、此外に浮世繪の方面から『似顏繪』と云ふものが現はれてゐます是れは主として芝居の役者の似顏を畫いたもので、肖像畫と云ふと業々しいやうであるが、是れはかの歷史畫的性質のものや宗教畫的性質のものに對して、風俗

畫的性質のものと云ふべきであります。此風俗畫的性質のものは此ほかに當時有名な美女を似繪風に畫いたものも現はれてゐます。谷中の笹森稻荷の茶屋鍵屋の娘お仙、淺草楊枝店柳屋仁平治の娘お藤などの姿を鈴木春信(明和七年六月歿)が畫いて大に世に行はれた事があります。又有名な遊女などが畫かれた事もある。かくの如く一種の風俗畫的畫像が近世になつて現はれてゐます。

西洋畫は戰國末から德川の初期にかけて多少移入せられたけれども、これは未だ盛行するには至らずして一時廢絶して了つた。其後平賀源内、司馬江漢永田善吉などいふ人々が再び西洋畫の研究に從事し、西洋畫風なる肖像畫を試み、次で例の華山などが現はるゝに至つたのである。

概して云へば日本畫は肖像畫として西洋畫には及ばない所がある。從來の日本畫、廣く云へば東洋畫は物體の陰影的辨別や色や光の研究は寧ろ不充分であつて實物の外觀を忠實に描寫することは到底洋畫には及ばない、それ故に源内や江漢以後この方面に洋畫的作法を利用することは大に必要であつたのである。華山の如きは早くも之れに着眼した一人であるが、華山はあくまで東洋畫を基本において、その上に西洋畫法を參酌したのである。此東洋畫の缺點は支那に於ても近世に於て認められたるやうで、支那畫の肖像的性質のものに西洋畫法を參じた作例が往々存在してゐる。朝鮮に於ても肖像畫に西洋畫の法式を混へた作物が現存してゐるのであります。明治に至つて西洋畫法の輸入と共に當初著しく注意をひけられたのは肖像畫であつたが、現今でも肖像畫は洋畫が獨占的位置を保つてゐます。今後とても此傾向は容易に變ぜないでせう

肖像畫と云ふことに就てもう一つ云つておきたい事は、肖像畫は人の容貌を忠實に寫すことが第一義であるけれども、若し肖像畫を一歩深く考へる時には是れだけでは不充分だと云ふ事であります。此外にその人物の習慣、性格等の研究が作家にとりて必要であつて肖像畫は單に外貌の描寫に止まらずに、大にその人物

の内部生活を表現する必要がある。即ち外貌上の肖像であると共に精神上の畫像であることが肖像畫としては大切なことであらうと思ひます。支那に於て傳神と稱せられたのは此意味であるが、是は支那に於てのみならず西洋に於ても必要と認められてゐます。此點から見ると純肖像畫もかの歴史的性格畫など〻殆んど共通なる要素を有するものと云ふべきであります。

* * * *



切子燈籠

横瀬夜雨

ませのうちなる
しらぎくの
うつろふみるこそ
あはれなれ

われらがかよひて
みしひとも
かくしつゝこそ
かれにしか

ゆふべ蚊帳の周りを飛んでゐた蜂はまだとまつてゐやしないかと探したがもう逃げたあとだつた。涼しい朝、朝顔が置いてある。

唐草を描ける青の鉢に、咲いたのは七つほどの櫻の如く艶なる色である。其一つより一花と鉢の縁とを渡さうとしてか、糸を引いて宙に下れる蜘がゐる。

生れたばかりの蚕の大きさで、背には四角に白い線を続らした草色の蜘蛛である。脚の間にはしつかと豆ほとの袋を抱いてゐる。破ればインクをこぼしたやうに散る子らであらう。朝顔はもう末枯になつた。

無心状をおいはに頼まれる。冷々と濡れたる縁に腹這うて書く、盆の拂がおつゝかないので止むをえず政略を用ゐるのだといふ、わづらつて死にさうになつてると書いてくれといふ、卵でも喰べて養生したいが三錢五厘もするのだから瘦せるばかりでと書いてくれといふ、卵の代位では呉れた所で精々一圓だらうと思ひ思ひ、上書を上野國足利郡矢板と‥‥書いてくると、違つてるといふ、だつて八重田とも書くまい、それとも八井田かと言ふと、『やゐんだですよ、あれ筑波にいくらでも居やんさね、さる奴のさるの字へ田をくつつけてやゐんだと讀むんです』馬鹿にしやがる。

夕がた塀の上に蛇を見る。縁から六尺と距らぬさきへだらりと下つた尾を見た時は流石に心もちが惡かつた。左より右へ、文庫藏の庇へでも行く積りだらう、やがてもつこくの枝の茂みに潜み去る。

夜更けて門を叩く者あり。母が起きたらしかつたが

暫くしてこちらへ來る足音が聞えたが眞黒な緣側から琴ちやんが危いんだつて、電信が來たと言捨てゝ、納戸へ行つて了つた。

曉……其死を聞く。十日の月沈まんとして蚊のうなり靜かなる頃である。

『花守』に「ありあけ」あり、嫁がぬ前は本をかゝへてよく遊びに來た柳の蟲を捕つてくれたり、酸つぱい葡萄を持つて來たりした。『詩經』を教へ



て、誰謂河廣曾不入刀、黃河は廣いから渡れないと欺した人があるけれど來て見れば刀(船)さへはひらぬ程狭い川ぢやないか、妾は渡る、渡つて宋の國へ行く宋の國は遠いと人がいふけれど、それもだましに違ひない、いとしい良人の軍に行ける宋の國は爪立すればあれ見えるぢやないか」と講義した時だつたひとへを着てゐた、心もち衿が弛いて、柔かい白い乳のあたりに赤いきれの纏きついたのを見つけた。襦袢ではない、

胴衣もをかしい、しごきを素肌に巻いたのでもあらうかとちらと眼を見ると、氣がついてか引きかくして茫然として笑つた。

柳の葉を蝕む蟲は夜盗蟲に毛の生えたやうなまつくろな奴である、それを抓んで來ては白い綺麗な掌の上を這はせてゐた。ちひさな時はボン／＼の音を聞くと泣き出す人だつた。行年三十二歳。

明くれば十三日。みそはぎの代に飛燕草を剪らしむ中庭の塀の向ひ柚の木の下で、いちが聲で、お母さんこの柚貰つても可かんべと仰向いたなり言ふらしく聞える。何ンのまだ喰へるもんか、にがくて。これこの尼あさういでくんぢやねえ、見ろこれ観音さまがさしまた立てゝ集つてゐンのだぞ、汝やこの頭で佛さま迎へにいぐのかとお初が責めてゐる。

「かうべに宿るはかしら虱、をなじの凹をぞ定めて喰ふ、櫛の歯よりあま降る、苧こけのふたにて命終る」後白河法皇すら長くもをなじ（頂）の虱を謡りたまひき況んやわれ等。

たま迎には父と花兄七と二人のみ行く。暮遅き夕日の中を仄のりと赤るく焼けた弓張が寂しい。

門の前は、西へ行く者、東する者、足音にぎははしく、線香の煙をたなびかして、片手に竹で編んだ机を持つた婆さま達も通る。墓地は村の北の入口と南の外れとに一つづゝ有り、無住なれど東坪には寺もあるので、舊き佛だちはゆふがたまけて、月がうすらに照る頃、西より東より、ふる里の家々に歸つて來るのである。

わが一族の墓は遠く離れた田の中に在る、西南に富士を望み、いぬゐに黒髪山を見る、寂しい木立なので何かと言へば多勢寄集ふ共同墓地が子供の頃は羨しかつた。十年も經れば掘返されて其あとへ新しい人がはひる、南の隅に埋められてあつたのが半腐れの髑髏がされて北の方へやられもするのに、何故羨んだらうまして墓木一つ樹つるを許されもせぬ。村の人たちの墓に對する觀念は、侮蔑では無いが、一片掬すべき尊敬のこゝろは無いのだ。

長城の傍白骨多し、これを耆老に問ふいづれの代の人ぞ。われはわが祖先の由りて來る所を知らぬ、近くは北條なにがしに逐はれて上野の金山より來れりと傳ふ、五百年はかがなへもすれど、千年に至つては茫焉たるのみ。

われ等の父母は二人ながら、祖父母は四人である。曾祖父母は八人、高祖父母は十六人ではないか、十代に遡り二十代三十代の前を考ふれば生も亦不思議なる哉。

太行の南、嵩山の北に北邙山有り、漢以後の帝王名臣多く骨を此に斂めたりと傳ふれど、累々たる馬鬣封いづれが后、いづれが相なるを分くべからずと云ふ、死後百年の名は生前一杯の酒に如かず、祀られざる者ばかりが必ず不幸であらうか。



古き羅馬の時代には子孫の祀を享けざる者は冥府に於て餓鬼の苦楚を甞むと信ぜられた、子無き夫はひそかに妻を友に與へてよりて身れる子を己が子として家を繼がしむる習はしが有つた、誰か一人子なるが故に結婚すと謂ふ流沙河の砂の粒はよみ盡すとも、遠つ祖先の數は知るべからず、われ等は月寒苦小牧のうまに非ず、われ等は約束を待つ

て生れたのでは無い。
夜、月出づ。皎として水の如し。
燈籠の光に引かれてか、月かげに迷つてか、蜂の來ること八たびに及ぶ、盆棚に迷ひ入りて十三佛御影を寫した大幅に止つたのもあつた。衿へたかつたのを父がそうつと掌を伏せて握り潰したのもある。廣間のランプに衝突して羽を焦して落ちたのもある。湯のみに飛込んだのを蠅たゝきを被せてにえ湯を注いで死なしたのもある。脚長なら先の晩腕をさゝれて覺えがあるさう疼くはないが、これは熊蜂だ。初めのうちはランプの下を緩う飛ぶのを見て「小僧」が飛びつき〱したが、一度冷たい鼻の尖をさゝれてから髯びく〱脱んでるばかりで戯けなくなつた。
十四日に法泉寺のだいとこおはして經よませたまふ一同傍について聽いて見たが、みつ齒ぐむ君故か。唯にやむにやむで少しもわからない。ねびくわんせおんと讀むよりか、彼の觀世音菩薩を念ずればとなせ訓まないのだらう、汝元來浮木の如しと引導を渡す時の文句は多少わかるけれど、といつだつて思はぬ日とてはない。
茄子、きうり、稻、まめ、例の月足らずをまねらすうどん粉を揑ねてこしらへる佛さま達の笠を母は忘れなかつたらうか。
入りかはりに線香上げに來る人がある、寢てゐては濟むまいといふなら部屋へ行くばかりだと度胸をきめてゐると、木挽の倉公が來る老來ます〱健にして又とこからかおもひものを見つけて來た、いつか廻國に出る時、作つてやつた中將姫の歌を、「まだ忘れはしませんから」とチン〱鉦を鳴らして盆棚の前でやり出す。なむ大慈大悲の觀世音から初まつて、大和の國宇陀の郡のうかし村…蓮のまんだら木ぼりの像、拜まれ玉ふぞあり難き、奇妙頂來まで、水ものまず、鉦とかけ合だから賑かだ。中將姫が乳母とたゞ二人山に籠つて、讀經の外はなかりけりとした條がある、先生そこまで讀んで來て、なるほど女二人で度胸がいゝわけですねと感心したので大わらひをしたつけ。木挽の

あひまく\に笈摺を背負て坂東をめぐり歩いて御詠歌で女を張るのだ、今つれて來てゐるのは盲だけれと年は半分ほと若し小ぎれいな婆さんだが、爺さんの聲にほれた一人なのだといふ。

いざ巡禮といふと百人位の同行と村から村を巡つて歩く。多く後家かとも思ふが、中には赤い手柄をかけた者も交る、觀音様をかこつけに笑かしやあがる。

忘れてゐた「遊び人」を軒に吊る。

よの中を何ンのへちまと思へとも



ぶらりとしては暮されはせじ　葛の葉

房の中から下げたたん冊はもとのまゝである、ほの暗き軒場の暗を通して、夢の如く明るくなつて行くらふそくの灯よ、周に描ける七草は、紫に青に、さうして黄に、寂しうわが面を照す。

庭には石の燈籠もある、吊らば吊るべき金燈籠も倉にある苔むすまゝに年々磨滅し行く雪見燈籠の笠も悲しいけれと、種々の細工を施した扉のぼろく\に錆びた鐵燈籠にもわびしい思ひ出は有る。

當時我酔美人家 美人顔色嬌如花 今日美人棄我去青樓珠箔天之涯娟娟姮娥 月三五二八盈又缺翠眉蟬鬢生別離 一望不見心斷絶心斷絶幾千里。噫嘻、女とは何ぞや。

おもて白き豕となりて其軀を一匹夫に汚しながら生のよろこびを誇るは女である、父の手より夫の家に賣られて身るべく侮辱されながら、さかしまに孤棲の人を笑ふも女である。空しき處女の誇りは知らず、天下いかなる人妻かおもひを童貞のむかしに馳する時、白かりし夢を戀はざらんや。あはれむべきは彼等を冷笑し得る者たゞ處女のみである。

夜の花曲輪に咲けばおくれじと人の妻等も眉をそそ畫け

王の墓發くでししよがいかりもて白き尸むちうたんかな

女みな白きかばねとなりにけりくみ戸のかげのくつしよんの上へ

孤子の物ほしげなる色よりも寂しき目やと母のかなしむ

娣はみたりとなりぬおもひ妻秘めて三年をわれ忍ぶがに

檢非違使の廳も知らじ血にて捺せし君が指紋の美しき文

十五日の夜、花兄七に負はれて南の縁に出づ、月光晝の如し。

母のむいてくれる梨を歯を痛がりながら三人鼎坐して語る、灯はまた蜂が怖いので燈籠だけにする、諒暗の秋なれば流石に盆踊の太皷もせず、雲帶の如く天の一方に横はれど、月はわれ等の全身に、盆の上なる梨の子に、さてはガラスの片の光にかとも思ふ庭の面に秋は露しげき夜となつた。

七人の同胞の法事の時ですら滅多に揃はぬ事、二十四年前、孝の生れた年にひいおばあさんが亡くなつてから、家に不幸が無い事、吉田の姉さんの家では男の埋まる墓と女の逝く墓と別なのはいはれが有る事（それがや偕老の娯は果しても同穴の契は全からずだね

と七が洒落れてお母さんを吹き出さした）などしめやかに語る。

七は施餓鬼の話を初めた。今日暑いさ中を千明寺まで行つたらまだ始まらないので、境内の杉木立の中を歩いてゐたら、書生さんが施餓鬼に來るとは珍らしい何處からお出ですかと五十位なてくめいな爺さんに訊かれた、「横根です。」「あゝ横瀬さんからですな。あれ見えるでせう、本堂の大屋根の上に巴の紋を打着けた金具を、あれも昔お宅で寄進したのださうですよ」と教へてくれた。今でも僧正樣が乘るといふ鋲打の籠が囘郎の脇に吊てあつた、あれもうちからのださうですねその籠は確に古典的だ、滅び行く佛法と相俟つて坊さんの乘物にはふさはしいと思つた、式の長たらしいには弱つた、權僧正以下、頭のうしろの方へ長いのや、でこまひつてましてるのや、剃り立てもあり、二分位延びた意氣なのもあり、冬は嘸こたへるだらうと思ふ程えりの長いのや、あゝして並べられて見ると、頭もきれいですね。しびれが切れるので、とれか一つカンと喰はして見たいなどゝむづくくしてると、燒香が初まつて、ノッケに大寶村横根横瀬忠右衛門殿と呼ばれたにはまゐつた。だつて黒子の山中さんもゐれば、母坂――朧波の江村の大盡ドンも控へてゐる、おれの容子を見ておいて、養子に貰はう、娘をくれようと思はぬ限りも無い、何のシトと思つて壇の下へ進んで、金光燦たる大位牌に敬意を表しましたと言ふ。

銀河、淡としてなゝめに中天にかゝれるを見る。月も良し、夜も良し、わが心何ぞ晴れざる。愁然として破局の前なるわが戀をおもふ、風宮城野の露を拂ふ時色いかに萩が花妻。

* * * *

はなゝるひとのこひしとて
つきにないたはゆめなるもの
つらけれと――もみぢあやなすあしほろ
のふもとにいまはかへらうよ
やぶれだいてはたゝけとならぬ
おつるなみだをしるやきみ

――やう――



わが少年

原田琴子

うら寒きされかうべのみ目にうかぶ靜にわれを究めんとせば

別れんとおもふ男に送られてかへる山路を秋の霧ふる

敵とはまだならぬ間に別れましたゞ見る人とならん願ひに

人の上に涙そゝがずわが泣ける涙に人の來ておぼれける

み唇もて更に酒をばふくませよ火もなほ涼し秋の夕ぐれ

うらむべししづく殘さずのみほして杯ばかりたまはるものか

思へども逢はねばうしや君が戀はたわが戀と立ちわかるらし

すなほなる女となりぬ別れんといへばすなほに別れ來るまで

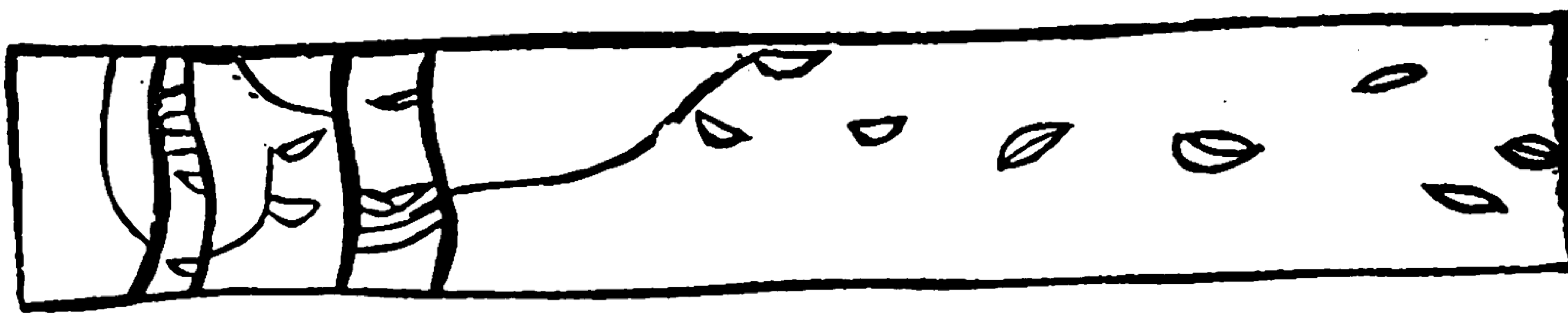
死をよしと口にする時みづからを欺くことの大なるかな

もとすゑのあらぬ戀こそうれしけれ旅にて旅の人思はずや

この玉はたえずまろびてあるところ定めず人のとるよしもなし

草花の小さきをとりてほろ〳〵と涙こぼせる少年もよし

むつかしき誤おはされてかへり行くわが少年のあはれいたまし



花壇（つゞき）

窪田空穂

初夏のさわやかな頃、私の住んでゐる山の手のひつそりした通りを、苗賣りの涼しい呼び聲が聞えてくる。それは都會の生活に馴れてゐる者の、言ひ難いまでに季節の趣を感じるものだと聞いて居たが、私にも其趣が感じられた

或る日、一人の苗賣を呼び込んだ。さわやかな感じのする、藁で拵へた小さな箱の中には、さまぐ\な苗が、怯えて息を呑んでゐる生き物のやうにして入れられてあつた。朝顔、絲瓜、コスモス、蝦夷菊、唐黍の苗までも買つた。これを植ゑるといふので、私も、家の者も、小さな男の子も、喜んで騷いだ。

花壇はやゝ賑やかになつた。夕方は水を灑いでやりに庭へ出ると、小さい子も必ず一しよになつた。

「花が喉がかわいて、ちやあ/\飲みたいつて。」

如露の口から散る水と、私の顔とを見較べたから、さう言はれと小さい子は眼を見張つた。

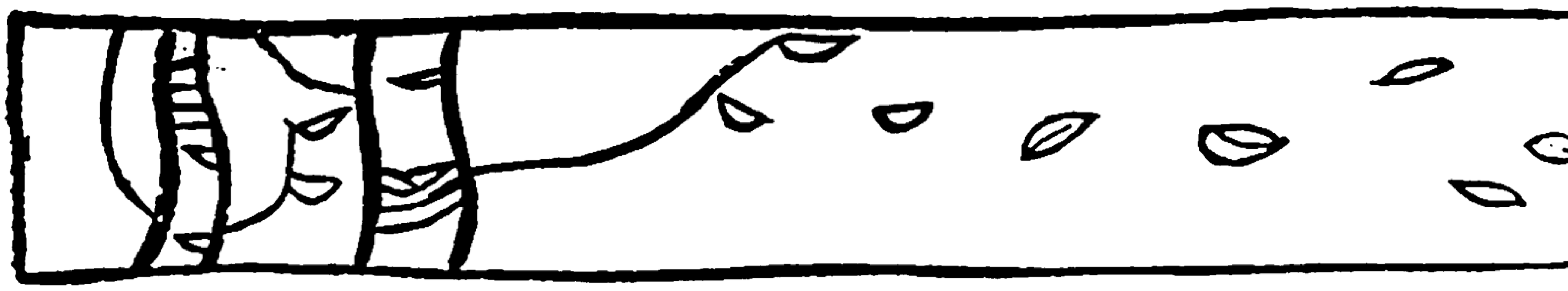
「花を取ると、痛いつて泣くね?。」

「さうだろ。取つちやいけないよ。」

親子の會話を、家の者は緣の柱によつて笑ひながら聞いて居た。

「さういふ事がお好きですかね?」

門を明けてはひつて來た洒落れた夏帽を冠つた人は、花壇の前へかゞんで雜草を拔いてゐる私を見て不思議さうに言つた。其人は此頃まで



育種場主と刷つた名刺を持つてゐたが、今は止めて、他の何かの事で歩き廻つてゐるらしい。

「草花の種を上げませうかね。どつさり有るから。尤も時期はおくれてますがな。」

其れぎり忘れてしまつた種は、二十袋ばかりも郵便で送られて來た。

私はそれを花壇の空いてゐる所へ蒔いた。細かい、よく見ると其れ〴〵の艶を持つた種。手に載せると指の間をもぐつて行つて、何所かになくなつてしまひさうな種。覺束ない氣のある種は、私の手から土の上に零れた。零れると共に全く眼にもはひらないものとなつてしまつた濕ほひ渡つた黑い土、夏の近いのを思はせる白くちら〳〵とした日光。私は縁に腰を掛けて、花壇を見やつた。種が手から零れて行つた時の微かな感觸が、靜かに思ひ出されて來た。不安と期待とのまじつた感じが胸に漂つた。

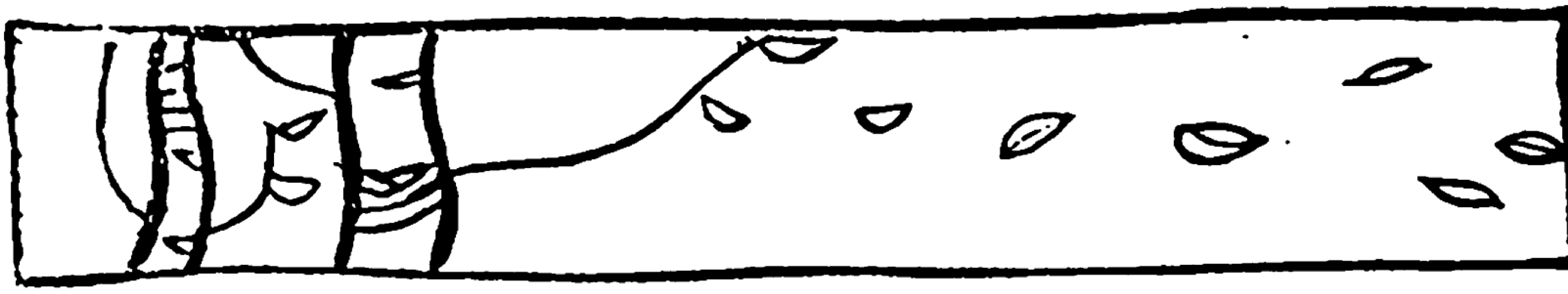
「生えないのか知ら……」私はさう思つてはよく花壇の上を眺めた。他の草は伸びて、花までも附けて來た。が私の蒔いた種は生えて來ない。

「駄目だ」と諦めた頃、ふと濕ほつた土の上に微かに青いものを認めた。立ち寄つて見ると其れは若芽である。柔かい二葉の草は、ぞく〳〵と揃つて生えてゐる。眼を移すと其方にもある其方にもある。二十種の種は、半分くらゐまでは一時に生えて來た。

若草の伸びて行くのを眺める樂しさ、何んな草になり、何んな花を付けるとも分らない。草は、次第に其れ〴〵の形になつて、雨に霑れ、日光に照らされながら育つて行く。

花壇のまはりを繞つて、縁に腰を掛けて、又其上を眺めてゐると、私の胸には、晴れた空に雲の湧くがやうに、一つの顏が浮かんで來る。

それは何年か前に沒した老人である。縁者で私は其家に暫く暮してゐた事がある。老人の話



と言へば、野菜を作る喜ばしさ。其事を話す時だけは艶の無かつた眼にも、若々しい色が浮んで來た。

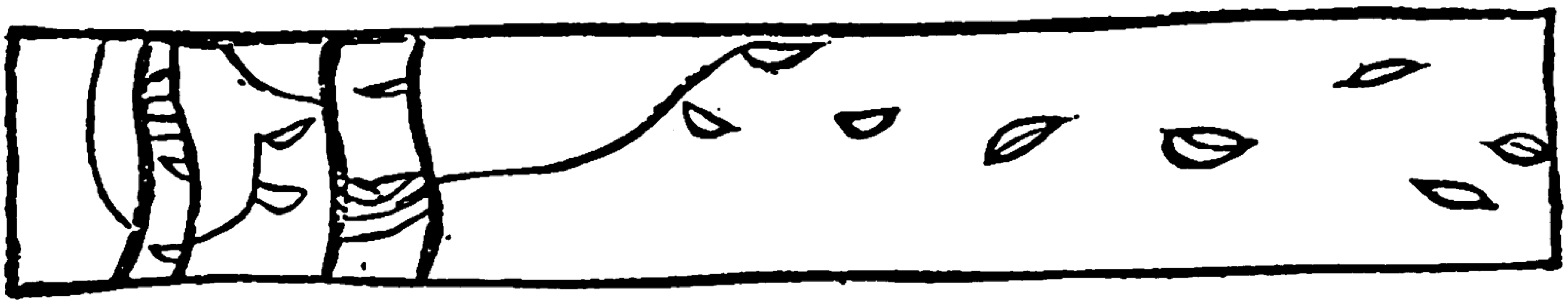
何時か私は其話をうるさく感じ出した。それは私の十七八の頃、自分の胸に描く夢より外には、値のある何物も無かつた。夢であるが故に尊かつた。野菜を作つて老いて來て、もう生涯も終らうとしてゐる人。さう思ふと私は老人の禿げ上つた額際を、あはれみに似た心を持つて眺めずにはゐられなかつた。

「朝、畑へ行つて、霜よけの蓋を取つてやると瓜や茄子の苗が、から、ぞく／＼と揃つて頭を上げてる。これを氣散じな、いゝ氣持のものは先ず無えね……」

言ひ難い喜びをあらはした老人の顔は、今一度私の胸の底に浮んで來た。

農夫の心。その心は私にも感じられる。彼等が田と畑とを相手に取つて、疲れて、倒れて、しかも悔いないでゐる心が感じられる。多くの命ある物を我手に握つて、其命の一つ／＼が育つて行くのを眺める喜び、其中に覺えさせられる愛着。

時は花壇の上を靜かに移つて行つた。福壽草の枯れる時には、スノー、ドロップは消えたやうに見えなくなつた。三色菫は咲く程咲いて、枯れて行つた。百合も咲いて散つた。何時か其所には夏があつた。筑波朝顔が咲く。桔梗が咲く。松葉牡丹が咲く。カンナの花が、眞紅に黄に咲く頃は、葉鷄頭も伸びて、若葉は、絶えず眞紅と黄のまじつた燃えるやうな色を吐く。撫子、カーネーションなどがつゝましく咲く傍に、おいらん草の純白と桃色とは、目覺めるやうな鮮かな色を以て咲き繁つて行く。垣に這はせた朝顔も、夢に似た水淺黄と、愁ひに似た紫と、笑ひに似た紅とをまぜて咲く。朝の風が涼しく其蔓を動かすと、其垣から屋根の上へと



伸びて行つてゐる絲瓜の蔓は、二つ三つ附けた絲瓜を重さうに垂らしながら、一しよになつて驚いたやうに搖れる。

小さい子と女中とは花壇を眺めつゝ話してゐる。

「さつきの赤ちやん可愛いね、貰つてくとよかつた。」

「お内にや何故生まれないのでせうね。」

小さい子は考へるやうな顔をして居たが、

「種蒔がないせいかも知れないよ。……あの空いた所へ蒔くといゝ、ねえ。」

女中は笑ひながら小さい子の指さす花壇の上を見た。

「坊ちやん、何所から生まれたんです。」

「花の中から。」

「まあ？」と女中は笑つてしまつた。

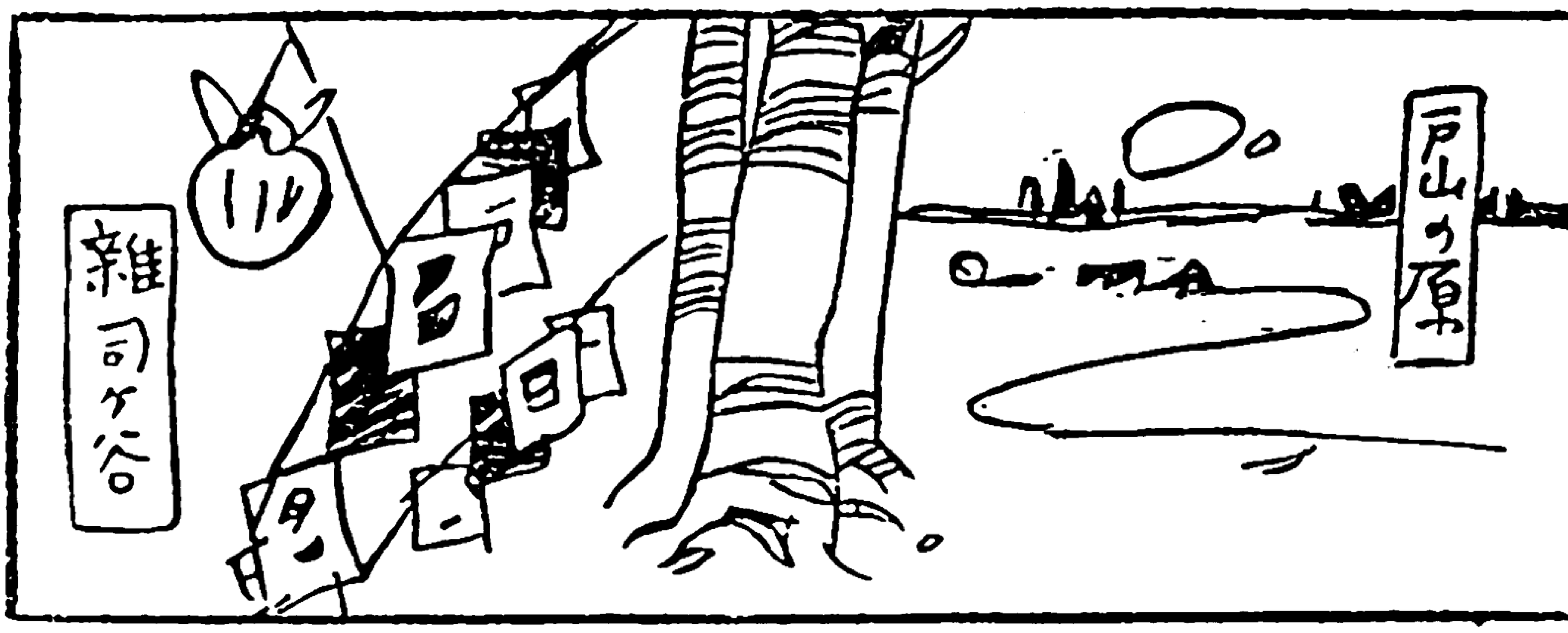
花壇は荒れて來た。花は實になり、實はこぼれた。醜い莖と莖とが立つてゐる。

なよ／＼と風に靡きやすいコスモスの莖に較べて、紫苑の莖の何といふ強さであらう。強くすつと立つた姿は、細い槍を立てたやう。そして烈しい風の吹く秋を待つてゐる。其頂きに、細かい蕾を見出だした時には、秋海棠も葉裏に薄紅の蕾を隱してゐた。

朝顔の花は小さく、夥しく咲く。

夕方には早くも葉の上に露が置いて、濡れた葉は涼しい風に飜されて音を立てる。其町には細々と蟲も啼いてゐる。（終）

私は原宿で家を五度變つた、其内の三度までは變る毎に後へ花壇を殘して來た、花壇ばかりは移轉に持つて行けないから餘儀ないことだ、然るにても後へ入つた人は、花壇を愛する人であらうか何うかと毎も其樣事を思つてる。（靜客）



東京往來（號外）

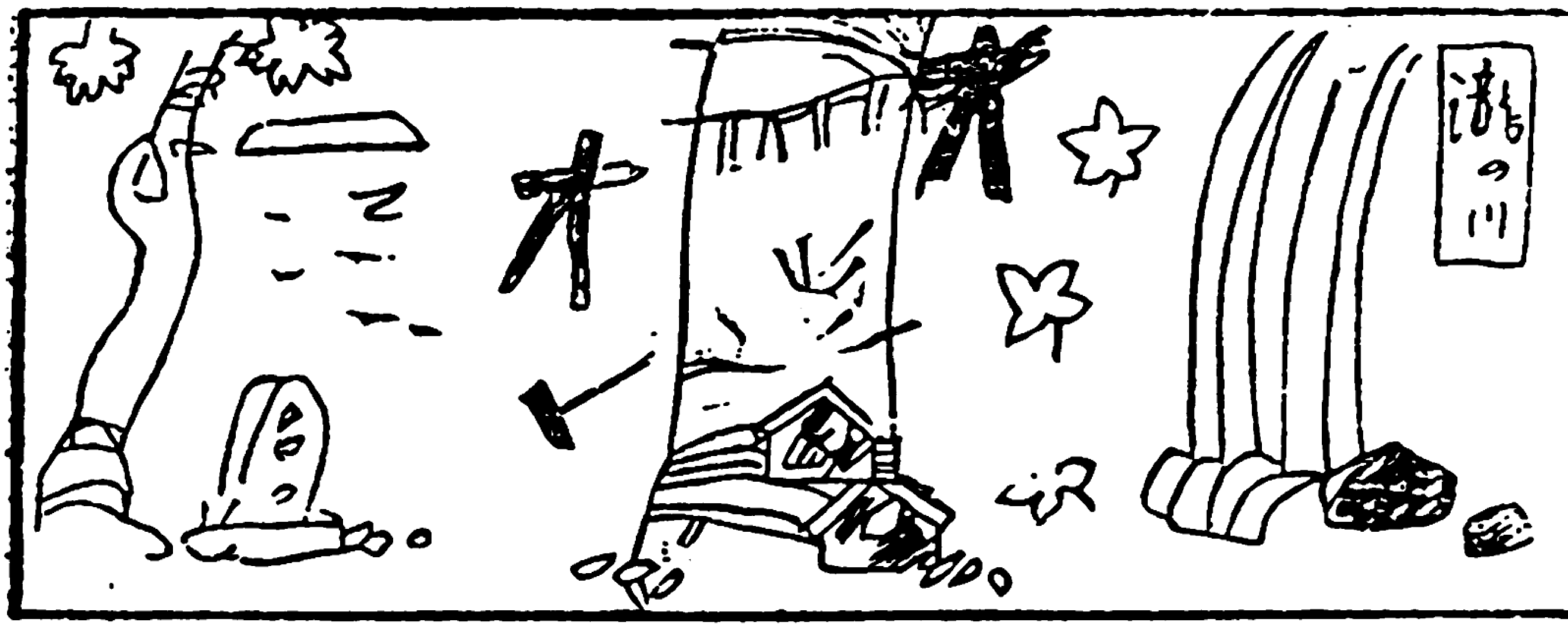
郊外一週記（下）

外島涙之介

▲澁谷は近頃目に立つて開けて來たが、駒場の農科大學は昔から在る。運動會が有名だ、駒場につゞいて代々木となる、廣い練兵場と御料地がある、丘の傾斜や森の隱顯が油繪宛然だ、西洋風の郊外だ。更に北すると甲州街道及び青梅街道に出る、新宿が追分になつてゐる、此街道は昔の江戸の入口を忍ばせるが、舊い頽廢した町並で、同じ江戸の入口でも陰氣だ。東京水道の給水所がある、所謂玉川上水で、水は府下、拜島羽村邊から多摩川の一部が分れて來る、給水所附近に十二社權現がある、十二さうと訓む、古い池の周圍に新しい掛茶屋が澤山あつて、東京の人が遊びに來る。

▲新宿の停車場から北に山手線の鐵路に添ふて行くと戸山原に出る。昔の武藏野が庭園化されたもので、秋風に靡く女郎花や人身を沒する薄も無いが、小丘の起伏、雜木の姿等は武藏野古圖を閲る樣だ。四季をとはぬが殊に秋晴の日には派手なパラソルや、下髪の人が寫生中の畫家を圍んだ組が必ず二三ヶ所はある。

▲戸塚の次は目白で、坂上に學習院も女子大學もあるが、高田通を北に雜司谷の鬼子母神の大欅の並木に懸ると、尾花細工の木兎や燒雀の看板が目に附き、落葉の香



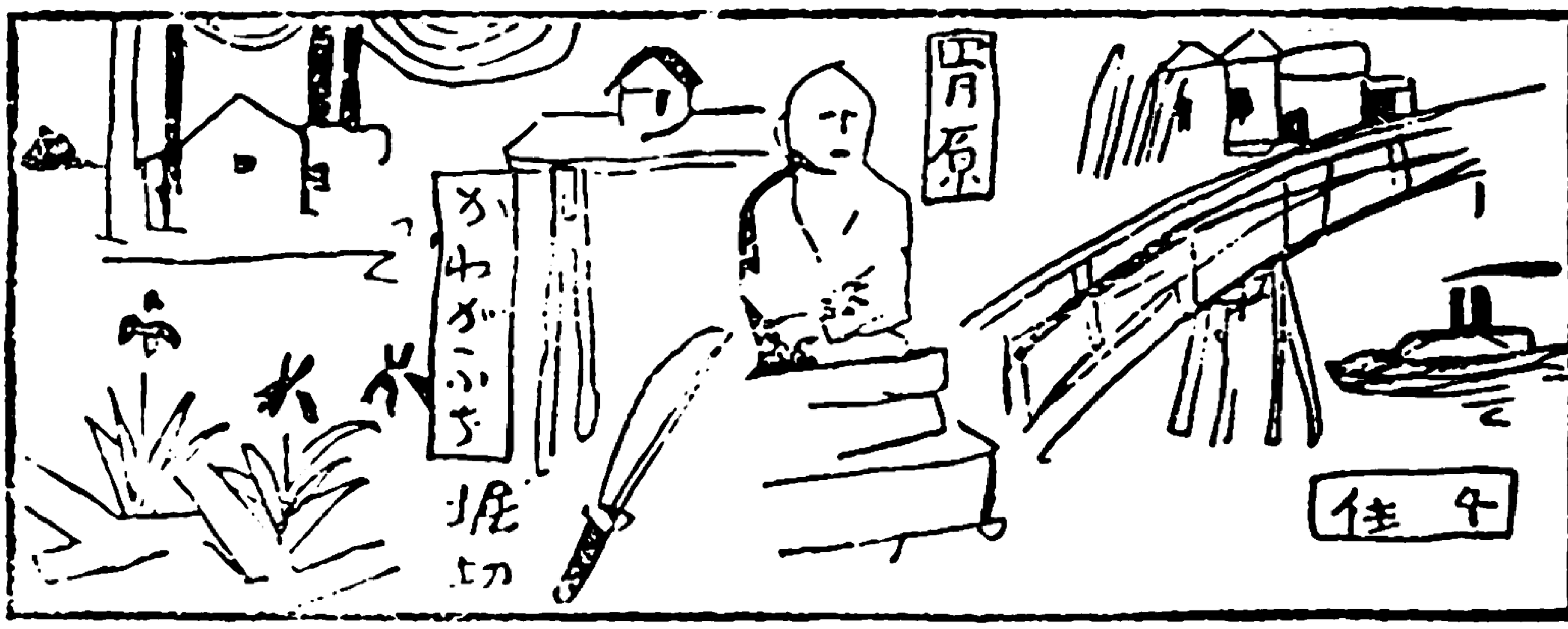
が胸をすかせる、楠木正成の女の墓より法明寺の林中にある古い鐘樓が面白い、其鐘には度量い銘が銘られてある。珍しいものだ。

▲大行院を抜けて北に行くと右に巣鴨監獄の高い赤煉瓦が畑中に目に附く。半里も行つて板橋町に着いて振返つても猶見える。長い町を左に中山道を行つて瀧の川の上流の橋を渡ると左側に北齋の繪にもあつた直徑四尺程の縁切榎がある。枯て洞だが現に錆た五寸釘が傷い程打込だのが殘つて居る。若い女の亂髪で木葉も眠る丑滿時忍ぶ足で……槌の音が聞える樣だ。然し今は圍がしてあつて女髪や願額や七五三を張つた奥の堂から線香の煙が漏れて居る。昔は第六天の社があつたらしい。

▲此の道を猶一里で千葉自胤の一族の隠岐守の居た志村城の跡に出る。今は熊野神社と小學校になつて居るが幽邃で古木も多く砦や濠の跡も分る。北方は十數丈の崖で三井、丸の池は田の中にあり、荒川は銀帶の樣で櫻草の多い浮島原も見え、蕨宿は渺として居る。

▲志村から南へ一里弱、稻附に靜勝軒太田道灌の砦跡であつた靜勝寺に道灌の二尺許の坐像がある。頭は剃つて左膝を立て右手に拂子を持ち桔梗の紋の黒羽織、淺黄の法服で帶刀は左に置いてある。歴史上有名な像だが知つて居る人が少い。

▲寺を出て右に行くとすぐ石神井川に出る。川に添うて登れば右に王子權現の丹の拜殿や有名な王子舞をする舞殿が常磐木の間に見え、川を隔て左に金剛寺や瀧川園の紅葉が色を競うて居る。小橋の側に一番古い瀧と貝塚の白い貝が現はれたのがあ



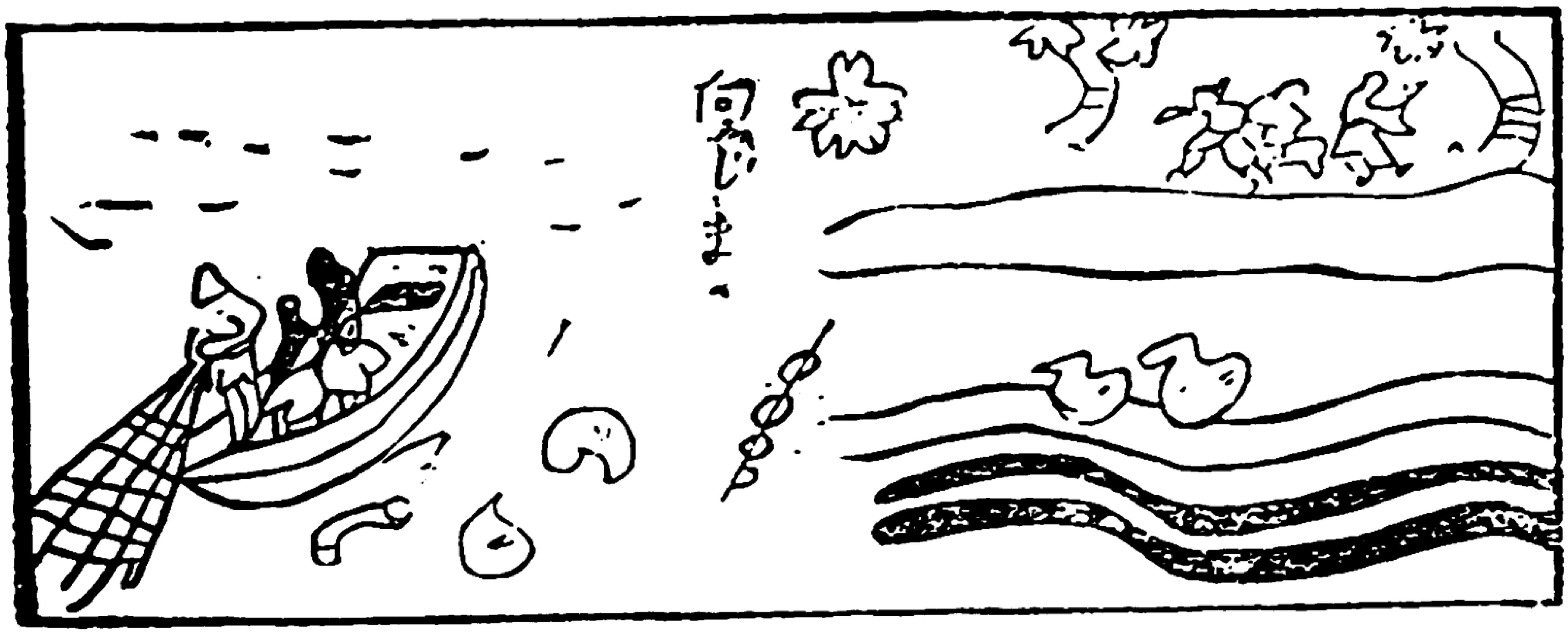
る。此邊一帶殆ど畑で塔は七ヶ所、貝塚は二三ヶ所ある。都の人には夏秋の適當な遊び場所だが雄大の趣に乏しい。金剛寺の境内に樺太の開拓者近藤重藏の自ら命じて造らしたといふ、三尺許の甲冑姿の石像がある。重藏が閉居の原因となつた有名な像であるが顧る人が少い。雷汞場を右に見て數町行くと飛鳥山。

▲飛鳥山公園は全部芝原で、古い櫻と松との外に木は無く、唯中央に飛鳥山の碑と佐久間象山の「櫻賦」の碑とがある許りである東方は數十丈の崖で下に王子製紙場其他の工場が集つてあり、眼界濶然と開けて隅田川は長く、筑波山は遠く紫色に霞んで見える。

▲公園の南隣が澁澤男爵の邸で、その續きに西ヶ原農園も、農事試驗場も、一里塚も道灌物見の跡や、砦跡や、又田端日暮里の崖下迄古くは海であつたと云ふ舟繋松もある。此邊の崖は昨今截り取られるので斷層がよくわかる。

▲王子の町を抜て田の道を行くと荒川(隅田の上流)の豐島の渡に出る。渡れば濃艶な八重や五色櫻が向島迄續いて居ると云ふ、名も美しい江北村で、川岸の野には雲雀や葭切の聲は春から夏の終り迄聞かれる。又別に王子から田端へ出て大根の名所三河島村の畑の道を行つて左手に東京一の日暮里火葬場や胞衣會社、千住製紙所等の煙を見ながら南千住へ出る。之が奥羽街道で、昔の名殘の殆と滅亡せんとして居る古い遊女屋の軒並に殘つて居るのがあはれである。

▲竹ヶ原の刑場は南千住停車場の側で今は跡に大きい石の孤地藏がある。首斬地



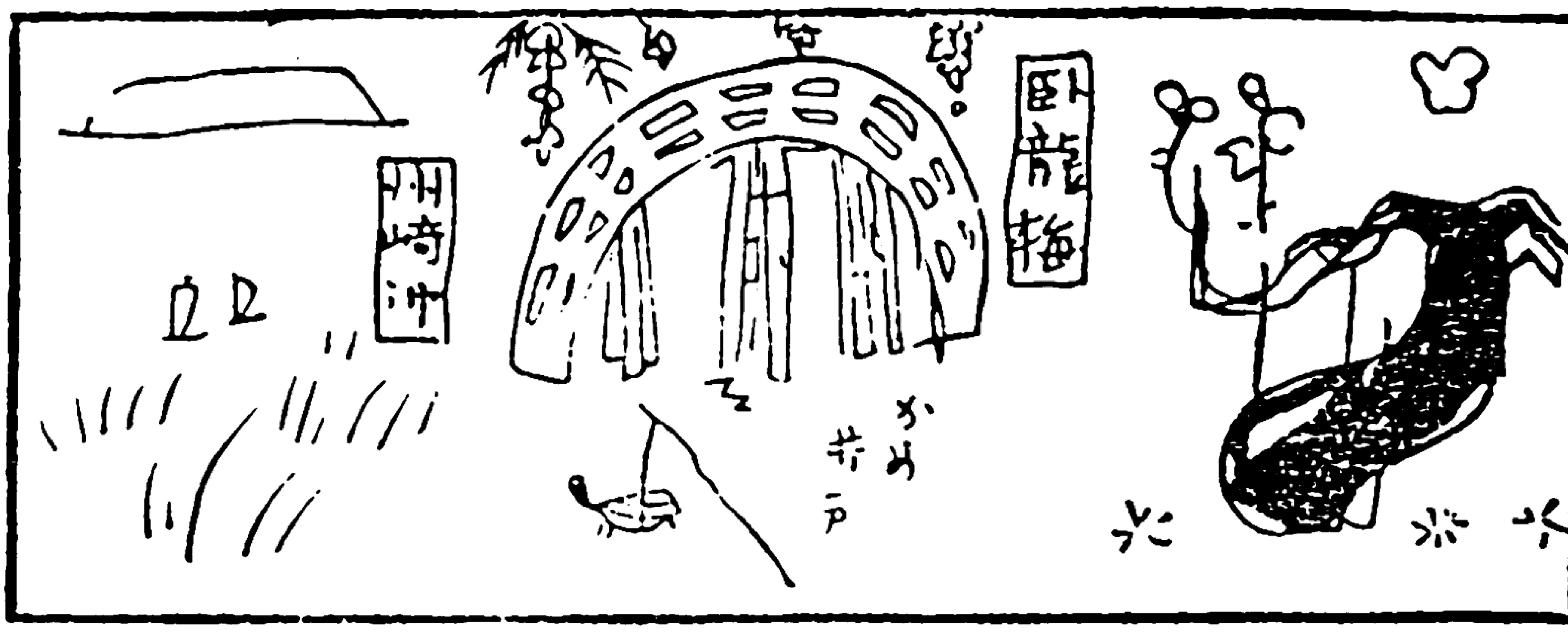
藪と呼ばれ汽車や電車の窓から見える。濕地で無線塔が多い。昔首斬淺右衛門が代代毎日何度となく新刀の大きなのを閃した處で八百屋お七も此處の露となつた

▲汽車の踏切を越えて左に小い「報國塔」とした橋本左内の墓があつて、側に大きい碑がある。彼は同じく骨ケ原の露と消えたのである。南千住へ這入る處が大橋で、洪水の度毎に落るくと心配され毎年土俵の重で漸く流失を免れて居る昔ながらの姿で木橋中段も長い橋である。渡ると北千住で青物市場を過ぎて右に折れる。

▲小菅御殿跡は畑の中に左に見える赤煉瓦塀で、今は小菅集治監となり不良少年の感化處であるが、德川時代には幕府の籾倉で、明治初年には東京の士族連が煉瓦製造所にして失敗した處である。此邊雜木はあるが武藏野の面影は少く、水郷に近い感がする。春の散歩にはいゝ處であるが景色は平凡である。

▲猶行けば綾瀬町で綾瀬川に出る。昔は合歡の名所で堤の合歡の木陰は涼しかつた、毎年の洪水に荒されて今は新しい堤に若い櫻の並木と變つた。彌五郎橋の上流から右に引舟を通つて小松川に通ずる四五間幅の河が古角田川であるが、昔の面影は無く泥深さうに靜に淋れた河筋になつてしまつた。

▲彌五郎橋から左に行くと堀切村で、至る處に植木屋があつて、菖蒲の多い植木屋は數軒集つて互に客を呼ぶ。水郷だけに目黑大久保邊の園と違つて面白い。隅田堤の方に行くと鐘淵紡績の大建物がある。工場がなかつたら古鐘が河底に響く音も詩かな此邊の空氣に調和したらうと思ふ。此邊は八重櫻が多いが觀る人は少い。



▲謡曲「角田川」にある木母寺の梅若塚は萩と芙蓉が盛で堂に梅若の木像がある。近く隅田川神社（水神といふ）があつて境内に八百松（料理屋）がある。猶堤を行けば小松川公園天下の糸平の大碑と白鬚神社等がある。人は此邊から徳川（水戸）邸の枕橋迄を向島と云ふ。向島には牛御前も言問の團子も長命寺の櫻餅もある、又七福神も堤の内に點々七ヶ所あり。百花園は秋に好く、徳川時代の所謂風流な趣を傳へて居る。

▲小梅の泥川に沿ふて東一里、吾嬬村の吾嬬森神社は橘媛の亡骸を葬つたと云ふ傳説である眞僞は別として東京に最も近く最も古い完全な掘らない古墳である事は事實で、嘗て曲玉が澤山出たと云ふ。此處から北に木下川の梅園があり、川を越えると龜戸天神に出る。天神は今は郊外でなくなつたけれど境内の池や藤棚や太皷橋や張子の龜子や名物の葛餅などから押せば野外の様な氣がする。

▲龜戸停車場から千葉行に乘れば間も無く柴又帝釋天、三十分許で江戸川を渡つて市川町に着く、眞々手古名の寺。眞々繼橋、眞々井は形だけあるが眞々入江は跡も無い。八犬傳に名高い里見城跡（今は公園）は江戸川の崖上にあつて里見の墓も堀も殘つて居る。所屬は千葉縣であるけれど北方の王川、西方の六郷とこの南方の國府臺は東京郊外三方の遊び場として推稱するに足る。

▲江戸川と中川の數里の間は丘さへも無く、太古は泥海であつたらしい。洲崎の海岸に立つて遠望すると靜な淺い海と云ふ國の外側の 考 も浮ばぬ。又實際の海も淺いので、追々埋立られては郊外の一部になつて行く。

諸國名物類聚

加賀 菅笠 錢

播州 赤穗鹽

土佐 勝男武士
陸奥 仙臺平袴地
薩摩 上布帷子地
尾張 瀬戸物染附
阿波 藍玉
山城 京西陣織殿
備後 疊表
美濃 美濃紙
薩州 國府煙草
紀伊 熊野鯨

博多 煉利酒
飛驒 位山の櫛
豐前 小倉帶地
尾州 鳴海絞り
若州 馬腦石
安藝 廣島鑢
山城 八幡黑
下總 結城木綿
大和 三輪素麪
越前 雲丹
美濃 岐阜鮨
紀伊 根來朱

行司

山城 稻荷松茸
越前 色奉書
大和 吉野葛
江戸 錦繪
甲州 葡萄

紀伊
山城
尾張宮
攝津
常州

松前 厚板昆布
筑前 博多織帶地
北越 縮上布
備前 備前燒附物
會津 生掛蠟燭
上野 桐生織殿
下野 宇都宮蒲莚
周防 岩國半紙
上野 館煙草
陸奥 松前鮭

備後 小野道保命酒
甲斐 黑柿
信濃 眞田帶地
筑前 博多絞
甲斐 水品石
奥州 南部鐵瓶
播磨 姬路草
下總 銚子縮
信濃 更科蕎麥
尾張 海鼠腸
近江 源五郎鮒
奥州 津輕塗

伊勢 稻木紙煙草入

伊豆 椎茸

宇治名茶　蜜柑
重大根
伊丹名酒
西之内紙

勧進元　江戸紫
差添　京紅鹿子

和田信次郎氏藏

山城 加茂川の鮎
江戸 鰻蒲燒
松前 オットセイ
河内 道明寺糒
木曾 お六櫛
相模 江の島貝細工
阿波 鳴門鯛
豐後 九年酒
近江 伊吹艾
下野 日光柒盆
東都 淺草海苔
北越 高田水飴
肥前 五島鯣

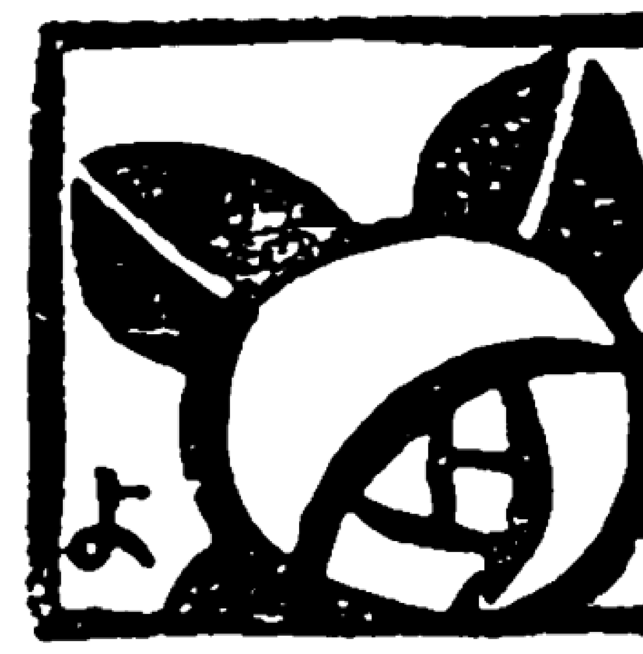
伊勢 桑名の蛤
三河 吉田ほくち
駿河 小吉田清
武藏 隅田川櫻餅
伊勢 ひじき
遠江 白須賀白すぼし
江戸 御殿前天王狂だんご
神奈川 龜の子せんべい
遠州 相良布
伊豆 熱海雁皮
駿河 山川白酒
難波 虎屋まん頭
相模 小田原しそ梅干
山城 壬生京菜

東海道 燒餅坂の燒餅
駿河 あべ川の五文どり
遠州 日坂のわらび餅
武藏 つる見の梨子
江戸 恵方のまゆ玉
草津 女川なめし
小田原 ういろう(藥)
上州 高崎目白
まり子 とろゝじる
駿河 朝くら山椒
堀の内 麥こがし
下總 西瓜
岩槻 ねぎ
谷中 せうが
川越 ふさうつ

下總 利根川の鯉
京都 鰻蒲燒
近江 赤牛味噌漬
奥州 南部疊
箱根 湯元細工
山城 竹田人形細工
駿河 興津鯛
肥後 八代蜜柑
近江 鳥居本赤玉
駿河 木地臘色塗物
江戸 佃の白魚
武藏 大森梅びしほ
越前 生鹽

江戸 龜戸蜆
上州 吉井の火打鎌
大和 釣瓶鮨
甲州 葡萄月の雨
越後 せんまい
安房 米良の干物
駿河 宇津のや十團子
京都 八ッ橋せんべい
下總 中山こんにやく
筑後 柳川和紙
上野 赤城まむし酒
東都 鹽瀬まんぢう
下野 日光とうがらし
武州 三川島菜漬

中山道 燒米坂燒米
信州 猿が番場柏餅
遠州 佐夜中山あめの餅
武州 大澤桃
江戸 酉の市大下
大森 一服一泉
信濃 ××の針稍
中山道 かこはら牛蒡
内藤新宿 八房唐がらし
ぎふや きりあめ
大森 和中散
鳴子 眞桑瓜
練馬 大根
早稲田 茗荷
砂村 唐茄子



故遠山稻子女史の面影

寺田よし子

遠山稻子さんと云ふお名前を初めて知つたのは、恰度八九年前、勅題『新年河』を詠進されて御前披講の榮を得られた其時からでした。初めてお目にかゝつたのは確か五年以前の二月頃で、私が訪問に參りますと初對面の御挨拶をなされた「私は遠山の妻稻でございます」と仰つた御謙遜なる態度は、未だ記憶に存して居ります。

夫人は何處までも愼ましやかな純日本風の奧樣で、毎も溫な情味を以てお話なさいました、善い奧樣、話のしよい奧樣、親切な奧樣とは誰しも感ずるところでございませう。

夫人の御加減が不良いと聞きましてつひ先月、御見舞に上りました、夫人は其の時、私の祖父母や兩親は皆七八十まで生きて居りましたし、兄弟も仍且長壽をいたしましたから、私も八十位までは生きますと仰つたり けれどもお顏は瘦せて、蒼白い頰を白い枕に押當て、ぢつと此方を見つめて居られた美しい黑い瞳が、私には未だ目前に在るやうでございます。

其日は蒸暑い日で、病室へ入るとむつとするやうな重苦しい氣が襲うて來ました、夫人は其室に横臥されて、苦しい〳〵と言つて居られました、私はお氣の毒な氣がして、出來る丈度々御見舞申したいと思ひました、あとから聞くと夫人は、私の見舞つたのを大變に悅んで下さつたさうです、それは私は今日は行かう、明日は上らうと思ひながら、自分の仕事やくだらない用事にかまけて、それきりお見舞に上ることが出來ませんでした。

十月六日の朝でした、例のやうに新聞を擴げて見て居りますと、遠山夫人の逝去と云ふ記事があります、私の胸は轟きました、幾度も見なほしましたけれど、

確に載つてゐる、間もなく黒枠附の封筒で、夫人逝去の知らせが參りました。私は暫く新聞と、封筒とを前に置いたまゝ見つめて居りましたが、頓て熱い涙が自ら湧出るのを覺えませんでした。

私は何うしても夫人が亡くなられたと云ふことを信じられない、未だお目にかかられるやうな氣がしてならないのです併し夫人はもう何うしたつて此世には居られないのです。八十までも生きようと仰つた夫人は、僅に三十九歲

故遠山稻子女史と其筆蹟



を一期として、最愛の良人に先立ち、二人の男の子さんと、一人の女の子さんとを後に殘して、十月五日の午前三時と云ふに、永久に歸らぬ人となられたのです私は六日の夜、遺族家を初め皆樣方から贈られた御供物を供へてある御柩の前で、御良人や令孃（英子）から、夫人の臨終の御樣子を承りまして、何と云つてお慰めしてよいやら分らないのでした、私は只もう幾許堪へても涙に咽ぶばかりでした。御柩を置かれた次の間には、

仙臺の幼年學校に入學して居られた十五歳になる勝雄さんが、電報に驚いて歸宅され、續いて看護に一睡もされなかつたので疲れて蒲團を被つて眠つて居られると、八つになる岩雄さんが、いたづら盛りのことゝて何も知らずに面白さうに戯れて居られる、私はお子様思ひの夫人のことを思つて、猶更悲哀が胸にこみあげるのでした。

＊　＊　＊　＊

夫人は生前、好んで歌を作られましたことは世の人も知つて居る通りですが、本年六月、腸を病んで葉山に轉地された時に、

思ひきや夫にも子にも引き別れ
　病養ふ身とならんとは

女子文壇の百號の祝ひに

茂りあふふみの林に鶯の
　もゝよろこびの聲ぞきこゆる

新年河

なみならぬ年をむかへて河の瀬の
　かみしもとなく祝ふ今日かな

折にふれて

今はとて花もちるらん人心
　移ろはぬまを盛りにはして

閨

閨の戸の開けしよにも敷島の
　道の奥には入り難くして

長女英子に

すこやかに育てなでして岡守の
　心づくしのほどを思はゞ

口

心せよ身のつまづきもおほかたは
　口よりするがもとゝこそ聞け

友といふことを

まごゝろをこめてわれより交はらば
　世に誠なき友やなからん

折にふれて

かひもなきことは思はで富士のねの
　ゆたに心は持たんとぞ思ふ

此歌が最終のお作であつたさうです。

今年の春、花の散るのを見て

殘るともいつまであらん惜まれて
　散るこそ花の光なりけれ

とお作りになつたのが今や夫人の身上となつたのです

無名婦人傳（一三）

實母と繼母との間に挾まれて苦勞し盡せし甲斐もなき短き一生

龜田きん子

十二歳までは順境に育つたが、十二歳の春父母の心が合ぬので母は里へ歸つた、それから間もなく後妻を迎へた、父は後妻を愛して家政は後妻の心任せにした、實母は歸つてから一年程實家に居たが其後は影も見せなかつた。

今迄順境に育つた染子兄弟は急に他人の手にかゝる不幸の身となつた、兄弟姉妹八人ある仲で染子は三人めであつた、後妻は常に我が儘をして、子供をいじめるのが日々の仕事の樣にして居た、姉と、兄と、染子は、後妻の目を忍では、土藏の隅へ集つては泣いた三人が集ると「ジット」顔を見合して、何も言はずにほろほろと涙を落すのが常であつた。

斯樣にして四年を過した、姉は父の出里へ嫁す事になつた、兄は京都の學校へ入學したので染子は猶も悲しさが高まつた、其翌年染子は十七歳の春、父に泣きついて大阪へ行く事の許しを受けて、弟や妹を殘して心ならずも故鄕を後に五十里隔てた大阪で住む事になつた、そして或る病院へ看護婦見習ひに這入つた、だが日々弟妹の事を思はぬ時とてなかつた。一ヶ年餘して勉強の結果、看護婦の試驗に及第し、始めて看護婦と言ふ職の人となつた、其時の嬉しさは又一倍であつたとか、其後は給試團の月給が良く衆の上となつただが、それには滿足せず進んで電氣學の研究に心を寄て熱心に勉強して居た。或る時故鄕の友人が訪ねて來たので嬉んで迎へた、其友達から實の母が大阪に來て居ると聞いた。其翌日母の許を訪ねて、涙ながら過去の狀態を繰り返して日の暮るゝも忘れて語つた、それからは月に二度は違はず母の許を訪ふて語るのであつた、母は專門の職業がないから、人の着物を縫ふて生活して居たが、體が弱い爲に心算通りの收入が毎月不

足勝であつた、染子はそれを毎月助けて居た、かくして一年餘過した、十九歳の末方產婆の試驗に及第して獨立に開業出來る身となつたので大に悅んだ、母も樂に暮らさねばならぬと思ふて居た矢先、父からすぐ歸れと言ふ電報にやむをえず母に別れをつげて歸る事にした、歸つて見ると兄は病氣の爲に惱まされて居る、後妻はやはり權利を振ふて居た、染子は兄の犧牲になつて介抱したが、運つたなくして兄は歿した、其から間もなく後妻は實家へ歸る事になつた、其あと染子は家政の整理をして其暇には或る先生の許へ裁縫の稽古に通ふた、かくして一年を過した染子が二十歳の春又々後妻を迎へたので、家政の整理を後妻に任して染子は大阪に行く事を父に願ふた、父の言ふには最早お前も結婚する時季であるから、大阪行は「よせ」と言ふた、そして染子との婚約も決して居るのだと語つた、それを聞いて染子は泣いた、今迄苦しんだ事が無効に終る事を嘆いた、そして獨身生活をして、母の犧牲となつて何處までも母を扶けようと思ふて居たのに皆水の泡となつた、だが決して父の言葉を背く様な染子ではなかつた、母の許へは心を籠たる手紙を送つて、染子は遂に父の意に從ふて心ならずも嫁す事になつた、嫁して五六ヶ月は何事も無く過したが母を思ひ、弟妹を思ふて常に心を痛めた其上夫が情なくあたるので、遂に病氣の人となつた、夫は益々冷淡になつて染子の病氣には心も留めず毎日藝妓狂を始めた、染子は床で一人悲しんだ、嗚呼我身の不幸は皆運命のする業であると絕念て居た、四月程して少々快なつたので床を放れる事にした、だが遂に離別と云ふことに決して、涙を呑んで實家へ歸ることになつた、病名は恐るべき呼吸器病であつた、歸つて見ると、母親の方から告訴して父と母とがしのぎを削つて裁判中である。其中へ歸つて來た染子は常に快い日は一日もなかつた、右を見ても左を見ても染子にやさしい言葉をかける人もなかつた、染子の病氣は益々つのるより外はなかつた、歸つて六ヶ月過てからは床を放れる事の出來ない體となつて、遂に四十五年五月五日に惘むべき、二十三歳の盛の花を散らしてしまつた。

●●●●●●●●

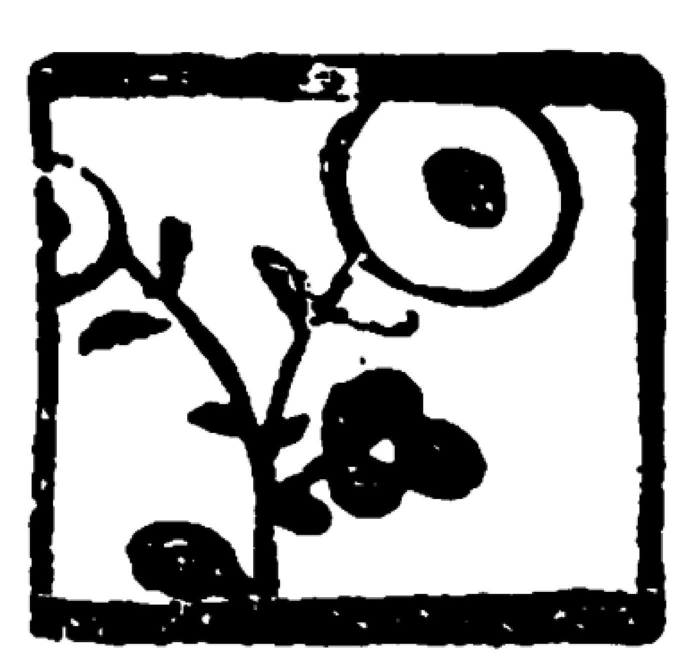
無名婦人傳原稿募集

無名婦人傳の原稿を募る、二十四字詰凡て頒がなつき、事實を主として書くべし、架空的のものや事實になき話は一切採用せざる方針なり。



黑綸子

廣江曉子



男まさりな氣性を現しだ強い眼と、ともすれば皮肉な微笑のうかぶ力のこもつた口元とが、今も眼にあり〳〵と見えるやうだ。分けて稽古を終つて退らうとする時、かゞんだ背を延して、爪をはめたまゝの手で長羅宇に萩をつめながら。

「しつかりお復習へやすや、上つた物はよう固めとかんといかんえ、」と云ふ。

その物腰、聲迄がはつきりと私の胸に、鑄着けられたやうに殘つて居る。

新らしい空氣のこもつた商家ばかりの立ちつゞく通りとはまるで別世界のやうな、鴨川に近いとある横町の、どれもこれも柱に蟲の跡の深い、低い不揃な家竝のつゞく半程に、拭きなれた栗色の塗り格子の外を、磨き竹の高い垣めぐらして、表札の女文字の古めかしい墨跡もうすれて、暗い雨の日などには讀みにくい。

しめやかな地歌の三味の音の洩れるには、まことにふさはしい住居であつた。

昔の面影の跡もなく亡びて、花やかにめざましく開け行く世に、何時迄も孤城の夢を守らうとするこの短い一町は、つひ近頃迄、所有の田も畑も次第に新開の町と化し

て、川東の遠く迄、朝な夕な鍬をかたげて通はねばならぬ不自由さにも、なほ舊居を捨てかねる小百姓の家さへ交つて居て、それらの家のかたむきかゝつた軒端には、畑通ひの籠の上に有り合はせの板切をわたして時折々の青物がいさゝかづゝ盛り分けられ、小供の書いたらしい一山二せんの札の付けてあるのをよく見かけたものである、さう云ふ暗いさびしい町を生れた處だからとて、どうしてもお師匠さんは離れなかつた。

一絲みださず撫で下した白髪に、七十路餘りの年には見ゆれど、身繕ひの正しさ、心持ち襟を拔いた風情が、女らしくしなやかに、初見の人の胸にも忘れがたい香ひを殘す、やがて姿を正して、手馴れの古琴にむかへば、寂びた地歌の節面白う、すぐれて節高な指先が、ころ〳〵とまろぶやうに絃を走しる。

進んで佳境に入る程に興に乘じて、年のわりにゆたかな頰が云ひ知れぬ和かい味を帶びて、眼の色も冴え冴えとなるのであつた。

春は早うから庭の海棠の蕾を氣にして、今年はえらう花が遅いやうやと毎日顔を合はす度にきまつたやうに云ふ。

「よう苅り込んで手入れをして遣るといゝのやけど、何と云ふても人手を借らんならんもんですよつてなあ」と女ぐらしのはかなさを託つのであつた。

十七になるもらひ娘のお露さんは、お師匠さんの姪の子で、まだ此處に引き取られぬ七八つの頃から、行く行くは師匠の後を續がすつもりで、やかましく仕込まれて、もうかなり代稽古の出來るやうに成つて居たので、朝からは他の師匠の許へ復習つてもらひに行き午過ぎからは代つて出稽古に廻るので、二重住居になつた奥の方には、お師匠さん一人つきり、勝手の方には人の好さゝうな、いちじるしく腰の曲つたこれも子なしの、八十近いお婆さんが居るばかり、それがお師匠さんの姉さんである事は後に聞いた、若い間からの味氣ない後家生活を遊藝で立てゝ來たから云ふ人によくある恐ろしい潔癖で、わづか三人位の小人數にもかかはらず、一人小さなお櫃を控へて、自分だけの食器

は居間のさゝやかな水屋の中に納めて置く、さうして滅多に勝手へ退げるやうな事はせず、洗ふにも縁側で金輪の光る桶に水を汲ませて、自らするのであつた。

評判の信心家で近まはりの宮寺に和田と名のついたお供物の上つて居ぬ處はない位であつた。

お師匠さんと云ふては知らぬ人々も、朝まゐりのおばあさんと聞けば、あゝあの人かと直ぐにうなづく、冬ならば市樂の着物に、黒綸子の被布、黒天鵞絨の襟卷ふつくりと、やゝ太い杖をついて折ふしは水晶の珠數かけた片手に花を持つて居る事もあつた、何故か低い下駄を嫌ふて、夏冬なしに齒の新らしい利久ばきで、霜の白い曉の道を若い者に負けぬ程の足早やに行く姿は、未だに誰の眼にも殘つて居る



夏はまた、鼠の帷布に黒か茶繻子の細い帶をかゞんだ腰に形良く結んで居た。

その信念の強い事は驚くばかりで、平生の何でもない話しの中にも、人間と云ふ者の果敢なさ、何事も天の配意の外ならぬ事や、神佛のちからの絶大なる事なとを引きいだして、誰れ彼れの嫌ひなしに語る。

それが或る一部の人達には、親しみと敬ひをおこさす基となり、若い者にはまたかと眉をしかめさせるの

であつた。
人の噂をする時には、あの人は親孝行だとか、若いに似合はぬ親思ひだとか、すぐ孝と云ふ字に照らして見る、そしてそれでもう、その人の凡ては云ひ盡されたと云ふ顔をするのであつた、何かの話のついでに、きつと引きしまつた顔になつて、
「孝行と云ふ事はありがたい事ぢや、あんたも親御さんだけは大切におしやすや、忠と孝とこれにまさる行ひはない」と說きさとす事もあつた。
そしてまた、大火よ、洪水よと聞いては、直ぐに大御心を思ひ奉るのであつた。
「東海道が水づきやさうとすえな、よう方々の荒れる事やおへんか、お上もさぞ御心配な事やらう、」しみじみと憂はしげに聲を低くしたあの樣子が、今も眼にあり〱と見えるやうだ。
賀茂のまつりにつけては御所より葵かざして御勅使の立たせらるゝを第一に語つてよろこび、大文字の夜にも、雄壯な山の火を眺めつゝ、
「あの火は紫宸殿のお庭のお池に映るのえ、」と重々しう話して、九重の御奥をしのぶ。
王城の地に生れて誇らしく、明暮九重の御有樣を洩れうけたまはるを樂しみ、何かにつけて高き御所風にならはん事を願ひし舊き都人の面影を一層深くとゞめて、なほこの人の周圍にのみは、銀漏のしたゝりに動いた昔の時のめぐるかと思はれた。
氣にした海棠の蕾もほころび初めて、銀の雨の音もなう花に注ぐ午過ぎ、晝食にたのしむだ、お酒の名殘りに眼元をほんのりと紅く染めて。
「毎日よう降りますえなあ、嵯峨ももう盛りやさうなが、かう降らしやつてはわやとすな、私も若いうちは花見にもよう行たけど、年よつてからは臺に足が云ふ事を聞いてくれんもんやさかい、嵯峨はおろか、圓山もむづかしい、」と云ひさして調子を直しながら「けど春雨と云ふ物は辛氣なやうでも、何となうしめやかにえゝもんとすえなあ、」
そんな日には記憶のわるい子供にでも、たゞ穏に氣

長に教へてやつた、怖々と琴の前に坐つては、しばらくの稽古の間を千秋の思ひして、鬼の前を逃げるやうに退がつてくる子供らは、
「お師匠さんはきつい人、氣がみじかうてこはいわ」
と次の間でひそ〳〵とさゝやき合ふ。
「年よると氣がみじかうなつて、辛氣くさうてなあ、」
と折ふしはしみ〴〵と託ちながら、投げやりの嫌ひな性分は、はげしく叱られて涙ぐむ子を、冷かに見下ろしながら、なほ氣にはまる處迄は、一寸も琴の前を退がらせなかつた、あまりに鈍な子に對しては、突嗟に持前かと思はれる慘忍な感じがひらめく時もあつた
春もやう〳〵暮れそめて、三坪に足らぬ庭の隅に山吹の花咲くころ、笈摺姿のいたいけな順禮の子の途切れ途切れに鳴らす鉦の音に、哀愁の迫るをおぼえて、うら悲しい詠歌の搖曳に心迯く誘はれ行く横町の晝い靜けさ、稽古所の間半程の落し庭に、紉緒の下駄が一足づつ減つて、私の 紫 のがさびしく殘る、爪をはめて琴の前にすわると、

「今朝智恩院の鐘が鳴つたが御忌さんどすえなあ、」
と沈んだ聲で、さながら旅の空で知り人にゆくりなく出逢ふたとでも云ふやうな心持ちをそのまゝ、なつかしげにお師匠さんは語りいづるのであつた。
「今はもうあんな事でもさびしいもんやが、私らの小さい時分には京中の人が出たもんどすえ、知つとお居やすやろけど、智恩院さんは天下さんのおたまやとしたさかいな、大したもんや、大殿の上り段に、賽錢無用と書いた大きな札が立つてましたが、まあその位威張つたもんとすわいな、それがこの御忌さんの間だけは、勝手に奥の御殿迄も拜見ができて、何處でゞも遊び次第、私らもようお祖母さんにお辨當持ちで連れていてもらひましたのえ、お廊下やらお庭先きでお重を開いて、精進ずしでも喰べるのが何よりのたのしみでなあ、お正月と同じやうに早うから待ちましたえ、その時分から見れると、今はもう何にようす淋しいもんどすえ。
なんやもう、昔の事となると、不思議な程ようおぼ

えて居るけど、近い事は忘れて〳〵とむならん、」

と云つて、はゝゝと笑ふ、何處やらに深いさびしさのこもつたこの笑ひ聲が、何時も私の胸に强くひゞくのであつた。

お師匠さんは月にも花にも、人より深くあくがれるけれどそれは大自然の美に對して、一人醉はうと云ふ風ではなく、

（春はいざ花見にでんせ東山）（思ひぞつもる圓山に、今朝もきて見る雪見酒）等と京四季に歌はれたさう云ふ自然と人との相伴ふ賑やかな歡樂を好むので（まくづが原にそよ〳〵と秋の色ます華頂山）

さうしたうらさびしい幽雅な景色を、風流な茶店の毛氈敷いた床几に二三人酒汲み交はして樂しまうとするのである、お師匠さんは飽く迄、古き都會人の面影を備へて居た。

「山吹はしほらしい花やおへんか」と庭の隅に眼をやる、低い四つ目垣によりかゝつて、行く春の遣瀬なさに咲く山吹の、今めかぬこがね色と、琥珀の帶のやうなみどりとが、主の若女に何となくふさはしい。

「山吹で思ひだした、玉川忘れとおいやへんか、一遍さらへまほか」と早や、後に立てかけた三味線をとつて調子を合はし始める、八の絃を下げる手元をじつと見ながら、

「玉川は合ひにくい、」とつぶやく。

細い象牙の撥を握つて、しやんとかまへた姿は、今迄の人と別のやうに思はれた。

若いのに頭の禿げかゝつた琴屋は如才のない男だ、重に女相手の商賣柄とて、物言ひも和らかうしつこくない程に愛想も好い、絃をかけ替へながら、

「お師匠さんもお年よられまして、」と云ふ。

「でもしつかりしていらつしやいますわ、ほんとのお子達はお一人もないのでしやうか、」とたづねると、

無いのだ、と答へた、そして、

「人さまの昔をあさるのやでざいませんけれと、お師匠さんはあなた、お若い時分、祇園に出とお居やしたんで、美代吉さんてよう鳴らさはつたお方やさうにで

ざいます身受けされて長州の方へ行とおいやしたのですけれど、死に別れてお歸りやして、それからあゝして、きかん氣なお方やもんとすさかい、長年師匠でやつてきやはりましたんで、お負けに不幸な姉さん迄世話して、なかく出來ん事でございます。」

と話した、私は一寸意外には感じたけれど、またさう云へば心に當る節がないでもなかつた。

何となき取なしのうちにも、その昔の花垣に奢る緋牡丹の花の、濃厚な色彩の潜むやうに思はれ、容易に人に降らぬ處に、浮き川竹の流れに上げた一種の氣風を示して居る。



稽古のはげしいのもその筈、琴屋の話は私の心を少なからず動かして、よく遊んだ噂の今だに消えぬ雜穀屋の老人の話しに聞いた霜夜の寒稽古の樣なとを想像するのであつた。

それは昔、蠟燭と油の燈よりない時分、更けては九重の都も眞の闇に宮々寺々の燈籠の火も消えはつる、夜なき里とは云へと祇園の町もほの暗い、高い物干臺の暗がりに手だらひの水が白う光る心のゆるみと眠氣を防ぐために、水に浸しては皸打つ掌の破れて、紫の絲緒を紅の血潮に染めつゝ、闇に上

ぐるかけ聲の物凄さ、撥振ぎる手は凍へて覺えもないのに、いよ〱高う冴えまさる三絃の音に連れて、張り上げ張り上げ歌ふ聲は、小路〱のそこにもこゝにも。

ぼんやりと掛行燈のつゞく軒下を、ぶら〱と女共に送られて歸る浮れ男の耳にひゞけば、そゞろ醉ざめの襟筋に、細身の白刃を當てられる心地、思はずぶるぶると慄ひ立つたと云ふ。

身を切る夜風に京風の島田みだれて、紫の長い袂は容赦なくまくれ上がる、銀扇の重みにも堪へかぬるか細い眞白い手が血ににじんで、つひ膝の先きはもう霜がまつ白、美しき人の生命絶えよと惱み惱まさるゝ慘忍な夜の曉近き空を、星は小さく鋭くかゞやいたであらう。

堪へぬ思ひをしのぶやうな、涙にむせんではつまるやうな雨夜にふさはしい三味の音の、この老師匠の手に奏でらるゝ時、私は知らず〱さうしたシーンをゑがくのであつた。

花ちり〱に、雲の往來も物憂い暮春のしばし、身も重く心も重く、何とはなしに心地勝れず、稽古に行く時間もおくれがちになつて、時にはそのまゝ休んでしまう事さへあつた、何事も投げ遣りに、たゞ遣瀬なう日は過ぎて行く。

「昨日はおいでなんだえなあ、」と座につくや否や、お師匠さんはきつと咎めるやうに云つて、じつと私の顔を見た、そして、

「えらく顔色がわるいやないか、何處ぞわるおすか、」と氣づかはしげに云ふ。

「いゝえ、何處と云ふ事もないのでございますけれど何だかすぐれませんで、」と答へたが達者な人の手前、そゞろ恥づかしくなつてうつむいた。

「そらいきまへんえなあ、用心おしやすや、お師匠も二三日前から頭痛がする頭痛がすると口癖のやうに云ふてますが、大體今の人はみな弱い、私らのあんた位な時分と云ふものは、そうら強いもんでしたえ一遍もてこを（と左の腕を押さへて）大分深う斬られた事があつ

た、刀でえ、血がまあ氣持ちのよい程迸つて、出たのなんのつたらもう、それでも大して弱りもしませなんだ、その位丈夫であつたもんどすえ、」

私は思はず身慄ひした、(はゝゝゝ)と晴れやかに、笑ふ聲に、見上ぐる面は男よりも強かつた、そして徐く次の間の弟子達を冷かに見やる。

勤王勤王のさけびに京童の辻話も穏かならぬ維新前昨日はかしこの橋ン袂で、今日はこゝの辻で、斬つた斬られた、血腥い噂ばかり、眉うら若きお師匠さんはその中に撥を握つて暮したのだ、當時志士達の集合所であつた祇園は紅燈緑酒の巷とは云へ、おのづから殺氣立つて、燈の色もたゞならず、柔和一方な町人衆の宴席にも、

「何を九條〳〵かんぱく止めて、水戸の流れを見てくらす、」と云ふやうな歌が流行つて、心なき舞姫の眉にも動かしがたき意志のひらめくを見たと聞く、戀人の上にひらめく白刄を、紫い袂につかんで立ち塞がり、荒くれ男の敵をも味方をも驚かした當年の手弱女は老いて今なほ、祇園に俠名を歌はれて居る、緋鹿の子の長襦袢に心の色もあらはれて、刺客の腕に必死となつて追ひすがり、危き志士を救ひしけなげな舞姫や、數ふれば數限りなく俠艶な物語りの傳はれるその頃、お師匠さんは何様にか凄艶な人であつたらう、どうして受けた疵か知らねど、當年の面影を想像して私はそゞろ、他に人が居なかつたらたづねて見たいやうに思ふのであつた。

十日餘り休んで居た靜ちやんと云ふ子が貝細工のおみやげを持つて來て、播州のある海岸に父に連れられて行つて、毎日貝を拾つたり舟にのつたりして面白かつたと話して歸つた後であつた、床の間に今かざつた貝細工をなつかしげに見やりながら、

「長州の平尾には長い事行つてゐしたが、あすこはまた鹽處でなあ鹽濱持ちの旦那衆ばかりで、それは〳〵ゆたかな處としたえ、平尾の鹽はお魚にえゝので、松前行ばつかり、値は一倍よし、賣行きもさう云ふ風にえゝもんとすよつて、まことに豐な處とすえゝな、濱

は人にあづけておいて旦那衆は遊ぶのが仕事みたいに明けても暮れても舟遊びやら、網打ちやら、春先きはまた、濱の岩の上に毛氈を敷いて種々御重詰の御馳走を擴げて日がな一日、貝拾ふたり釣したりして暮らすのえ、雨でも降れば仕様がないよつてお茶に碁、お客さまの仕合ひして、夢のやうに日を暮らしてしまふ、勿體ない事やけど、さうなると遊ぶのが當りまへのやうになつて、私らでも働くと云ふやうな事、忘れてしまふてましたわ、こんな辛い時節になつてきたよつて今はもうそんな事もあるまいが、何處の國にかあんな結構な處があらうかなあ。

　旦那が死なしやつたので、皆止めて下さつたけど、思ひ切つて歸つてきました、何と云ふても生れた處で死にたうおすわい、」とにつこり笑ふ、「それでも旦那が死なしやらなんだら、苦勞しに歸つて來やしませんけとなあ、」後の稽古人の遲いまゝにお師匠さんの話は長長とつゞく、常に似合はず、弱々しくさびしげに百年の苦樂他人による女の身の甲斐なう生きのこつた老の悲しみもありありと讀まれるのであつた。

　何時の間にやら夏深うなつて、大路小路にやさしい淺黄の日傘の往來する頃となつた、夕涼みのそゞろ歩きにも祇園囃子の遠くかすかに聞えくる夜毎、人足は皆四條あたりの鉾町に引かれて、其處に見る宵山のにぎはひとは正反對な寂寞が中京に遠い、いづれの町にも漂ふ、宵からひつそりした町筋のそこゝに、殘された二三人の男達ちが床几に集つて市の三大事業の話をして居た。

　佛壇に宵のおつとめを終つて、まだ明々とかゞやく燈明の火を見つめながら、格子の間に宵寢して聞くともなく、それらの話し聲に耳を貸して居たお師匠さんは、あくる日私が行くと直ぐ待つて居たと云ふ風に話しかけた。

「この間からえらう、道が堀り返してあると思ふたら水道とかの管を埋けるのやさうとすえなあ、水を買はんならんやうになるのやと聞いたが、ほんまとすか、京の水と云ふたら國々迄も聞えたもんやのに、このあ

り餘る結構な井水をほつといて江州あたりの湖水の水を呑まんならんとは何とした事やら、何ぼ時世や云ふたかてわからんえなあ。

それにまた、道が擴がるとかでその通り筋の家は、皆お退きやさんならんのやてなあ、御迷惑なこつちや、道がようなるのか、電車がつくのか知らんけど老人はあぶなうて出る事も出來やせん、東の方を堀つてるので、この頃は觀音さまへもよう參らんと居ますのぢや、なんとかかとか云ふては今の人たちは京の町をこはさう〱とかゝつて居る、情ないもんや、」と苦々しげに皮肉な笑を浮べるのであつた、私ははつと答へにつまつてしまつた、夏のうちは事もなく過ぎたが、秋の末から冬にかけて市中一體に斷水してあちらにもこちらにも、水もらひのバケツさげた女たちを見るやうになつた、お師匠さんは默つて居ぬ。



「川近う住居して居て、こんなに水に困つたのは始めてや、その癖、雨はちよい〱降るのに、やつぱりあんまり堀りちらすもんやよつて、地の神さまが怒らしやるのぢや、それに畑物でも今年は

蟲がついてさつぱり仕樣がないさうどすなあ、やつぱり堀り返されて居所がない物やよつて、自然蟲でも畑の方へよつて行くのとすえ、(何處を通つて行きましたやらと小さい聲で誰かゞ笑つた、次の間はしばらくどよめき立つ、けれどもお師匠さんは氣がつかぬ。)

「地には地の神さまが、天には天の神さまがある、まして京の土地はありがたいお經が埋めてあると云ふ程やのに、勿體ない事、勿體ない事、京のねうちもだんだん無うなつて行く、馬鹿な事をしたもんぢや、」その果ては何時もの冷かな皮肉な調子で笑ふのであつた。

寒い風の日々吹き荒ぶ年の暮の、雪げもよひの空暗く、せはしない中にも何時しか心の沈んで行くやうな日であつた。

「この家も出んならんのえ、」低い調子でかう云つて、さも驚いたらうと云ふ風に、微笑をふくんで、お師匠さんは私の顔をじつと見る、實際私は驚かされた、(幾十年の間住みならした、小ぢんまりと行きとゞいた樣子を見て居る者は誰だつてこの家を借家だとは夢にも思つて居なかつた。)

「こゝに住んでから三十年、誰一人借家とは思ふては下さらん位なやのに、人の家は仕樣がない、なんぼこつちはこゝから死んで出る心算で居ても、出えと云はれゝば、やつぱりはい〳〵と從ふより外はない、つまらんもんやおへんか、」沈んで云つたが、皮肉な笑ひはその口元からはなれなかつた。

「この町内は生れた處やよつて動きともないと思ふので種々御近所へも頼んでおきましたら、つひ七八軒上の家が二三日の中に空く事になつたので、汚いけどまあ其處へ移る事に決めました、たつた三間よりない狹い家やけど、稽古だけはできる、しかし來てもらうのも氣の毒なやうな處どすえ、」と云つたが、急に腹立たしげになつて。

「あ家主の若後家めが、旦那が死なしやつて半期とたたんうちに、もうそろ〳〵我大將でやり出して、いまいましい、こつちが年よりやよつて何時が知れんと思ふて、後のお露はまだ年はいかず損せん中にと追ひだ

しよる、昨日も昨日とてすこし位出し物を増やしても宿替するよりはましやと思ふて、種々と頼んで見ましたのえ、そしたらあの若後家め、生意氣な、借家にしておきますのでしたら、退いて下さいとは申しません私が隠居する心算なのですからと、にべもなう云ふて退けるのえ、私や腹が立つて、どうしてやらうかと思ひましたえ、長生はせまいものでございます、腰の曲つた姉妹が、今になつて追ひだされて、死場所をさがさんならんとは、何と云ふ情ない事やら、しかしもう頼みません、お前さんはさうして損得づくで世を渡りなさる、結構な事でございます、しかしこの家もお前さんの旦那が、旦那の叔父さんが死なしやつてから跡取りの小さいのにつけ込んで、横領しなさつたものぢや、私やよう知つて居る、定めし末行きのゑ事でございましやうと、云ふて云ふて云ひまくつてやつた、あんな者に云ふのは、馬の耳に風やけど、それでも顔色を變へてまあそんなに怒らないでなんて云ふて困つてたえ、は丶丶丶、怒らいでかいな、今朝もつひ門先きであふたけど、私や會釋もしませなんだ、女ばかりやと思ふて、見下げてからに、いま〱しいて、いまいましいて仕様がおへんわ、」眼を光らせて、聲をはづませて怒つた、けれどもまたがつかりして、

「お露にも云ふてますのや、どうぞ一人前になつて、出世したら、物置小屋のやうでも大切ない、我が家と云ふ物を、こしらへておく事やでとなあ、」

私はなんと慰めやうもなく、只はら〱する許り、氣の毒さに眞正面に顔を見る事もできなかつた。

宿替の日は極めて寒かつた、師走の薄い日影にてらされて、手傳ひの人々の運ぶ荷物について行つたり歸つたり、お露さんは一人で働いた、すつかり運んでしまつて、あらたに納まりのついた頃、老人二人は、やら〱重い腰を上げて、住み馴れた家を後に、新らしい家に移つた。

心ばかりの祝ひの品を持つて行つて、おめでたうぞんじます、と挨拶すると、お師匠さんは、

「おめでたいのやら何やらわからへん、」と苦笑しなが

ら、それでも嬉しげに受けた、さうして、
「まあ見ておくれやす、」と奥の間の疊の破れを指して「情ないやおへんか、この年になる迄着物につぎのあたつたのも着た事ないのに、」と顔をしかめた。
何時しかその年も暮れて正月も過ぎた、この頃からお師匠さんはめつきりと弱つて、稽古も苦しさうに、少し追憶のわるい子に敎へた後などは、氣の毒な程はあく\/と吐息を洩らす樣になつた。
「私やもうあかん、それにつけてもお露がしつかりせん、年もいかんのやよつて無理もないけれど、何よりもあゝ體が弱くては案じられる、」と口癖のやうに云ひ云ひして眉をひそめる、十七の世なれぬ娘を十人百人ものちからと賴む心は、まだ幼な振りの殘る動作が物足らず氣になつて仕方がない、從ふてこせ\/と小言を云つては、返つて怒らしてしまふ事があつた。晴れた日などはおとろへた體を杖にすがつて、その嫌ひな堀り返した道を六七丁も東の觀音さまへ詣でゝ、跡取りの娘の上を一心に祈念するのであつた、朝からの冷い風が正午過ぎからたうとう雪を誘ふて、見る\/中に、道も家も眞白になつた、
「えらい日になりましたなあ、」と云つてお師匠さんは大儀さうに炬燵から出て來た。
「あんまり寒いので持病のせんしやくが、おこつてなあ、」と顔をしかめて腰を押さへながら、
「今朝もあんまり痛いので、ようおまゐりもしませなんだ、そらさうと川端をまたえらう弄つてるさうなが大きな堤防をこしらへるのやてほんまとすか、何ぢやもう鴨川も形なしとすなあ、まさかあの柳迄伐りやしよまいが、今の人のする事やよつて何ともわからん、」嘲るやうに云つて同感の言葉を求めるやうに、弟子達の顔を見廻した、けれど誰も答へない。
あまり白けるので、古今の調子を立てゝ居る若い丸まげの奥樣が、
「左樣でございますね、」とわづかにお愛想らしゆう答へた、小供らは聞きもしない、餘念なく小聲に話し合ひながら、色紙を折つて居る、青い船や、紫のつるや

赤い福助がめい／＼の膝にちらばつて、一つ／＼増える友達を待つて居る、お師匠さんはさも心外でたまらぬと云ふ風にうそぶいて、天井を見つめながら、ゆつくりと煙草のけぶりを吐く、奥さまは一禮して花やかな夏の曲を彈きはじめた。

やがてお師匠さんも煙管をおいて琴に向つた。

調べは一時にはでになる。

「石の上古き都のほとゝぎす、」しつとりと寂びのある聲に聞き惚れて居ると、

「お師匠さんて妙な人なのね、」と後から桂さんがそつと私の袖を引く、だまつて振り向くと、紫の袂を膝に重ねた唐人まげの房子さんが美しい眼にちらとお師匠さんの方を見やつてにつこと笑つた。



「何時もあんな事ばつかり云つて、今度はまた例の高瀬の柳ですよ、」と横合から、庇髪の大分みだれかゝつた道代さんが、顔を出す、云ふてしまうてから聲の高かつたのに氣がついて眼を細うしてきゆつと首をちゞめる、同時に桂さんが、口元では笑つて、聞えますよ、と眼で氣をつけた、木屋町の柳の伐られたのは、お師匠さんの忘れても忘れられぬ恨みであつた。

「古い柳を無茶苦茶に伐つてしまうて、ようたゝりのない事や、京の名物を取りのけて木屋町が廃うなつたもないもんや、」と腹立たしげに嘲笑ふ

のを、お弟子はみな面白がる
大寒の寒さが應へてか、お師匠さんはめつきりと弱つて寢たりおきたり、お露さんが主に代つて稽古をした、去年の元氣は何處にもない、案じられぬではなかつたけれど、まさか今かうして亡き人としてしのばうとは夢にも思はなかつた。

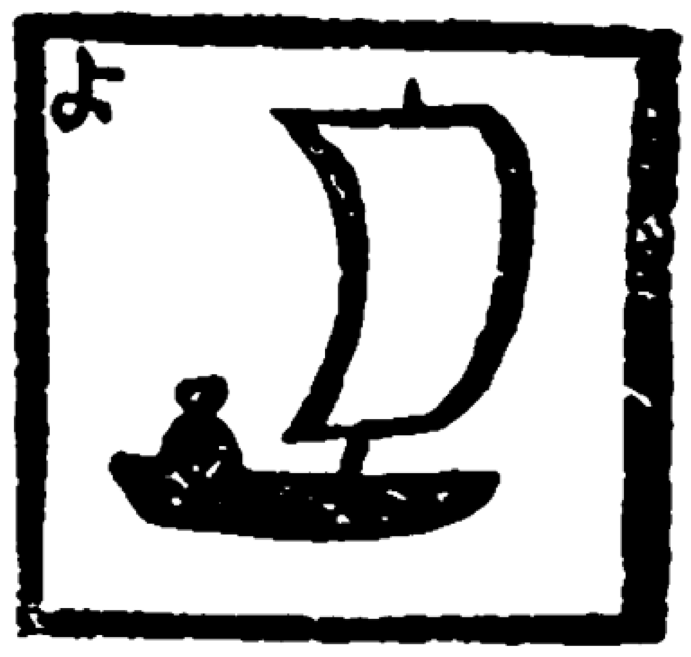
寒さもうすらいで、紅梅の咲きそめた彌生なかばのある日、すこし氣分が良いと云つて床を上げさせて、表の樣子を見ようと門口へ出るなりころんで、あくる日私の行つた時は、はげしい熱に浮かされて寢て居たそれからとつと床についてしまつて七日程のわづらいに、思ひもよらず歸らぬ旅におもむいてしまつた、逝く前の日、はげしい熱のために、意識を失ふて見舞にきた人々の聲もわからずなりながら、かわききつた唇のかすかに動くのを見つけて、何か云ふ事でもと、私はそつと摺りよつて耳をすましました。

げにまゝならぬ世の中をなにゝたとへんあすか川、磯千鳥の一ふしを歌ふかと思へば、みしたまだれのうちぞ床しき。七小町の後歌か、私は思はず胸迫つて、お、と小さい聲を立てたのであつた。

さめ／＼と泣くやうに降る春雨の日、低い軒を白い駕はかき出だされて、生前の知人や、弟子たちに送られて、追憶のこもる、はなれともない狹い町を後に遠い山へと運ばれて行く。

行列は長々とつゞいた。

春は花、いざ見にごんせ東山、色香あらそふ夜櫻や、うかれ／＼て粹も不粹も物がたい、二本さしても和かふ、祇園豆腐の二軒茶屋、御祓ぞ夏はうちつれて、河原につどふ夕涼みよい／＼よい／＼、よいやさあ。眞葛が原にそよ／＼と、秋は色ます華頂山、時雨をいとふからかさの、ぬれて紅葉の長樂寺。思ひでつもる圓山に、今朝も來てみよ雪見酒、そして櫓のさしむかひ、よい／＼よい／＼、よいやさあ。（京の四季）



文部省展覽會の第一印象

萩野の八

日本畫には例に依て屛風が中々多く見受けられます。その他に五枚、八枚、十二枚などの夫々一組となつたものが殊に人の目を惹いてゐます。是等の組物の中には一枚だけで結構なのが少くありませぬ、一體澤山の數を一人が出品することは要心深い獵師が澤山の獵犬と幾挺かの連發銃とを持つて獵場へ出かけたやうなものです。どうせ曲擊の手際を見せる積なのでせうが、餘所目には中々危つかしい事もあります。

日本畫は第一と第二との二科に分たれてゐます。第一科は舊派の人々の作品ばかりで、第二科は新派の人達の作だと云ひますが、勿論第二科にも舊い作法を用ゐてゐる人があります。第一科の人たちの中には自分から日本畫の眞髓を傳へてゐるものだと云つてゐるものもあるけれど、夫は片腹痛いことであります。と申すのは、何を見ても日本畫の眞髓らしい部分がないのみならず、古い日本畫にはあゝ云ふやうな眞髓を發揮したものを餘り多く見受けたことがありませぬ。或人が土佐風の畫や南畫風のものや其他古い種々の畫風の作品があの中にあるではないかと私に注意して呉ました。無論夫も知つてゐます。けれども土佐風から申しますと、あれは墮落した土佐です。其他の多くの畫風も墮落したものを承ついでゐるので、若し夫が疑はしいければ、直隣の博物館へ行けば教へて呉ます。さう思つて第二科へ通つて行つた人は私ばかりでありますまい。

第二科には無論見るべき作が少くありませぬが、尤

も注意を惹いたのは横山大觀氏の瀟湘八景であります。此書題は足利時代以來わが國でも盛に畫かれたものでありますが、大觀氏の作法は古い畫法を新しい眼で研究したと云ふ點が注意せられます。殊に一體の調子に垢拔のした所があつて、手法は隨分皮肉であるが、彩色を惜んで使つてゐるだけに急所を衝いてゐます。八面ある內で平沙落雁、江天暮雪の二面は殊に秀でゝゐる。同氏は昨年『山路』一昨年『楚水の卷』を出品してゐましたが、今秋のは『楚水の卷』の作法を一轉せしめたものとも云ふべきであります。寺崎廣業氏も亦『瀟湘八景』の中五景を出してゐますが、是は大觀氏とは正反對に細緻な畫法で穩健な作であります。大分世間では洞湖の水の波紋が面白いと喧しく云つてゐるけれども、此種の描法は近代支那の畫には澤山用ゐられてゐるので、物珍らしさうに云ふ程ではありませぬ。私は同氏の作は寧ろ傑作と云ふ程のものではないと思つてゐます。東京と京都との畫家の中で手際の奇麗なのを見せようとしてゐるのは川合玉堂氏と山元春擧氏との二人です。玉堂氏は『潮』と題して六曲屛風一双に海岸をやゝ鳥瞰的にあらはしてゐるのですが、是は屛風の銀地をどういふ風に使用しようかと云ふ點に苦心してゐる。銀地に群靑と胡粉とを以て潮の寄する狀を寫してゐますが、全體に寒色を用ゐて、人物をそれにうまく配置してゐます。金地を避けたのは殊によろしい。春擧氏のは『嵐峽』の深碧を闘したもので、是は氏一流の清楚な畫法によつたもので一層深く味を見出すことの出來ぬのは殘念であります。

其他菊池契月氏の『茄子』今村紫紅氏の『近江八景』安田靫彥氏の『夢殿』尾竹竹坡氏の『天孫降臨』尾竹國觀氏の『勝閧』木島櫻谷氏の『寒月』前田靑邨氏の『御輿振』などが目ぼしいものであります。閨秀畫家のうちで池田蕉園女史の『ひともしごろ』は佳作の方でありますが、強いて難點を云へばその畫に大體奥行の足ぬことであります。然し一昨年の『秋の調』『冬の幽栖』などのやうに大畫面に疲勞したやうな形迹のなくなつたことは頼もしい事であります。

洋畫には大作が見出されませんでした。黒田清輝氏の『習作』和田英作氏の『H夫人肖像』鹿子木孟郎氏の『某未亡人の肖像』中村不折氏の『巨人の蹟』中澤弘光氏の『乳の祈願』などが注意を惹くべきものです殊に鹿子木氏のは他の二點『若王子瀧』『鴨東の妓』が缺點に滿た作であるにも拘らず此肖像畫はよほどよい出來であります。すべて筋肉の説明などもたしかだし、極めて細微な光をゞ逃すまいとしてゐる點や、物やつれの感をよく出してゐます。黒田氏の『習作』は形には難



すべき點がありますけれども繪具の色の使ひなしは慥に斯界の先達たるに愧ぢないと思ふのです。不折氏は例の如く『巨人の蹟』以外に『迦諾迦伐蹉尊者』と『道』と題する『子曰云々』と云つたやうな題句のあるものをも出してゐます。

以上の外に洋畫の中で傑出したものは恐らく小杉未醒氏の『豆の秋』でせう。同氏の作には倘小品で『海の藻』と云ふのもあるけれど『豆の秋』の方が餘程佳い作です。一體同氏の作は昨年の『水郷』などにて見たやうに、技巧が過ぎようとするが爲に却つて自然に對する温かい

情を失はんとする傾向がある。然るにこの畫は寧ろ技巧を包まうとして、自然に對する溫情を多少表はしてゐます。殊に手近な經驗のなかゝら人間と云ふものを新らしく解釋してゐる點が面白い。其他に南薫造氏の『六月の日』辻永氏の『無花果畑』山下新太郎氏の『マンドリーヌ』藤島武二氏の『公園の一隅』などは何れも逸し難いものであらう。南氏の作は『六月の日』のほかに『魚見小屋』『石割』などがありますが、昨年と大した差がなく、其着眼點も略同樣で、寧ろ昨年のやうな景趣の大まかな所がないのは遺憾です。然し同氏は新しい態度の人々のうちでも、常に穩健な立場を示してゐることは喜ぶべき事であります。山下氏の『マンドリーヌ』は色調の大膽なのと、その筆行のなげやりな所に面白味がある。それともう一つは調子の外れかけた所で急所を押へてゐる手際はその見るべき點でせう。

まだ石橋和訓、坂本繁二郎、跡見泰、石井柏亭、島田卓二などの諸氏がありますが、飛抜けた作はなかつたやうです。但だ若い作家の中で新らしい方面に向つて大に飛躍しようと試みてゐる人が見受けられます。然しその人達はまだ技巧に屈托してゐるのが多くて、急激には變動は起るまいけれども、斯界の新風調は確に現下を過渡期と稱せしめずんば止まぬものがあります、最後に英國のレオナルド、ビル氏の『習作』が場中の異彩であることを述べて敬意を表しておきます。

文展御買上品

畏きあたりの思召を以て、文展へ差遣を命せられた米田侍從は、前月十六日福原委員長、森、武井、高村今泉諸審査員の案内にて巨細に觀覽し、御買上品の決定を了つた、其作品は日本畫第一科では、田南岳璋氏の『志摩大王崎』小坂芝田氏の『秋爽』望月青鳳氏の『群鹿』加藤君鳳氏の『野風』同第二科では三枝衆光氏の『鵜』彫刻では、新海竹太郎氏の『戰勝の記念日』西洋畫では、跡見泰氏の『野路行く人』中山八郎氏の『磯打つ波』香田勝太氏の『鳳仙花』等總て九點であつた。因に云ふ、十七日の大祭日には一萬三千人（第一回以來の大多數）の入場者があつて、表を締切るほどの滿員であつた。

乃木大將の墓

一記者

秋晴れの日和が幾日かつゞき、青山葬場殿の參拜が許されてゐたので、毎日の人出が三萬人五萬人と云ふ多數で、青山一丁目から四丁目の間は人で一杯だと見て來た人が云つて居た。葬場殿と、乃木大將の墓と、乃木邸とは丁度三角形になつてゐて、どちらから廻つても道の都合はいゝので、三角點を、人間の潮流が一つの大渦を畫いて始終動いてゐるのだ。

乃木大將の葬儀の時の大雜踏に苦しい目にあつた經驗があつたし、まして、偉大なる人の墓前に心をぬかづけるには、周圍の靜寂なしつとりした時分に行くのが眞實だとおもつた。今日こそ行かうと思つて家を出たのは秋の雨が煙をはくやうに降り出した午後の三時すぎで、乃木家には、二十日祭の行はれると新聞に出てゐた日であつた。

電車が青山三丁目附近に來ると、左右の人道はぞろ〳〵車道にまで溢れる程の人が、降り出した雨にそのまゝ濡れてゆくのもあり、洋傘の相傘で晴着を氣にしてゆく女等もあり近在の小學校の生徒の一列がもまれながらいぢらしく歩いてゐた。みなこの群衆は乃木大將の墓の方に流れてゆくのだ。

停留場でおりると直ぐ、墓地の正面に入る廣い道が傘と人とで黒くなつて見える。其の中にまじつて歩き出すと、道傍の繪葉書商人がしきりと「乃木大將自刄當時のお寫眞があります……」といつてすゝめる。一寸泉岳寺參詣を思ひ出させる。すしや、そばやなどは雨を避けた俄の客で、混雜をしてゐた。

青山墓地の葬場あたりに多くならんだ花屋の軒下に、「乃木大將の墓前に捧ぐ」と書いた紙の下に榊を一本一錢で賣つて居た。若い娘が「御參詣のお方は榊をおもちなさい」と呼んで居る。氣の早い田舍ものはてゝらで、榊を

持ち出すが、榊賣りは乃木大將の墓所わきまでもずつと出て居る。

約三町ほどゆくと愈々墓地域内で、交番があり、立札が出て、乃木大將の墓地を敎へてある。左の方に曲つて、樹木の多い、日陰の水氣に充ちた墓地道を二丁ばかりも歩いてゆく。後をふりかへると自分の跡に見えるだけでも百人、前を見ると同じく二三百の人が動いてゆくのであつた。

參詣の人達はみんな敬虔にみちた顔をしてだまつてあるいてゐる。稀に話をしても、

「乃木さんは優しい人でしたからね。死なれた後々までも慕はれます」とか。

「乃木さんの自殺の眞似は出來ても乃木さんの平生の立派な眞似をするものがありませんからね。乃木さんは神樣でした」などゝ鳥打帽の商人らしい五六人の群がさゝやいてゆく、手にはみな榊を持つてゐた。

ちやうど墓地の一角、麻布聯隊寄りのあたりに來ると木の間に白木の屋根が見えた。參詣の人はひとしく「あそこだ／＼」といふ。

段々近づいてゆく……陸軍大將伯爵乃木希典之墓陸軍大將伯爵希典夫人靜子之墓と同じ高さ、同じ文字で白く揃へた墓標が目の前に來たときは、誰の心も同じ事！暗然として涙をのむのは私ひとりではなかつたやうだ。

「人臣としての典型、夫婦としての典型……」千萬人の參詣者の頭腦に、此の二基の墓標は、カンと植ゑつけられるやうに印象する。

墓地の四隅には五十燭光の電燈が建てられ、背後の空地には、一つの天幕がはられて、二三人の兵卒が、出たり入つたりしてゐる。將校が一人、巡査が一人で參詣人を取りしまつてゐた。墓標の側面の鐵門の前に來たものは、榊をさし出す……。

兵卒がそれを一まとめにして、墓標の周圍に置く。榊の落付くのをながめ、墓標を凝視して拜し終へるとあとへ待つてゐたものがその通りそくりかへすのであつた。

線香臺があつたが、線香は止めてあつた。賽錢を置いてゆくものが絶えないと見えて、あそこゝにかたまつて居るのを、將校が置かないやうに云はねばならぬと兵士にくりかへしてゐた。

巡査が、小さな聲で「參詣せられた方はすぐこちらに來て下さい」といつてゐた。だら／＼と少し下りて右に歩き、小さい墓地の生垣にそつて、立ち止り、乃木家の墓を高い處に見てゐると、立ちかはり入りかはり參詣する人の嚴肅な、うたれたやうな顏が目にうつる。實に高潔な人格の感化をうけるその刹那を見るのである。

地位ある人々も中にまじつて來ると見え、折々は鐵門の中に入り、親しく、墓前に拜し相對した二人の令息の墓を拜した。

學習院の小學部らしい公達が、家庭教師につれられて、墓前に二度も三度も拜するのを見てゐると不覺涙が湧いた。秋の雨が寂しく、すべての人、白木の屋根樹木の上に降りかゝつてゐる。夫人の墓の方に置いた榊につけた赤い幣が、ゆら／＼する。それが美しい犧牲の血汐を思はせるのであつた。

三人連れ立つた女學部の姫君が、喪服に海老茶の袴をはき、黑い髮をかざりなしの下髮にした姿で、並び殊勝に拜してゐた。

雨が漸く繁くなつた。三聯隊の方に出てしばらくゆけば新坂町の乃木邸の前に出るのであるが、日も暮れかゝる墓畔の夕闇に、五十燭のタングステン電燈ももうともつてゐた。

道の見えなくならぬ間にと、青山の町にひきかへしたのが五時すぎであつた。

＊　＊　＊　＊

(別記)青山の葬場殿も十一月初旬までは一般の拜觀を許し、又靈柩列車を見せてゐるので、參拜者は毎日雜踏してゐる、諒闇の都も秋は靜に更けて、いつもならば上野、淺草にのみ向ふべき人の脚が、山の手の一角にのみ向ふのも、思へは今年のみの思ひ出となることであらう。



歸省

長曾我部菊

一

私は故郷に歸りたくてならない。それで私は今直ぐに東京を出發て了ひますが……とから突然に云ひ出した時、私の周圍の人々はまあ！と私の氣まぐれを微笑んで、然しあなたは今すべての事に行き止つてゐる樣だから、其の歸省が必らずあなたの氣持を良い意味に更へて呉れるに相違ないと告げてくれるのであつたそれが私にとれ程嬉しかつたであらう。私の自由がより廣く擴げられるやうな樂しみな安らかさを感じたのであつた。

療養をとゝのへながらも此の頃の私の行き止つた境遇――それが色々の方面から深く考へられた。私はあの男が言ふ事と爲る事とが自分に理解つて居ると思ふて居る。あなたも私も結婚なんかしないのがいゝのだと、明るい晝の光りの中で、目を閉ぢる樣な氣持を見せて彼の言つた言葉は良い言葉であるとも思つて居る私の爲に結婚が良いか惡いかと云ふ二つを考へこんと私の心はいつも惡いと暗示してくれる。けれども私の全感情を支配しようとする『女の情』は絶えずあの男を逃がすなと云ふ樣にさわいで了ふ。殊にあの男の生活が、一日一日と私には謎の樣にわからないものになつて行き、殆ど言葉さへ通じない、他國人のやうになつて行く事を考へると、――殊に以前には一つの壺に充溢ちてゐる水を互に輕うかゝへてそれを飮んだ、――今はもう二人は二人の呼吸する空氣からして全然色を異へて了つたと思ふ時に、胸を裂かす程の哀しさと淋しさとが生るのであつた。

二人の是れ程『へだゝり』を加へた事を思ふ時、私の一つの心はあの男の周圍を靜かに絶えず歩いてつて機會が來る時、燃える火を投げかける樣に、此の感情をあの男の頭の上に現したい……と思ひ、今一つの私

の心は、否、それは私の道をふみ間違うであらう。私は青々した涼しい水の上を微かに風が動いて行くといつたやうに猶平穏にしんぼう強く歩きつゞけねばならない。私の全體を粉砕して了ふのはまだ今ではない‥‥‥とかうも考へさせた。此の一つの思想が明暗をたちどころにして、進まうとする門が私に見えないのであつた。其の時に私は歸省しようと圖らず思うた。歸省をするのが私の現在のすべての事をひらく鍵であるとさへ思うた。

其の歸省の爲めに私の心は戀と云ふ樣な厚く濃いものから、青葉、輝くやうな白い雲、水色の粉をまくやうな風――そのやうな輕い涼しい健かななかにはひつていつてあの男をまつたく忘れて了ふ。然しそれよりもむしろ私は自分の行き止つた境遇をどうにかして救ひたいと思ふ方の要求が多くあつた。

かつて目に親しかつたものが三年と云ふ時の力で面目をかへてゐる。色彩を異へてゐる。そのやうた快い推移の跡を里川の畔にイんで私は靜に見て來よう。あの村の背後を圍む山脈。黒い岩の間を跳る奔流、幼い時の思出となる產土神の森の輪廓が、心の底に畵くやうに見えた時、私は湧くやうな樂しみを覺えたのであつた。

二

寂しい田舍の停車場――白ペンキ塗の標札に『府中』と驛名が書かれてあつて、そのあたりに黄色いカンナの花が丈の高い草幹の尖に叢がつて咲いてゐた。黄色い花瓣の上にてりつける七月の午後の太陽は響きも立てる程強くかゞやいてをつた。

窓から疲れた目を走らせて、やつと、それらの花やプラットフオームの埃や、驛長室の物音を聞いてゐた旅客――それが私であつた、白い絹の縮の單衣にメリンスの帶をしめて風呂敷包を一つもつただけの私の姿は五六日前に東京を出て、神戸で遊び、一の谷須磨で遊び、今朝の汽船で瀬戸內海をわたつた旅人とは見えずこのあたりの小さな町の組絲繰りの女工だとおもはれ易かつた。同じ仲間と思つて、話しかける、銀杏返しの女があつた時には、自分も女工である樣に、樣々の話をした。

此の汽車の走つてゆく土地は山脈の裾野といつてもよい地勢を西へ西へ人家を縫うてゆくのであつた。汽車の通るところから五六里を隔つた北方には此方の山

脈と並行をして、今一層高く、長く、太く西の方へうねつてゐる山脈があつた。山脈と山脈との間は廣く帶の樣に平野が此の國を貫ぬいて一望されるので、みつた。その中凹みをしたところを水の多量な吉野川が、のんびりと流れて、白い帆掛舟が見えたりするのである。

汽車はやがて進行しはじめた。窓から外の方を眺めてゆくと、うつりかはつてゆく、久振りの生國の風物は、一つ一つ私の胸に聲を立てる樣であつた。黒味の多い肥えた土――陰影の多い木や草の姿、マッチ箱をならべたやうな輕やかな家屋を見なれてゐた私の目は、汽車の動くにつれて、黄白色の廣い道路の土の色をなつかしむやうに眺めた。草や木にも陰影よりも黄色い日向の多い心持、木立を植ゑめぐらして城廓のやうに白堊の倉を三つも四つもならべてゐる豪農の家を見ると不思議になつた。こんなに堅固に『家』と云ふものを生命のやうに築き上げていつて、百年二百年と血統の絶えぬ事を祈る人々の重くるしい生活が、周圍の輕快な明るい自然との關係まで思ひ合はさせるのであつて。温かい南の國の人は、動くと云ふ事がどんなに樂だらう。漂ふて暮す面白味は、私の生國の人の心には、決して解るものではないと思ふた。

汽車は『石井』と云ふ驛からは北の方の山脈と距離を少くしていつた。空氣の濃くぼやけた加減ではつきりと見えなかつた山脈の裾がだん／＼と拭ふ樣に遠く眺められる樣になつた。

あの山脈の中程の一浪うつた樣に低くなつて、それから更に搖り返すやうに高くなり、脊中を男の肩のやうにはらした一つの峰、それが秋の生れた村、―松島村を抱へてゐる三峰山と云ふのである。私は三峰山の昔にかはらぬ姿を、沁々と眺めて、山の麓の母の家を想像した。母の家にはかはつた事が多い筈である。人が一人亡くなつてゐる。あの私を糧の樣に生きて居ただけ、私が居なくなつて、命が崩れてしまつた樣に死亡なつた祖母。倉と納屋とを賣り、畑を人手にわたした家の零落、廣い母家の片隅に、一かたまりになつてぼそ／＼何か囁いてゐるやうな、母と小さい三人の子供の寂しさ、そんなものが今五六時の中に私の目の前に現はれて來るのである。（つゞく）

耳袋（一）

猿丸太夫

▲日本人の家へ入ると醤油臭いといつた西洋人の話は兼て聞いたが、佛國の一雜誌に出た『列國人の臭氣』によると、安南人支那人アラビア人ニグロは死屍の香がするとある。日本人の臭氣は食料の穀菜から來るらしいが兎に角チヤンとは違ふ、佛國稅關の一吏員は荷物を嗅いだゞけで、東京から來たのか、北京から來たのかすぐアテルとあつた、失敬極る研究だ、西洋人は十中の十、バタ臭いし、葉卷臭いし、わきが臭い。

▲六月中、一夕京都市の空中を雷公がころがり歩いた、天地とゞろき甘露降りて、全市民ひやひやしたが、雨が止むと同時に三條大橋の袂に繩からげの虎の皮が捨てゝあるのを發見した。鬼も近頃質屋通ひをすると見える、不景氣察すべし。

▲福井縣に六つの乳房を有する女が出た、内二つは普通の箇所にあるも、二つは凡そ一寸上に在り、他の二つは左右の腋の下五寸程下の所に在り、普通の乳房に嚢乳と稱し、長さ約一尺二三寸在り、子供を脊負ひつゝ、乳房を哺せま、一つの乳房より四十滴ほどの乳汁が迸る。醫學博士緒方正清氏曰く、素より乳房は二箇が普通なれど、別に乳房から斜に腋の下に亙る線上に副乳といつて、一箇乃至十箇の乳を見ることがある、人種によつて相違あれど、外國でプエヒ氏の調べたところに依ると、女子五百人中一人の割合で副乳があつた、尚副乳を持つ者七十七人中四十六人は三箇、二十八人は四箇。二人は五箇、一人は十箇あつたといふ。日本で各大家の調べによれば、百人に就き中國邊は四人弱、東京附近は二人強、九州は四人弱の割合で副乳があつた。但し副乳といつても、普通乳房の如く大きなものではなく、最も大きいので、豌豆から粟粒大、小さいのは僅に痕跡を見る位で、乳なとも出ないといつてよい、この話の如き立派な副乳は極めて珍らしいと。

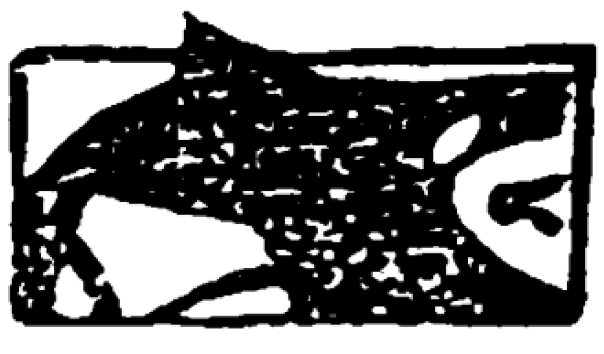
▲貴き皇族の榮譽と權利の一切を快よく棒に振つて、好いた婦人と一緒になつた親王樣が歐羅巴には尠くない、先づ現墺多利皇帝の甥君にして、立派なる王位繼承者に渡らせらるゝファシナンド、カール親王殿下には、數年前の夏、同

國のプラキユーにての舞踏會で、バルザ、クルーザと言ふ平民の一美人のパッチリとして眼の柔かい光に身も世もあられず打込まれて、とうと親王の冠をサラリと脱ぎ棄て、お前と連れ添うならば墺多利の一平民何んのそのとばかり、國中上下の大議論も空吹く風で、この婦人と夫婦になつて仕舞はれた、次に控へられるのは、これも墺多利の皇族ヘンリー親王殿下、過ぐる年維納の劇場カール座で愛らしい女優レオポルチネ、ホフマンを心の底からしみ〴〵と見染められ、不所存者奴と國王陛下の御怒りをも意とせられず、思ひ通り正式の結婚を擧げられた、墺國の皇族には餘程戀の風流の蕉を追はるゝ御方多きと見える、而も同國皇族中で有名なジョン親王殿下の如きは、最も思ひ切つた戀の勇者である、同親王殿下には今より二十三年前倫敦にて美はしき女優ミリー、スタベルと結婚せられた。その爲國法に據りて皇族たる一切の權位を快よく打ち棄ゝ顧みず、世を忍ぶ假の名も平民に相應しきジョンオースと改めて夫婦手に手を取り合ひ、大陸諸國を漂浪はれたまでは一般世上に分つて居るが、それからての珍らしき夫婦が如何なつたかは今に歐洲の皇族社會での疑問となつてゐる、或は同親王は散々零落せられて、マーカリタといふ汽船の船員とまで成り下られ、遂に同船のカラオ地方で沈没せる時船と共に沈まれたとも噂し、イヤまだ現に瑞典國に歸化せられて、名もウルフインと改められて、同國の或る地方に此の間まで生きて居られたとも噂する。獨逸の親王方にも戀の爲平民と結婚せられた人も無いではない、先づルードウイッグ親王殿下には一千八百五十九年に女優のフローリエン、メンデルと言ふのと御結婚遊ばされた、ところが同親王の御姉君にして、ババリヤの皇女のソフイヤ殿下として知らるゝ御方も、トーリン、チエッチンバッヒといふ伯爵に懸想して、嬉しき戀を遂げられた。それから身世界皇族中の一人として、戀の世界に最も熱烈なる大發展を爲されたるは、現墺國皇帝の第一王女、ギセラ姫とババリアのレオボルド親王との間にお出來になつた若き王女へエリベス殿下である、同殿下はバッテンへイムの陸軍大尉オット、ヴオン、シーフリード君と熱烈なる戀に落ち、遂に王宮を脱けて出られて伊太利のセノアに落ち延び、同所で漫遊者の一平民とし　公式の結婚を擧げられたのは六七年前のこと。戀は萬國共通だ。東西なく、上下なく、古今なし。

▲これは聖路易にあつたことだが、訴の形式の珍しいことは世界に無い圖だらう、ヘレンと云ふ未だ生まれない女の兒(女の兒と決めてあるのも面白い)の母が去年の七月電車に乗つて荷馬車と衝突した時、馬夫が指の無い手を擧げて驚いた振を示したので、非常に魘えさせられた、それが爲め彼女の生む兒は、必定其影響を受けて指無しになるだらうと云ふ理由を以て、鐵道會社を相手取つて七千弗の損害を、父ジエース、パートラムの名で巡回裁判所に訴へ出たと云ふ。●●●●●

▲神戸市塚本通二丁目十五番地屋敷に姓を八月三十一日、名を三千年と呼ぶ有名な男がある、種々の會社の株を一株か二株宛持つて居て其の總會の時には必ず出席し株主顏して縱横の議論を行るからでもあらうが、一つは其の姓名の奇拔な事が其の有名ならしめた最大原因であつた、成程斯んな名前は天下廣しと雖も決して二つも三つもあるものでない、誰一人として正當に訓み得るものがないだらう、そこで或者は八月クンと下を略して呼ぶが何だか女の身重になつてゐるやうで滑稽、又或者は上略して三十一日サンといふが、之も年中掛取が押懸てゐるやうで變智奇林、名の方は一日逢ねば千日もといつたきつい惚れ様の「濟元」の女を其儘に「みちとせ」と讀み得るけれど、姓の方には實際首を捻らせる、で本人に就て聞いて見るとニタ〳〵と笑ひながら「私の姓は八月三十一日と隨分自分ながらも長たらしい書方だと思つてゐますが、讀は「ほづのみや」で極く簡單です、ソシテ今まで此の姓で私を笑つてゐた人達が恐縮して仕舞つて貴下は新天皇陛下の天長節ですなと申します、お庇で私も意氣頓に軒昂草莽の身を以て斯く擬へ奉るは誠に畏れ多い事ではありますけれど、新天皇陛下の聖壽の三千年がさて驪りなからんことを祈り奉るのは私の姓名が然うだからばかりではなく、恐らく萬民の至情でありませう、名は「みちとせ」かつて、違ひますよ「みちとし」ですよ、之でも私は男一疋の心算なのですからね。

▲米國メイン州のリンカーン郡と、サカダホーク郡との間に足指六本を具へた男女のみが住んで居る村があつて、五本指のものはホンの僅しか居ない、六本指の原因は數世紀前からの血族結婚に基くのださうで、或時此村の六本指先生が靴を穿くのに不便だとて、町の外科醫に頼んで指を一本切つて貰つたら、村民は仲間外れになつたといつて交際を絶つた。



化粧問答

化粧研究會
婦人美容會　顧問　藤波芙蓉



○(芙蓉曰)八月中旬以來、北は函館、南は紀州、西は九州福岡の地端まで旅行を致し、其同宅に居つたのは九月の上旬だけ、木の葉の梢々に秋の見え染めた頃に歸き一兩日前久しぶりで家庭の人となりましたが、見れば半側の郵箱箱には各種の御方々よりの封書や葉書が二百八十六通、そのうち本誌の關係にて下すつたのが一百十二通の外に爲替券封入のが五十一通あります、それに對する答は代人で出來ることではなく、時間のゆるす限り方劑も早く返事も早くと自身にセッセと認めて居りますが、他にも色々と用務を擔ふて居る身の、待つ人にはそれと知るや知らずや、きびしい矢の御催促、それに醉茗君からは例月よりおくれたから早く原稿をとせがまれ、「日本」には「化粧の話」を毎日一段半づゝ書かねばならず、右樣の次第で中には二月越し二三回も御問合せ下すつた方々もあり、返事のないのをさぞ御不滿に思召てゞせうが、その代り今月書くべき筈の、婦人畫報、婦女界、新婦人、婦女評論等への寄稿を見むる時間を割き、皆樣方の御寄托に報いますから、何卒私の身邊にも御同情あつて、待つは辛くも暫らく御猶豫の程を願ひます。因みに今度の旅程に於いて、函館のすゑ子、たま子の兩孃、京都の都米乃孃、和歌山の菊枝孃、大阪の春江孃、下關の喜美子孃、飯塚の愛子の君、八幡の愛子の君が或は名所を御案内下され、或は御宿を借して下さつた御厚情の程を、篤く〳〵感謝致します。猶名古屋の芳子孃、岡山の榮子孃、足守のみどり孃、福山の那榮子孃、島田のけん子孃、山口の民子孃、廣島のこま子孃、臼杵の元子孃の御許にも伺ふつもりで居つたのでしたが、旅行日程の都合で遂失禮に及びました、殊に大阪の紀美子の君には本當に御氣の毒でした。

○再び紅薔薇の君外三五の御方々へ。醉茗先生は温順の人、藤波は冷靜な男、夜雨先生は口に冷酷で心に熱情あり、芙蓉は筆端に同情あつて心底に寒岩を抱くとの仰せ、それは先にも御答申した如く、何とでも御隨意に、但し私は女子文壇化粧問答の顧問として、皆樣方に負ふ義務は斯道の御尋ねに對し忠實に御解答申せば足ること、他は何にまれ私の自由意志によつて行動し得る權利あるものとして御認め置きの程を願ひます。

問　先月中旬手紙差上げたのに何の御便りもなく如何なる理由でせうか、あまつさへ至急と認めて置きしにも係らず、何の御返事もなく、今度こそは必ず御願したもの、代と忘れずに御知らせ下さい。(横濱、美保)

何事も三度といふ諺にもれず、先には紅薔薇の君に、次には歸京後の手紙書きに今度は手塚樣のこのきびしい御詰問に所喚はせられました。何の理由、忘れずに返事せよ、成程弱ねる人の身としては御尤も千萬、誰方も此位の御考は持つて居らるゝでせうが、さりとは隨分御身勝手な申分ではあるまいか、あまつさへ貴孃よりのは「手紙」ではなく普通の「葉書」で、斯樣な御認めに直接御返事せぬ旨をいつかも御斷り申してあつた筈と覺えて居ります。

問　小鼻の兩側に脂肪が出て赤くなつて居りますが。(波津子)

答　その脂肪分泌の模樣によつては別に考へねばなりませぬが、兎も角乳肌劑を日に三回乃至五回すり込むやうに御つけなさつて御覽なさい。

問　クセ毛で困りますが。(和歌浦、鈴画)

答　美髮劑を御つけなさい。

問　(一)ブエストゾールには何處にありますか(二)合せ鏡に脂肪過多の塗顏料として樟腦五〇、硫黄乳一〇、〇、カリ石鹸精一〇〇、〇とございますのは石鹸のことだと申す人がありますが左樣でせうか、(三)アルカリ性石鹸とは何れの石鹸を申すのでせうか。(東京、すゞ子)

答　(一)横濱境町の友田藥舖にありませう、(二)左樣ではありません。(三)今の石鹸は何れ

もアルカリ性を含まれて居りますが、私の所謂アルカリ性石鹸精とは、緑石鹸を酒精に溶かしそれにラベンダー精を加へたものを申すのです

問　(1)顔の格好を細く見せますには、(2)ソバカスの療法を、(3)廣告にあるヤセル藥の効否、(4)ヤセル方法を。(茨城、千田)

答　(1)詳しくは新式化粧法に述べて置きました、(2)雀斑は乳がよろしいでせう、これはカンフル五、〇、昇汞二、〇、硼砂一、〇、卵白一〇、〇、薔薇水一〇〇、〇を調合して製すのです(3)試驗して居りませんから何とも申上げかねます、(4)朝食を廢し、空腹の時分にカルルス泉鹽三、〇を湯にて御のみなさい。

問　寒さに當ると顔や手が赤紫の斑點になりますが。(越路の姫)

答　ラノリンクリームを御つけになつたらよいでせう、これを調製するには種々の處方がありますが、そのうち最良のものは、無水ラノリン一八、〇、オルモンド油、カヽオ油各一、〇、安息香酸〇、二より成るものです。

問　私は眼が小さいので皮膚師は切開せねと段々益々小さくなると申しますが、切開しても顔美をそこねるやうなことはございませんか、又何處で切開して貰うたらよろしいでせうか。(湯島、みよ)

答　さア如何ですか、兎に角其の手術者の手腕によることでせう、兎も角藤波より聞いたと仰つて駿河臺東紅梅町岡雅堂醫院長山尾氏に御相談なさつて見なさい。

問　(一)色の白い者が化粧水や白粉を日々使ひますと生來の美を損すとは本當でせうか、(二)赤顔を白くするには。(三)硼酸水の微温湯に入れて使ひますと如何なる効がありますか、(四)瓜のシンを取り、糠を加へ袋に入れて使用すると色が白く、艶が出るとは眞實でせうか、(五)同じ洗粉や化粧水を長く使ひましてはよくないでせうか、(六)粉とネリと水との三つの白粉の中、どれが肌に適すでせうか。(岸花)

答　(一)兎角は御使ひになる品質の良否によることと、あなたは何を御使ひになつて居られますか(二)四プロの過酸化水素水がよいと存じます。(三)色を白くすると申す人がありますけれど、大して効果あるものではありません。(四)如何なものですか、ものはタメシといふことも御座いますから御實驗なさつて見なすつては如何です(五)精良のものなら無論變更せずに長く御つかひになる方が適當です。(五)ねりおしろいを御撰びなさい。

問　(1)いくら洗つても頭の臭いのは如何したらよいでせうか、人は餘り毛が多いからだと申しますが、(2)唇がカサ〳〵に乾いて困りますが。(秋草)

答　(1)ドクダミの草を煎じた汁でお洗ひなさい。(2)コールドクリームを御塗けなさい。

問　(一)歯の黄白色なのを純白に致しますには、(二)指のシワを取りますには。(岡山、小草)

答　(一)稀鹽酸で御みがきになつたらよいでせう、併し胃病から來るのであつたら其病原から直さねば駄目です。(二)コールドクリームをつけてマッサージをなさい。

問　(1)私は生來顔が赤く、いろ〳〵の白色劑を試みましたが少しも効果ありません、何としたら白くなりますでせうか。(2)白粉をつけても赤い部分にはツキがわるく、且つすぐハゲますが。(函館、N.S.子)

答　(1)(岸花)さんへの(二)の答を御覧下さい。(2)コールドクリームをよくすり込み、それを拭き取つて艶肌劑をつけ、その上にキセロルクリームをムラなくすり付け、その上に粉白粉を打ちなさい。

問　私は幼少の時から毛深で近頃は一入甚しくなり化粧にも差支ます、何か皮膚を害せず根本より脱毛させる法を。(美津子)

答　根本的に脱毛させますには電氣針で毛嚢を破壊するより仕方ありませんが、これは專門の醫師でなければ實行されませんから、毎度表示してある硫化劑を御用ひになつたらよいでせう、無論これは一時的のものですけれど屢々繰返してやりますと、段々と毛が薄く細く短かくなり、果は人目にそれと見えぬやうになります。

問　五年程前に猫にキッスしました時に爪をかけられたキズが鼻の上に長さ一分程幅五厘位の赤さ皮のすき通つたやうな筋になつて居ります、又腕から下に細つそりとして居りますのに肘がいかつて居るので、着物のスタイルはよいけれど、帯をしめます時は見ぐるしく、若し其鼻端のキズを消し此肘をやさしく見せ得れば、全く美人になれると申されますので。(白き花の人)

答　はア左様ですか、美人と聞いては一段と骨を折つて其猫にあやかりたいと存じますが、爪の痕は私の刻下の淺薄な研究では其療法

を申上げられません、或はラチーム鍼法を應用されたら如何かと考へられます、ラチーム鍼法は土肥慶藏先生の得意とする處、同先生に御相談なさつて御覧なさい、眉のいかつたのを根本的に直すには美容マッサージを御實行なさい、それは精しく拙著合せ鏡に述べて置きました、單にやさしく見せる法については「日本」新聞に目下「化粧の話」と題し述べて居る所を御參考願ひます。

問　（一）十七の少女、目下四尺八寸二分しかありません其の高くなる法を。（二）頤の肉が多過ぎます痩せる法を。（三）丸顔の人は面長になれますまいか。（四）隆鼻術は一度施術しましたら永久に低くならんものでせうか、而して手術の上手な先生及び其住所并に施術料を。（花の里にて）

答　（一、特許長身器といふものがあつて或人は有効だと申して居ります、御試みなさつたら如何です、（二）法によつて美容マッサージをなさい、（三）扮飾の仕方で、見せることが出來ます、精しくは新式化粧法を御覧下さい。（四）低くはなりませんが、ゆがむことがあります、兎に角日本橋蛎殻町天啓堂醫院長塚原氏に御尋ねなさつて御覧なさい、料金は存じません。

問　（1）美髪劑と美髪香油と二品を一品に使ひませんければ効能ないのでせうか、非常にフケが多く拔毛致しますが、これ等にも効果ありますでせうか。（2）コールドクリームを使ひませんければ艶肌劑を用ひましても無効でせうか。（3）美髪香油やコールドクリームには、別に小ビンとか中ビンとかはございませんのですか。（品川、梅田）

答　（1）何れか一品でよろしうございます、（2）艶肌劑としての効果がありますっ（3）ありません。

往復葉書にての御尋ね故、直接御返事致しはかつたのですが、大分御殿山であらうとは讀みましたけれど、よく判定されなかつたので、據なく本欄で。

問　（1）私は毛深い質で、先生が「合せ鏡」の中に御述べ下さつた脱毛劑の原料を買求めましたが、それに混ぜます水の量はどの位でよろしうございませうか、又二五、〇及び一二、五、とは如何なる分量でせうか、（2）お化粧に要する一般の刷毛は何々でせうか。（靜田、彌生）

答　（1）水に適量、ドロドロになる程度でよろしうございます、二五、〇とは二十五グラム、一二、三とは十二グラム半のと、然しそれを二十五匁及び十二匁五分と見られても又は二匁五分一匁二分五厘と見做されても差支ありません。（2）ネリ白粉でのお化粧なり水刷毛、眉刷毛、叩き刷毛位で澤山、粉おしろいでしたら、刷毛は要りません、ポット（即ち西洋眉刷毛）と小鹿のモミ皮で打つのです。

問　（一）顔の血色のよくないのは運動不足の爲でせうか。（二）アレ性の者に一番適當な白色劑を。（岡山、月見草）

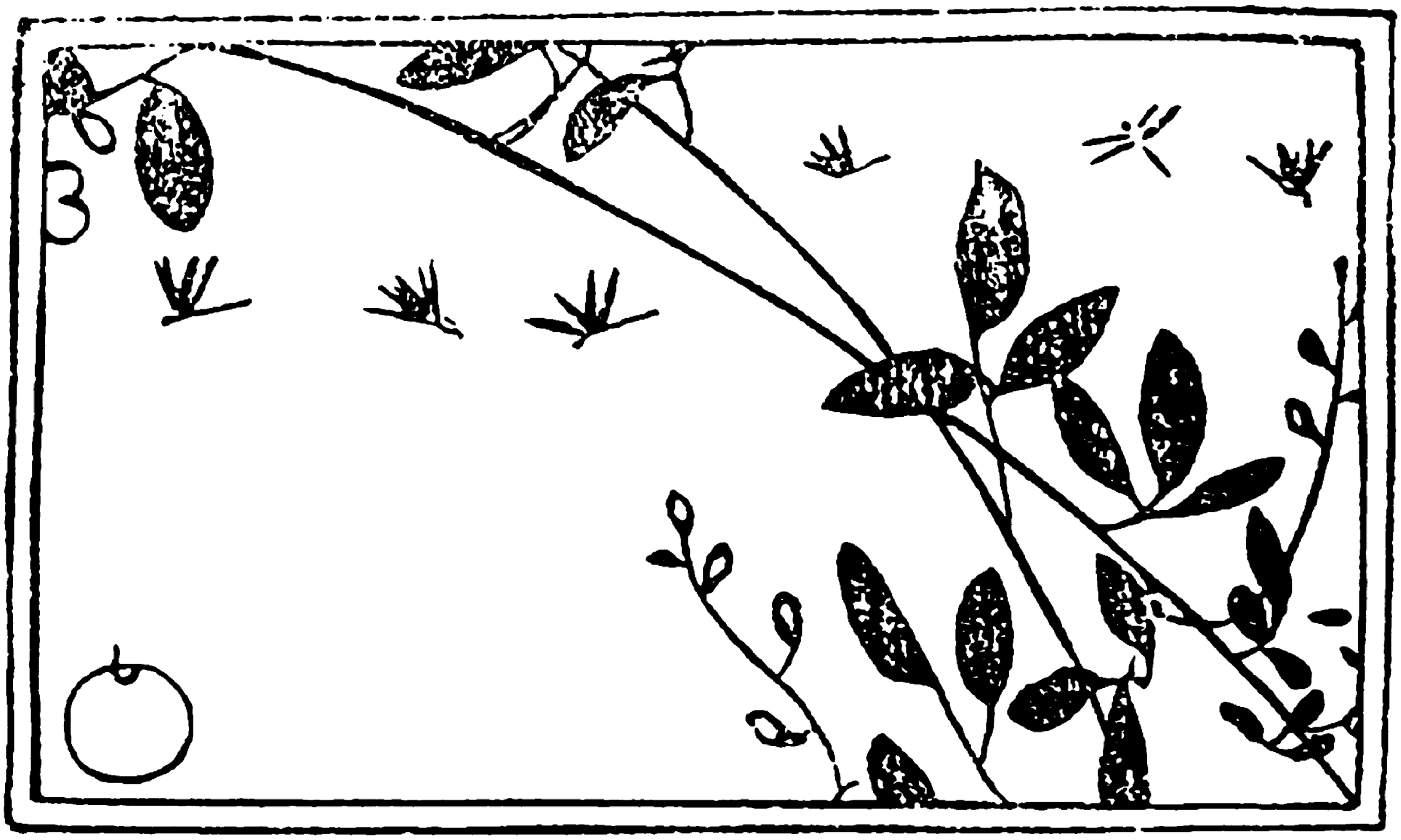
答　（一）運動の不足なのも無論その原因の一つでせう。（二）過酸化水素水とラーリンとを等分に合せたものを御つけなさい。

問　先生ひお著しになつた新式化粧法か合せ鏡かを求めて與れと頼まれましたが、御送り下さいまし、尚其代價と送料とを御申添願ひます。（福井、のぶ子）

答　新式化粧法は日本橋區本町博文館（定價四十五錢、送料八錢）合せ鏡は京橋南楢屋町實業之日本社　三十五錢、八錢）で發行して居りますから、直接御求め下さいまし。

諸嬢の寫眞

別項にも豫告してあります通り本誌は新年から、文學雜誌として又婦人雜誌として一層發展をいたすことになりましたに就いて、此際特に皆さんのお寫眞をお送り下さい、新年號からは大いに誌友の皆様方の寫眞を優待して載せることになりました、今までは他の寫眞を掲げる爲め、諸嬢の寫眞は自づと後へ廻るやうになりましたが、新年からは主として誌友の寫眞を多く掲げ、また早く掲げて、掲げ次第にお返しするとになつて居りますから、苟くも愛讀者である以上は、お出しをねがひたく、記者も亦よろこんで諸嬢の姿を世間に紹介したいと思ひます。



誌友欄



小說

○秋の女

近江　わかば

水野葉舟選

職員會で遅くなつて、藤子が家に歸つたのはもうトツプリと日が暮てからであつた。ガラ〳〵と格子を潜つて暗い土間を踏で行くと、主婦さんが聞きつけて、「お歸りやす、今日は遅うてござりましたな、」と聲を掛けた。茶の室では明るいランプの下で子供達が、ワイワイいつて食事してゐた。

「只今、」と會釋して其儘奥へ行かうとすると、主婦さんは後から呼掛けながら

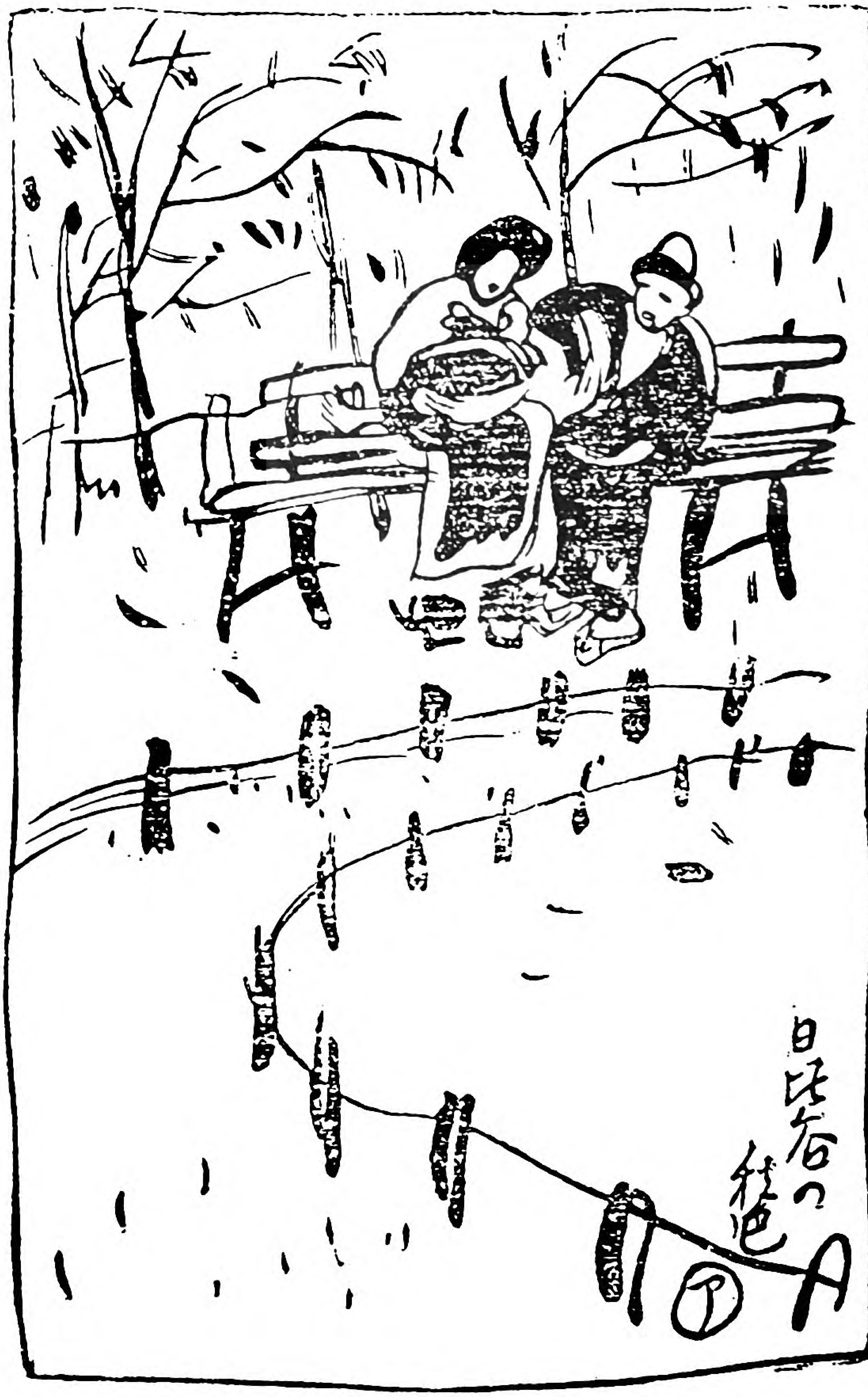
「あの、先刻お鐵を掛けときましたが沸いてますかしら、何としたらお茶が此處に、」

「毎度、どうもすみません、」

藤子は居間になつてる離座敷へ行くと机の上には心を暗くしたランプが點つてゐた。暗がりでマッチをさぐつたりゴテ〳〵しないやうに、歸りが遅くなつて日が暮れる時には、主婦さんがちやんと點けて置いてくれるのである。たゞ間借をしてるばかりなのに、利慾の念を離れて母親のやうにまめ〳〵しく世話してくれる人のいゝ眼附の柔和な主婦さんが、此頃の藤子の薄暗い冷たい心持に、せめてものかすかな暖味を與へてくれるのであつた。

藤子は室の中へは入ると、薄暗い中にぼツつりと坐つた。何處かでぢい〳〵蟲が鳴いてゐる。初秋の風は忍ぶやうには入つて來て、單衣の肌にうすら冷たく迫つて來る。何だか滅入るやうに淋しい晩であつた。やがて藤子は手を延ばして机の上のランプを明るくしたとすぐ向ふの光つた柱鏡にパッと青白い顔が映つた。ドンヨリした眼や、うすら淋しさうな輪廓が此頃の藤子のたゞ暗い心持を暗示するやうに映つてゐる。藤子はもう堪らなく淋しくなつて、こゑを擧げてなきたいやうな氣がした。立上つて食事の仕度をするのも億劫である、何にも食べない何にもしないでいつまでも寢てゐたい、ならば此儘此夜が永劫に明けなければいゝ

に——、藤子は今夜採點しようと思つて持て歸つた生徒の答積も何も彼も側に投出した儘じつと眼をつぶつた。藤子は女學校を卒業するとすぐ當地に赴任して來て彼の常住暗らい顏をした冷めたい心持の父に——相對してゐてもチットも親子と云ふやうな曖昧のしない、じつと長



（天賞）日比谷の秋色　芝　後藤明あさ子

い間さうしてゐたら、自分の心持までもだん〳〵暗くなつて、了ひには自分の脈管の血の流れが止まつて身體が冷めたくなつて了ひはしないかと、疑はれるやうな暗い父や、父が職をやめて僅かばかりの恩給で生活さなければならないやうになつてからは、何處か自分に邪魔氣な素

振の見える繼母や、實母の暖かい袖の影を楯に、何かしら自分に冷めたい眼を向けてゐる弟妹やの手から逃れた時は、ホッとしたやうな氣がして、自分で自分を養つて行く新らしい生活に多少の興味を覺えたのであつた、古い頭腦の校長から受ける壓迫や、同僚間の糾紛や、教師と云ふ名義の許に、古い嚴しい道德で、身運きも出來ないやうに縛りつけて置かうとする世間の眼や、さま〳〵な苦痛や不安はあつたが、それでも生れた暗らい家から受ける壓迫に較ぶれば何でもなかつた。そのうちに五年の月日はわけもなく過ぎ去つた。此頃ふと夢から醒めたやうに自分の周圍を見廻はした藤子は、急にぞつと秋風の身に泌む寂寥に襲はれずにはゐられなかつた。自分はもう二十の上を四つ五つも越した色の褪めた女であつた。華やかな青春時代を少しも意識せずに、灰色の田舍町の埃つぽい小學校の、古びた黴臭い職員室の空氣の中に過でして了つたのであつた。今更其塵のやうに捨てた若き日が殘惜しい、ふと眼が醒めた時はもう中年の冷ぬるい手は後に迫つてゐるのだつた。藤子は冷たい笑ひを見せて逃げて行く青春の後姿を、じつと未練な眼をして見送らずにはゐられなかつた。是迄は容姿なんか少しも氣に掛からなかつたが此頃になつてから急に容貌の衰へにも氣附き出した。色の白い顏の何處やらに底黄ろい暗らい色の漂ふのも見えて來た。眼の力も衰へた。眉の間にも險しい色の見えるやうになつた。藤子は唯何と云ふ譯もなく、たゞ〳〵と萎んで行く花の命を少しでも長く保たせやう、すがれ行く淋しさをまぎらはさうと今迄手にしたこともないコールドクリームなぞを、乏しい財布の中から求めもした、高價な白粉も買つて見たが心の髓に喰ひついた寂寥はどうしても取去ることは出來なかつた。

「先生、お母さんが御用がなかつたら上りましてもよろしおすかて」後で聲がしたじつと考へに沈んでゐた藤子は、眠から醒めたやうに眼を見開くと此家の上の女兒が茫爾と立つてゐた。藤子は昨夜の主婦さんの話がぱつと胸を打つた。急に思案も出なかつたが

「あの、後で此方から上りますからつて、」兎に角さういつて女兒を返した。其話は又意外な話だつた。藤子を此町での或舊家の二番息子の嫁に世話しようと云ふのであつた。幾年其麽話から遠ざかつて居たらう。藤子は狐にばかされたやうな心地で、たゞパチクリと眼を見張つてゐるばかりだつた。二三年前の藤子なら勿

論一も二もなく斥けたらうが、孤獨の淋しさも泌々と味ひ知つて此頃の常住日蔭のやうな薄暗い心持に閉されてゐる藤子はふと迷ふた普通の女の普通に歩いて行く道、其處にはまた明るい陽が射してゐるのぢやなからうか――とふとそんな氣もした主婦さんばいつた。



（地賞）　歩き疲れて　赤坂　嶺田きよ

其家は代々續いた沓家で田地や家作も相應に所有してゐる。本人は商業學校を卒業て今は大阪の某商會

に勤めてゐる。それでこんな田舍の土臭い女は皆に合はないし、貴女なら本人も大層望んでゐられる、いづれ御兩親にもお話するつもりだけれど、兎に角貴女の意向丈を一寸知つて置きたいとの事だつた。主婦さんは何いろ／＼といつた。獨身者の老いてからのみじめさを說いて訊かせた。小さい時から愛に飢ゑてゐる藤子は眞情から流れでる主婦さんの忠言を、無下に斥けられもしなかつた。今日もどうかすると心が其方へ引かれ勝だつた。馬鹿／＼しい取除けて了はふとあせつたが、それでも矢張主婦の言葉は大なな固形となつて頭腦を往來した。それといつて自分が今其人に嫁つて見ようかと其麼氣がしたのでもない。自分のやうな甘味も水氣も涸れたすがれの女を望む、青年の事も憐まれた。其麼初心な青年にはもつと赤い情緒を持つた女が他にあらう。藤子は今迄から別に獨身主義を標榜したんでもなんでもないけれど、別に之と云ふ男に行き合はなかつた。此年まで戀や涙の味も知らないのだつた。たゞほんのゆきずりのうちに何とか思ふ位の男はあつたらうが、そんなのは戀だとは云へないだらうと思ふ。だが何處かに自分の描いてゐるやうな男はあるやうな氣がした。心の通はない先に先づ身體を與へてかゝるといふことは、藤子には堪へ得られない事であつた。今はそんな考へも大分色が薄くなつたが、全然捨てゝ了ふことは出來なかつた。此先どうなつて行く自分だらう——。

ふと我に歸るとランプはぢい／＼と淋しく油を吸ひ上げてゐる。色のない薄暗い室に黑い自分の姿が、ぼつつりと置かれてあるのだつた。——たら／＼と冷たい涙が藤子の頰を流れた。（天賞）

○芳　子

信濃　世良田優子

もう此頃では日ざしがずつと十疊の座敷へ中程までもさし込んで來る樣になつた。衰へてゆく木々の茂みに浴せかける日の光が黄味を帶びて何處となくシンミリと秋らしい氣分に成つて來た、から透明な水色の空氣に浴すると今迄だらしの無かつた筋肉が引しまつて心迄もちやんとして來る。芳子はかうして初秋を一日中じつと坐つてポツ／＼針を運んでゐるのが馬鹿らしくてならない、芳子はじつと針の手を止めて今迄何をして來たかを思ひ出さうとつとめた、そしていつたり考へたけれど是と云ふて記憶に殘つてゐる事柄は一つ

も見出す事が出來なかつた、かうして平凡に沈滯しきつた日を送つた事が如何にも殘念だつた、波一つ立たない平凡さが馬鹿らしくもあり、口惜しくもあり意氣地なくもあり、悲しくもあつた何だか生き甲斐のない生き樣をして來たものだとつくぐ\思つた、そして此平凡さが秋に迄じつと續かうものなら、とても耐らないと思つた、庭の隅でコホロギが鈴を振り上げるともう耐らなく心がそゝり立てられる樣な氣がして何か物珍らしい心の波動を起させる樣な物に出會たい、そして今迄の長いぐ\沈滯が破れて、そこに何か新らしい世界が見出したいと思つた、けれどとうしたならば新らしい世界を見出す事が出來るだらう、南の陽氣な波打ぎはへでも逃げて行つたらば其處に何か奇拔な心の波動を起す樣な事件が有るかしら野へ行つたらば、山へ行つたらば何かハツト思はせる樣な出來事が有るかしら——いつそぐ\戀といふ事をして見ようかしら、おゝそれこそぐ\そんな事を仕ようものな



下町まで　横濱の春湖

らば自分は此家には居られないのだ、堅い家風に育つた自分は平凡といふ繩にギシ〱と卷かれてじつとして居らなければならないのだ、平凡といふ繩が餘り強いので身も心もこのまゝ汚つてしまひやしないかしらけれど〱どうしたつて自分は此平凡から逃れる事は出來ないのだもし逃れる時が有るならばそれは死ぬ時だらう、平凡に生れて平凡に終る自分の生を考へて見れば涙が落ちる、平凡の苦しさの中に有つてよく此自分の性質が耐へてゆけるとそれが不思議な位である、耐へられなくとも耐へてゆかなければならぬ自分は隨分苦しいものだと芳子はつく〲思つた

全體自分はかうしてお化粧したり華かな桃割になんかは自分の生に合はぬ、平凡の子は水色の樣な色彩が應はしいのではあるまいか、と考へたものゝ矢張り桃割だつてお化粧だつて灰色の自分の生活を色どる色彩なのだと思つて見た、芳子は縫かけた物を向ふへ押しやつてホッと一息つくと共に「つまらないな」と思はず云ふた。

じつと緣先の秋海棠を見つめてゐた芳子はあわたゞしくつつと立つた、さうだ呉服店を呼んで袷を買つてもらふと思つた、別に袷も入らないけれど強い色彩の呉服物を並べさせて其色彩に幾分なりとも心を充實させるものを見出さうとしたのである、芳子は母の居間である茶の間の障子を半ば開けて「母さん袷を作らへなくつちやなりませんから呉服店を呼んで下さい」と云ふた「お前袷お有りぢやないかね」「でもあれは何だか野暮ですもの今年の流行のも一枚慥らへて下さいないゝでせうね‥‥ね‥‥私呉服店へもつて來る樣にさう云ふて來ますわ」「いゝえお前行く事お止しよ松をおやり人の目に立つて見つともないからね」芳子は又かと思つたけれど「ぢや松をやりますわ」勝手の口を覗いて「松やお前ためやへ一寸行つてきておくれな、あのね流行の何か袷物にする樣な絹つぽい物を今すぐ持つて來て見せておくれつてね」「へーへー今いつてまゐります」松やはぬれ手を拭きながら臺所に下りた。

芳子は又部屋に歸つて呉服屋の來る間雜誌などを開いて見てゐた。（地区）

○醒めて後

月草女

たうとう幕を閉ぢる時が來ましたのね、T樣。

元より私は這麼場合がいつか來るのを内々恐れて居

たのでした。

と申すのも何事にも早呑込の兄が一人合點で極めた話ではあるし、斯う云ふ私とあなたが熱烈な戀に陷つたのもたつた一と目の直ぐ後でしたもの

さう、始めて彼の天王寺の兄の家でお互に引き合はされたのは道明寺の天神樣の菜種の御符が出る日でしたね、その夜、許されて、二人は天神樣に參詣に行つた。

歸り途、梅の家での戲むれが、すつかり私を醉はして終つて小さなあの驛につゞく短い道ですら私は貴方に縋らなければ歩けなかつた。

始めて觸れた頰のほてり、おぼろの淡い八日の月がホッカリと私達を照らして菜の花の匂ひが、何處からともなく漏れて來る……。

其夜を序幕に私達の幼ない可愛らしい夢の日は昨日まで、恰度五ヶ月續いたのでした。

奈良の夕ぐれ、春日野の柔かい落日のさびしさをしのびながら、ソッと草の若芽を探して寄つて來る鹿の群れを二人で顏見合せて微笑み乍ら名の知れぬ白い草花を喰べさせたりして興じた一と時。



初冬の日光　靜岡縣　小松みどり

舞子の濱邊で、紺青色の浪の中に、はつきり浮んだ淡路島をおだやかな心地に眺めつゝ水盤に入れるとて五色の小石を拾つてあるいた暫しの情緒。

かつら川の青い水の中に白いボートを浮べて、オールを握つたあなたの腕の白さを笑つた、逝く春の朝はまだ／＼幸福でしたわね。

家に居る間、兎もすれば火鉢にもたれて長い袂の先をいぢりながら考へてまうとする私を、

「考へちや、いけない、中毒しちやいけない、貴女は餘り深く物を見過ぎやしないか、女といふものは只、やはらかで有つて呉れゝばいゝ、少くとも僕の女は夢の中の女であつて呉れゝば宜いんです」

いつも頭からから云つて打消して難し相な本は皆取りあげてその代りに繪物語りや、希臘神話やそんな物許りをお讀ませなすつた。

その時、やつと、如何やら開きかゝつた眼があなたの熱烈な情の炎に打消されて終つて、又私の眼はすつかり盲目になつてしまひました。

そして只無邪氣な事を考へて甘い物語りをあさつて甘えた手紙許りを書きました。

あゝ此狀態が終りまで續いたなら・・・　却つて私は一生何にも知らずに幸ひであつたかも知れない。

幸か、不幸か此美しい夢は昨日ですつかり破されて終つたのでした。

ふつゝりと此十日許り梨のつぶての御たよりもないのを實に不安で／＼私が斯うして病の床に入る樣になつたのも元はと云へば那麼事からの氣鬱が崇じた結果なのでした。

それがきのふの義姉樣からの御たよりで何もかも知れた、案外！詰りませんでした。

今まで這麼に凡てをなげうつて思ひ込んだのが馬鹿らしくもあり、自分の張りつめた熱情の遣場もなくなつた今は自ら嘲笑せずには居られません。

では義姉さまは離緣れたんですね。

勿論短氣な兄の輕卒の處置、自分勝手の擧動はにくむでも餘りある、妹にしても噛みついてやりたい程腹立しい。

けれども、義姉樣が離緣れたから……其の甥なるが故に……、その妹なるが故に、今迄の異率な戀を捨てる………。

私は疑はずには居られません、戀なぞといふものはそんな他人の運命と一所に左右さるべきものなので

しやうか？、割合に呆氣ないものですね、私は、私は今の今まで戀（少くとも私共の戀）は、そんな、〳〵浮ついた下らないものとは思つて居りませんでした。

もう多くは申上げますまい。俗に云ふ「うかれものゝ小唄」なぞと思はれては心外ですから思へば八月十日の夜、わざわざ遠い三百哩の道を逢ひに來て下すつた貴方と上野の夜の冷たい町を歩いてそしてあの角の家で二人でアイスクリームを銀のサジですくつて喰べたあれが夢の見納めでしたね。



都の冠　　府下　野の百合

あゝ私は今といふ今、ぱつちりと眼が覺めました、覺めてみれば、世間には驚く事が多かつた。

いつまで夢の影になぞ、まぎれて居られるものですか、之から私はどこまでも〳〵獨りで、ハッキリと開いた眼を見張つて廣い新らしい世界を開拓して行かなければなりません

いつの間にか私の腕はしつかりして來た、すぐ馴れる苦の涙もチヤンと納まつて、勇ましい出門の歌が私の胸に響いて來ました。

さらば昔の飼主であつた人よ、では之で御別れいた

しませう、あなたはあなたで永久に夢をつゞけていらつしやい、私は私で、新らしい開かれた道をふみしめて行くつもりで居ります（離された小鳥より）（人宮）

階上の書齋より

葉舟生

愈々秋になりました。

この秋の心持のいゝ空をながめながら、諸君にこの手紙を書きます。今月は少しずるけた爲めに、十月號の女子文壇を見た後に、この原稿を書けるのがこれも幸に思はれます。

私は此頃、頻りと小唄風の小曲を作つて居ます。それは私一人にとつては、極めて自由な、心ゆく樂しいものです。その出來たものが藝術の作品として、どんないゝものかと言ふことは、私はさう明かには考へては居ないのです。私は？まだ、この心の中に、思つて居ることを、そつくりその儘に、丁度吐息をするやうにしてものを言ふは、心持のいゝものです。

私の心では藝術の制約と言ふことを、自分の心の要求から出發したいと思ふのです。私は小說を書き、小品を書きます。それと同時に、抒情の歌を書く心持を捨てることが出來ない。私は言はずに――歌はずには居られないから歌ふのです。私は自分の吐息がこの言葉となつて出て來る時に、非常に快感を感じます。

今月になつて、私は Largo（ラーギー） Trumpet Daffodils（ツラムペツト ダフフオヂルス） と Tulip（チユリツプ） と Hyacinths（ヒヤシンス） と、外に二つ三つの根を埋めた。私は毎年、この秋になると、この球根を花壇の中に埋めるのですが、その時に、私は必ずこの小さい球の中にある生命の事を深く考へます。[illegible] 神秘はこゝにもある！ そこにもある！

この頃の文界には真に讀むべきものはない。私の愛して居るのは「スバル」その他の雜誌で公にされて居る、高村光太郎氏の詩の外はない。私はこの頃は殆ど正宗氏の作に失望することを悲しく思ひます。

十月號の女子文壇にある、諸君の投書を見て、諸君の趣味の如何に乏しく且つ低きかに驚いた。諸君の目には殆ど選擇の力がない、眞のものを知る力がない、私は悲しみ且つ憤つた。

今月は梅子の「くもり」を受取つた。この人の心が素直になつて居るのを快く思つた。とりあへず、これを多惠子の作の次に本欄に推薦することにする。

さて選評にうつる。島田京子の「夜」は拙劣。その上に意外に低級の作であつた。小靜の「若き心」やはり空想的な作であつた。このやうなセンチメンタリズムな作はいけない。矢澤榮子の「兄妹」はほんとに失望させられた。この人はこの位熱心にものを書きながら、何時まで進まずに居るんだらう。この作などは、活動寫眞式だ。かね子の神女（ヌール）には琉球の土語で書かれて居たのが一寸目を引いたが正體は低級なつまらぬ作。たゞ其終りにヌールの事について註が書いてあつた。それが面白かつた。それを轉載する。神女（ヌール）＝田舍に行きますと石垣をめぐらした大きい屋敷がありますそこは神女と家です昔は琉球王から祿を頂きそして年に幾度と王の宮にお務めに出ますその村に居ては村人から神女々々とうやまはれ神のおまつりには先立つて村人をつれてお願ひに行きますそして代

々その家の後とりの妻が神女になります神女は前代の神女から鏡を受けとつて初めて神女となつて村の人にそれを傳へ前代のやうなお務めをいたします今は縁はありませんけれど昔からの家屋敷があり村の人も相變らずれつくびおまつりの時は先立つてお願ひをする相で御座います。

小やなの「一日」はまだ、まだ根本がいけないが、一寸才筆である。月草女の「醒めて後」は今度はまづかつた。たが、この人の根本が漸くよくなつて來たものを知つた。内山小久子の「花物屋の娘」はあまりに古くさいものであつた。もう少し考へてもらひ度いと思つた。田村よね子の「孤獨」も、幼稚なセンチメンタルな作だ。新免さかえ「姉小路」はいやな文章だ霞枝の「十九」は誇張した處もあるが、まあいゝ。高濱僚文子の「たそがれ」下手ではない。しかし如何にも低級な涙を愛する心がいやだ。此小説壇の多くの人が、それの程度に居るのがいやだ。みねの「微光」はその表情の見せ方にあまり無智であるのに不快であつた。川島和子の「單衣」は如何にもその作者の心のあり處が戯言に近いのがいやに思はれたそれは勿論作者當人の心持は眞面目であらうが、その程度の低さ加減が自分から見ると戯言に近い。この言葉を深く味つてほしい。自分は必ずしも、故なく諸君の作に惡い言葉の批評を加へ度くはない。私は諸君に感心させられる事がある時には、嬉しさを感じる。その嬉しさを感じ得ぬのはむしろ苦痛だ。葵の花の「路傍の人」は田舍だ。あんまりものが解らなすぎる。今回の投書は誰も、非常に拙い。如何した譯だらう。大王丸美禰子の「滑流のパチルス」私は、馬鹿にされたやうな氣がした。世良田松子の「芳子」は近頃になく心持のよい作であつた。何本もない一寸したものを書いてあるが、この人の善良な、眞摯な心持が出て居て、いゝ氣持だつた。今迄の讀んだうちで始めていゝ氣持がした。村山峰子の「雨の日」は幾度いつても、この人は自分を省みてくれない。いくら何でもあまり放漫な心でいゝ加減な事をする。その無智な心が汚く感じられるそして如何にもワイルドだ。なでしこの「淺き思ひ出で」一世紀前の文章である。拙劣も甚しい。紫陽花女の「會つた時」この人の作としては生き生きして居る。しかし、性根が幼稚であるから新舊のものもやはり同じ事になる。わかばの「秋の女」大分根柢がしつかりして來た。この邊から進めばいゝ、これから歩けばいゝ。丙紅の「生」割合に娘らしくつていゝ

以上の中、「秋の女」「芳子」「醒めての後」「十九」「一日」の五篇をとる。

○十九

霞枝

一まうして見る氣はないの？エア美江さん「ないこともない、けれど見てもらつてほんとだつたらどうしよう、ねもし肺病だつたら」美江はふとするどく目を擧げて相手の顏を射た。さうして波立つ胸を沈め機會でもあるかの如く、兩手を抱くやうにヒシと組み合せてじつとかたくなつた。酒子は驚いたけれども何と答へて見やうやうもないので視線の動かない女の顏からすべらして薄つぺらな其の人の膝に、引落して來た時ポタリと、そしてポタリ、ポタリと三四度つゞけざまに落滴するのをた。

「オ、あなたは泣いてゐるの、どうしたんです、どうしたつてんです、私に……私に話さない先に、涙を落すなんて………貴女は誰に許されて泣いて居るんです。獨りで泣く貴女なら勝手に…勝手にお泣きなさい。」酒子は悲しみをかくす爲に、しひてから強く云ふ聲は顫を叩いて鳴つた後のふるひの線で落ち付いては居なかつた。けれどもさう云ひ乍ら涙をかなぐつた黑目の底からじつと近頃めつきり瘦せこけた美江の肩の邊りを見据ゑずには居られなかつた。「許して下さい、ね、酒さん、今貴

女につきはなされて仕舞つてはこの身體のなげ場がない、私が惡かつた惡かつたんです、話さずに死むで仕舞ふと思つて居たものですから、けれ共やつぱり命が惜しかつたのです。一日でも多く生きて居たいといふ未練がたうとう私を貴女の前で泣かせて仕舞ひました、實は昨日のお午前に○○病院へ行つて見てもらつて來たのです。叔父にもかくして、無論叔母になんか何とも云はずに、たつた私一人の料見で「さ……で醫者は何と云ひました、エ其の胸の痛むのは、泣いてちやあ分らない。早く云つて下さい」「云はなくつたつて分つてるぢやありませんか」「いゝから醫者の云つた通りを早く聞かせて下さい……よ……」「たゞ明日誰かと一所に來いとそれだけです、外に何も聞いちやあ來ません」「さうですか」。たつた一筋の望の綱も切れた、濱子はかき消す樣にさうですか、と云つてホツともらす太息を眞白なハンケチに包むでクル〱と左の人指に卷き付けた。

「さうして誰と行く事になつて居るんです」「誰とも……まだ其の事さへ話しちやあない、誰にも知らさずにコツソリ死むで仕舞度いと思つて居ました」暗き運命の道筋を行きつまつたかの如くハタ〱と、とまつて菊の花の寄り合つた唐紙の模樣を茫然と見つめて居た。たゞほんの偶然であつて自分の目に觸れて居るものが、唐紙の模樣である事さへも頓着する餘裕のないまでにボツとして居る今は泣いたさつきの事なんかすつかり忘れてしまつて居るらしい、たつたこの瞬間だけの美江ならはたからくすぐれば笑ふ事も出來る女だと傍に坐つて居る濱子にまでそんな事を考へさせた、「馬鹿な」と濱子があびせかけたのさへ、何だかさつぱりと分らなかつた、何が馬鹿だと云つた樣な顏を向けたのがたゞ聞えたと云ふのを示す許りの樣な風だつた。

「馬鹿な、そんな氣が小さい事を云ふもんぢやない」濱子は立つて行つて、そつと後の障をしめた。美江は急に思ひ出した樣に、骨つぽい頭を包むのを見乍ら「此室の切張は、私にさせて下さいね、いゝんでせう」「ありがたう、けれど今糊がない」「糊の續飯で澤山續飯を揉くして」。美江に續飯をねらせ乍ら、穴を一ツ〱張つて行つた小楊子さつゝついた位の小さいのまでも一々丁寧にすかして見ては、ふさいでくれた。「もうお午ですよ、これから叔父さんに話してどうのかうのと云つてる間に、おそくなる、オヽ美江さん私に行かせて下さい、今日は何もかも私に任せて下さい、私が行く私が行く私一人で行つて來ます、あなたは私が歸つて來てこゝに坐るまで、靜かに寢て居て下さい、○○病院でしたね、駿河臺の」。美江は後に殘された。續飯で固くなりかゝつた顏色や、キリダシと一所に濱子に置いて行かれて、これから日を受ける西向の大廣間に坐つて居た。棚から新小說や、文藝俱樂部を取りおろして、小りんや小桃の口繪を幾度も珍らしさうに見返して居たが、それもあきて机の抽出しから、出した半紙を縱に折つて先の丸い鉛筆で「思」と學校の生徒の作文の題みた樣に書いて、歌にしようか詩にしようかと考へた。「きれぎれに」「秋の夜寒に」だの「待つ心」だのとバラ〱に書き散らしたゞけで、歌にも詩にもなりはせなかつた。紙を引くり返して「父」といふ字を大きいのと小さいのと並べて下に「上樣」と入れた、隣りへ「母上樣」と書いた、新たに鉛筆を振つて「師」といふ字を落して「病」とまとめたかと思ふ間にいま〱しさうに、太い線で眞黒に消して仕舞つた。ふと「私は今年幾歳になつたらう」といふ考がふら〱と足のないまぼろしの樣に浮いて來た。明治二十七年と書いて二十八、二十九とガチ〱點を打つて數へて見た、「十九、もう十九になつちやつた、あゝ厄年だ」と鉛筆を捨てゝ坐り直した。淚がぽとり紙の上にころがり落ちた。

四時になつても、五時が過ぎても濱さんは見えない、何氣なく夕飯に

階下へおりて行つた時、叔母は美江さん今ね浪さんが來ましたよ、そして會つて話す筈になつてる事があるけれど、都合があるから今夜下宿に來て貰ひ度いつて云つて歸りました御飯がすんだら行つてらつしやい、と云つて今迄見ない小さい一人前の御膳を据ゑてくれた。その樣子が何となしにもう浪さんに何もかも聞いて知つて居るらしく見えた「さうでしたか、いゝんですよ、皆さんと御一所にすませてから出かけますから、何だか一人膳では」「いゝから早くおすませなさい、私達はまだこれから風呂に入るんですから、美江さんそれはね、これからあなたのお膳よ、」さてはと思ふ咄嗟、美江は、身を翻して「叔母さん、私御飯いたゞきまん」と梯子をかけのぼりきつたまゝ薄暗がりの縁側に、べつたり坐つた。柱によりかゝつた美江はまるで死人の樣に動かない、其間何を夢みて居たか多分亡くなつた父や母のあたかたみも浮んだらう。冷やかな叔父や叔母も現はれたらう。つと立ち上つた時「よそう浪さんの處へ行くのはよそう。浪さんは私をつれて隅田川へ行かうと思つてるにちがひない。私は死ぬのがいやになつた。思ふまゝあばれてやらなくちや惜しい。あばれつくしてからでなくちや殘り惜しい。今日からもう愼しみなんてことを忘れてしまはう」。

○一日

小やな

光子は寢床の中で色々な幻影を泛べ乍ら、種々な想ひに耽つてゐた。

恍惚とした樣な氣持になつて「あゝ」と欠伸をして眼を開けた。

潤とりとした朝の空氣は、蚊帳を透して氣持好く自分の邊に流れ込んで居る。朝はどうやら秋らしく、音樂から吹き出づるやうな、すが〳〵しい冷風は絶え間なく通つてゐる。

臺所の方からは、コト〳〵とおみをつけの實を刻むらしい庖丁の音が混んで響いてくる。

光子は何も起きようともせず、何時迄も此靜な境に在り度い樣な、身動きすらせず凝としてゐた。

「光さんもう起きないと遲くなるよ」

母は臺所から言ひ乍ら出て來た。

光子は急に腹立たしい氣がして、「えゝ」と言つて起きた。瞬間同僚の意地惡さうな、人の秘密を探らうとするやうな、險しい眼を思つて、堪なく行くのが嫌になつた。

ぶり〳〵した態度をして、寢卷の上にくる〳〵と細帶を卷いて、長い裾をぞろりと臺所の方に、手拭を持つて行つた。

母は情けなさゝうな顏をして、娘の起きた寢床をあげながら、臺所の方を氣にしては振返つて居た。

はたきをかけて室の掃除を濟まして、床の間の花を一寸なほして、箒を持つて立たうとする時光子が入つて來た。

母は笑顏を作つて、

「今日はお前の好きな白萩を買つて來樣ね」と始終娘の氣嫌をとるやうにした。食卓を運んだり、お茶を入れたり、一言いふにも娘の氣を損じはしないかと言ふやうにおづ〳〵としてゐる。

光子は簞笥の前にあつた、着物に着替へながら姿見の前に行 、一袖をかへしたり、開き等して。

「ねお母さん、仕立たらよくなつたわねえ、××も柄の見立が何時も上手だよ、好く似合ふでせう。書生ぽうとは違ふわねえ。」

「ほんとに好く似合ふね。いゝ柄だ。」

母は無理に嬉しさうに言つた顏は引きつゝた、妙な表情を示した。でも

光子は嬉しさうに、何だか彼男に早く逢つて、これを見せてやり度いやうな、そわ〳〵した氣になつて、好きなクリームの羽二重の帶を締めた。

脊のやせぎすなすつきりとした、自分の姿を見て微笑まずには居られなかつた。

光子のさうした風は眞の二十五とは誰が見ても受取れぬ。少なくとも四つは年を捨てた樣だ。

香水をぱら〳〵とふつて、帶に手をやりながら風呂敷包をもつて出て行つた。

母は後姿を見送り、はつと吐息を吐いた。「あゝあれが眞の子だつたら義理ある子に從なつて貰はなければならない自分だから、仕方がないあんなだらしない風を見て居なくてはならない。」と思ひ沈んでゐたが、また思ひ返した樣に臺所の方に立つた。

「ほら來た、今日は大めかしよ。」

窓に首を覗けてゐたKさんは、机の上にあつた大庄の畫と高等淫賣婦だとか、敬遠主義とか書いてある紙切を急いで、屑籠の中に入れた。

「あんな風されちや我々事務員の姑卷に關るわ。ホヽヽ」

と一しきり笑つた後は、皆四人共眞面目な顏になつた。

光子が來ると間もなく九時になつた。けれど社長の顏は見えなかつた

光子は張合拔けのした樣に茫然としてゐた。と社長の奧樣と言ふ美しい顏が頭に浮ぶと何とも言へぬ嫉妬の情が胸に燃えた。と踴塲に自分の身が淋しいやうに思はれる。

「前島さん電話、社長さんから。」

妙に社長と力を入れて給仕が言つたので、男の事務員の方迄此方を向いて、コツ〳〵と笑つた。

光子は極り惡さうに、うゐらしくはにかんだ。そして無精らしく肩をよせて、

「私に、お可笑いわねえ」

と言つて電話室に入つた。

ぴしやんと硝子戸を閉めると、安心した樣に、受話器を手にとつて、甘えた媚の含んだ聲で、胸の動悸を秘すやうに、落ち付いて、

「もし〳〵……何誰、私前島」

「あらまう、今日はつまらないと思つてゐたしたの。……大ぶー嬉しい……四時なのね、屹度參りますわ……え」

「きつとだよ。そして明日の朝××の方に立つ事にしよう。それぢや大森の△△館まで違はずにね。チリン〳〵……

切れて終つた。光子は呆然なまゝうに暫く電話室に佇んでゐた。何だか言ひ殘した事があるやうに。

またリン〳〵となつたので驚いた樣に飛び出した。

席にかへつても人に顏を見られるやうで、きまり惡く嬉しさを堪へてゐた。

隣の若い友が二人話してはホヽヽと笑つてゐるのが、どうしても自分を嘲笑して居る樣に思はれてならない。そして皆なが自分を的に笑つて居るやうに思はれる。

廣いリボンをかけた露香碟のKさんとSさんとは又下らない繪を引つぱり合つて居る。

自分もあの位若かつたら。と思ふと暗い影がさして、今迄の嬉しい輕い氣分は何處にか行つて、唯羨やましさうに見て居た。

「さ早くあげて頂戴よ、願ひましては二萬六十八圓……」

Kさんの透き透るやうな聲で、光子もはぢかれたやうに算ゝいれ出した。

遣る瀨ない樣な、悠々とした、凝とした居られぬやうな、熱い血が全身を驅け廻つた。

「生活のために、生活の爲に」何處かで光子の汚れた身を笑ふ聲が光子の耳に入つた。——

詩

河井酔茗選

○雨の夜

れい子

夜の底に

寂寞の夜の底に
ものおもふたましひふたつ、
雨垂れのゆるいしらべに
うち沈むこゝろ、たゞ二つ、
默して物思ふ女のひとみに
色青き燈火ゆらぐ、
溫和しき心にあまるさま〲のな
やみ。
雨中に咲いた夕顔の
あめにうたるゝまゝに更け行く……
うすき葩になやましき雨のくちづ
け、
夜の底に
なげかはしい心たゞふたつ
——夕顔の花とをんなと。——

窓

我窓見ゆ、
九月の雨にそぼぬれて歸り來し夜
我まど見ゆ、
灯はなやかに燃えてあり
　翅うすき白き蛾のごと
光そゝがれしうれひ心は
すゝりあぐ……堪へやらで、……
わが窓見ゆ、
今宵なつかしき小窓よ、
そこに『われ』てふ烙印あり、
我窓見ゆ、
輝かに瞳を上げてまどの花
——紅うして匂へるはなの
そぼぬれて歸りこし主人の心ひたと
吸ふ。？（天賞）

上達の跡歴然たり。（評）

○夜

豊後　吉田夕草

闇漆の影地を匐ひ
混濁の姿闇に浮く、
——かくて夜は徐々と更く——
燭臺の下よりくる呼吸は
堪へ難き厭迫と、遣瀬なき束縛の苦
痛に哭き
點せられたる灯は
執拗なる戀の奴に似て
熾烈なる野性をその
炎心に秘めて
外觀、從順に
——朦朧と四邊にはびこる——

沈靜!!!
寂寥!!!
打ち續く支配に
貧弱き心はさながら鬼氣の迫り來る
を覺ゆ、
愕然として吾にかへれば
神秘なる夜は闇とたゝかひ
嚴肅なる四邊は
孤獨の哀感に震ふ——
蟲の音あはれにほそく——
……………蹌踉と………
吾が意識もこのたへがたき沈痛に襲はれて消えくくに、恐怖せり(地貧)

緊張したる氣分が見えるやうで快い、詩を作るもの、此感情の高潮に達しなければ詮ない。(評)

○女よ

大連　筑紫　饒子

女よ、女よ、私は汝の心をよく知つて居るよ、今日はすつかり言つてきかせよう、先づ曉訪ふと夫はくく無邪氣な顏で眠つて居る、そうつと起すとぱつちり眼をあけてすぐ窓へよつて空を見るね、ながい事、そすと漸々顏の筋肉がしまつて來て、瞳が美しう澄んで來るよ、其時の心中何おなし嬉しいだらう、東の空を手合さぬ計り、おゝ神よ、今日も新しき幸給れよと祈つてるね、昨夜怒つた事も泣た事も忘れて終つて居るもの其のあとけなさ、女よ、晝間よく働くね、私は矢張り空から見て居るよ有意味でも無意味でも何でもいゝわ仕方がないからと、化粧する外何にも知らぬ、女と同一に、人並に笑つては居るけれど苦しいだろ——ほつと息してじいつと空を見つむるね、涙がほろつとこぼれ出る時、只やるせないだろ——ほんとに汝の仕事は多くて、雲の行へになつかしい故鄕想ふひまはないものね、可愛想に——。

夕暮の汝の心夫はみじめなものよ、窓によつてぼんやりと、いつまでもくく宙を見つめて、考へ込んでる、疲れくくた心には刺戟も反應もないあゝ目も口も耳も利かなくなつたと無雜作にねてしまうね。けれども眠れない、矢張り窓から物珍らしさうに空を眺めてるね、そしては過去の事がありくくと浮び來ると、つひ泣き出すね、如何かする如何かする足をじたくくさせる、それでもう疲れてねむつてしまふ、私は安心するけれと情ないわ、でも如何する事も出來ないもの。(人貧)

好い散文詩だ。(評)

○ながき日(WELCOX夫人)

バンクーバア市　池川　むら子

曉の東の空は紅く晴れて
あゝながき日

引き戸を明けてうち見れば
夕べの霧はいとかすかに〳〵
入江の彼方にうすらいでゆく

あゝながき日
青き山の彼方には小鳥の群
歓喜の歌は水銀のやうに湧きあふれ
ゆら〳〵とゆれてこぼれ散る

あゝながき〳〵日
私の家の傍にばらの花が咲いて
人の知れぬ悲しさをそつとさゝやく〳〵と
まあばらも悲しむの
　西洋にもおとなしい閨秀詩人が
居る。(終)

○秋の海

栃木　N子

遠潮は花藻ふくみて放昨の
白緊流る、秋の海路を
そよろ〳〵の浮け歩み。――
絢き綺織の袋の裾に
亂れ縫ひせし玉や花
いと輝かに装ひて白帆遥かに
紐ふて來ぬ
生活とてや水深う阿古屋貝採る
島の女に五尺なよらの黒髪と
玉をのべたる腕を吸ひて
來ぬらし――浪の香にまがひこそすれ
流れ藻の葉のかをりは白珊瑚

やはり素肌のにほひとも
見よ！遠つゞく一帯のうす紫の

消ゆと見め。―又一盛と遷りて
あゝ又ひらく浪の花!!!



満月の宵　大阪　大阿さとの

汀邊に花ひとさかり静やかに
いと静やかに白銀の散りて盛りて

げにまぼろしの泡沫の夢とも見ゆる
一瞬の、白き被衣の――

――美し舞の枝――

　クラシフクの詩も否定はしないが、これだけでは未だものになりかねる。(評)

○秋の哀調

羽前　長澤美也子

暮れなば暮れよ此の夕暮
行きなば行けよ、此の誇り多き少女の時――
我は強ひて止めず。
……されど……少女の名に別る、を悲しまぬにあらず
みづぎしのクロバーの上に身を横たへて
水鏡せし時――
我が面には……　たしかに悲哀が含まれて居つた
かくて――熱烈なる戀を捨て、若き日は
夢の如く幻の如く
過ぎ行くのだらう

　よほど自然に出來てゐるが、未だ淺い底が見え透いていけない。(評)

○小曲

羽前　高山滿智子

冷たきは
若荷の花の開きゆく心。
絹の如き肌ざはりの
青き平行脈葉を辷る日光は
三すぢ四すぢ
濕りて柔らかき土の上を匍ひ
生れてまもなき蟲の羽に似たる
蒸發氣は
細やかに
舞踏りつ、
歌謡ふ。

　小曲らしい。(評)

○一人の秋

和泉　K　子

秋雨の夜

きゆふツ……きゆふと
玩弄物の人形が泣いてゐる。
淋しい雨が悲しげに
桐の落葉にすゝり泣く靜かな音にも
秋の哀れがしみ〴〵と身に沁むものを――。
きゆふツ――きゆふツと、痛ましい聲で
人形を泣かせる、少女心の遣瀬なさ。

秋の夜

美しい月の光と、
清い草葉の白露と、
音樂のやうな蟲の音に包まれながら
尚も淋しや……
　(少女十九の今日をなほ一人で秋の野に立てば……)
彼方には……
若き二人は銀の笛吹きて遊ぶに――。

若き心

契ひたる
契ひたるにはあらねども……。
靜かなる薄暮の空に
悲しともなき彼の君の姿を描き
一人の秋の淋しさに、若き心は
怪しき思ひに惱みゐる
契ひたる
契ひたるにはあらねども……。

　三篇ともうまいが殊に「若き心」の巧妙さはさらに來る投稿の群に交るべくもない(評)

○樂屋より

小石川　田村よね子

髮下の惱ましき色に
謡ふ唄かひ……
紫の暗き不安よ、さあれど
白粉に匂ひ動く
見よ……美しき、灯の下。
樂屋の隅より浮ぶ
女の楽屋より……
プラートの嬌笑
拆木に醒むる
若き夢の瞬間
奏樂に胸踊る
根の滿足

　浮いた調子だ、しんみりと感じない。(評)

○弱きこゝろ

大阪　小さき泉

夕まぐれ

やゝ、肌さむき浴衣の素足に、
もつれかゝる初秋風のすがくしさ。

灯あかき街行けば、
顔美き男の幾群が
人まどわしの歌うたひつ
かゞやく瞳、微笑にさしまねく……
——弱き我こゝろにつけ入りて——

夢の如、
楽しき想像、
悲しき想像、
積みのはくづし
くづしてはつむ、幾日——、
秋の夜はもの思ふによけれど……。
走らむとするこゝろ……、
逃れむとするこゝろ……、

あはれこのあこがれ心、
斯くてなほ、何處までさまよひ行かむと
すらむ——。

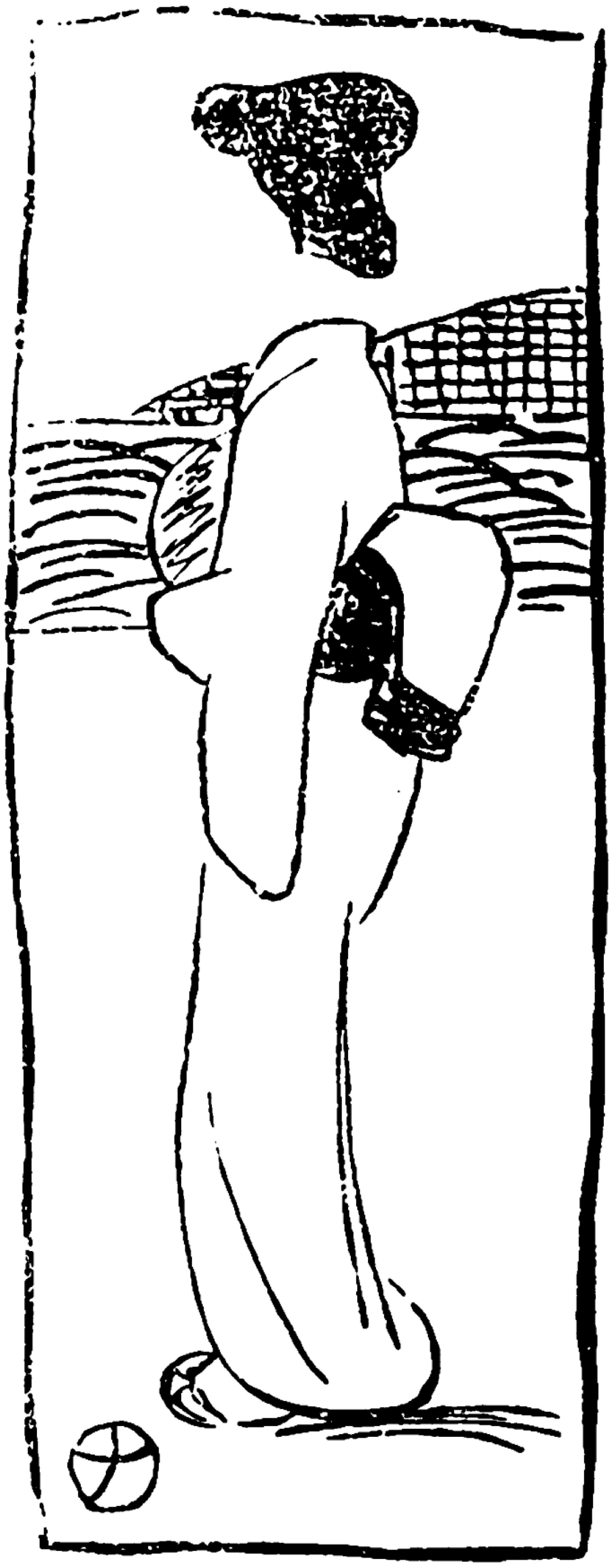
おとなしけれど弱し。（評）

○暮れゆく海邊より

横須賀　美　葩　子

沼路の前の樹木にからまる蔦の燃りのあはれは
しばし丘をめぐりて迷ひこありしが
やがてわが小さきからだをかこみゐる
赤くたゞれて沈みゆく秋の入日のまへに
ひれ伏す小草小草の實は飛べと
戀ひにとらはれし女こそはやるせなし
されど
なげきの心のまへに連なりて默したる夕の海よ
鴎の夢をのせてひろびりある海よ
あゝ汝、海は
幸ひをひとつにあつめて

戀の苦しみ——
この心ゆるめたし。
永き別れは死よりも辛し
死なば諸共。
たゞ今のこの戀ごかれ、
そのなやましさ耐めんのみ。
まあれ……まあれ



別荘にて　酔田　明石浪子

丘にたゝずみて胸をいたく若きこの女をなど設さゝる
沈着、多少の熱情もある。（評）

○疲れ

福岡縣　稲　花

別るゝに如かず。
この苦しみ——眞き心、ひき緊められし膃、
野も悲し、山も悲し、
秋の悲しさ。
別れなばまた淋しからん。
暫時だに。

やるせない心が能く表はれた。（評）

○朝の心

上毛　雲　路

九月の朝は

森の瞳にとりかこまれたやうにきら〱と白む
プラチナに輝くわが心
其の心のたのしさに
燦々として映るは
丘の森の上の大日輪の明るさ。

極めて幼稚なれど、此子侮るべからず。(評)

○嫉妬の花

播の平にて　落葉子

もつれもつれた三味線の絃で
今日きあつめた花瓣を
くゝつて投げたか浮き草の花
眞晝下りの山中の青澗に
物淋しさうにうき〱と
しほらしさうにカラ〱と
さらつと光線の帯かろやかに
眠るやうな濃緑の葉の梢から投げ捨てられたその時
岩かげに毒蛇はをのゝき眞紅の舌をうごめかし
花はみなふるへかへつて互にひしと抱き合ふ。
枝をはなれた花只一つ
眞白な頬を輝かせ光の中にうく姿
眩いやうなその姿
ねたみ心にあとの花葉にかくれては ひそ〱と
枝にもたれて悄然と
運命語る花と花
からんだ絃の絃たつて行かうとするか
しく〱と啾啾く聲しづか、夢見心地の 花一つ
苔の匂と溪の香、緑の色と水の色
光にとける眞晝時
嫉妬に浮ぶ白き花

もつと直覺しなければならぬ、考へよりも感じを味ひたまへ。(評)

○月見草

信濃　夜司子

いかなれば月見草
小暗き宵に咲き出で、
蒼白き月光に悲しきふるひ浮べては
夜を一夜寂しき色の黄になやむ……

キラ〱と流れの底をかいまのぞき
今山の端に沈まんとして夕陽は
白き河原の石の一つ一つに輝きてあり
思ひなやみてたど〱と

胸にあまりては伸び上り仰ぎ見る濡れし瞳に悲しく〱も夕陽の光はうすれやるせない寂しさの迫り來る別れの路に
ひろがれる淡闇の其中を
ほの白く月見草たゞ一つ匂はしかりき

あゝいかなれば月見草
曉の明るき御空に咲き出で、
強き光線あしたの太陽を仰がざらむ。

詩は上手だといへるが、最初の考へ方が惡かつた。(評)

○底の哀愁

福井市　木村よし子

曉となる前の亡び行く仄の明りを
すさむだキッスの窓口から覗いて見る
心寂しさ

凡てのもの、片方に
逃さおくれたら寂しい夕暮の仄明りも
いつとはなしに音もなく
消えさる悲しさ……。

行方を求め
消え行く低いピアノの青ざめた曲に
青ざめた少女は歌をうたひ
歌をうたふ間も日は
さみしく暮れて行く
かくてあゝ寂しく
凡てのあさましいものと
共に暮れて行く
青ざめた心よ
その底を辿ひ行く哀愁よ

柔かい心が表はれてゐる。(評)

○無花果

堺市　茅草

青ともつかず赤ともつかぬ、
寂しの色の實を持ちし
重なりし無花果の木に――葉に
シトシトと、秋雨が降りそゝぐ
ふりそゝぐシト〱と
青き葉は――ひたすらに頭ひつゝ
銀の液を吸ふ――

初心の作、これからだ。(評)



人事（散文）　編輯局選

○鍵の音

大分　みね子

未だ絲の殘つてる針を納れてから、膝の上に表返した片身の、衿から衽の剣先のあたりを靜かに撫で丶、ゆびわを抜くと一所に横の針箱に手をやると、こつとり音がした。毎日。向うの高窓から見ゆる四角い空に薄鼠色の雲が薄すり廣ごつて其所々の小さなたくりがぽつと赤味を帶んだ頃、此木とも金とも付かぬ執着のない音を聞いて、針箱の蓋を閉ぢる、と今迄張り切つてた瞳が、緩う疲れて物影から夕暮の匂ひのほのめきそむる部屋にわびしう動く。いつの頃からか私は此音を一日の鍵の音と思ふ樣になつた。……それは古い寺院である。鋭く射す白日の明るみに、震へ乍ら泣いている人のやうに形の剝げ殘つた塗の丸柱や、所々はじけたすさ藁にほつと塵の積つた、茶黒い壁が、ひたくと寄する宵闇に見えて、黒衣の下から曳く白い裾と白い顔とを浮せて、音もなう現る丶尼僧が、靜に扉を閉ぢて、がつちやり錠をおろすと、寂しい頭をたれて、今日も亦生の一部を恙なく此扉の内に、納め得た感謝と淡い悲しみにひざまづいてお祈りをするやうに消え難う廣がつて行く鍵の音を追うて、さびた御堂の暗い中に佇んで居る。――此麼想像が、針もつ手に際立つて蒼い靜脈に夕暮の色の匍ふ頃、いつも同じ形に現れて來る。

人の齡に話くるといふ限りない悲しみを覺えてから木の芽時から青梅の頃まで惱まされる、右の肋骨に創傷の樣な鋭い強い痛みを識つてから、苦しい日と、靜かな日との連續は、默して今、二度目の初秋に私を運んだ。より所ない心の、追はる丶ま丶に小さな事を願うての後のやすらひは、いくつか集つて、いつか青い愁しみの一つになつて、胸の底に沈む。

緋繻子の帶しめし往し日よ！土藏の金網窓から洩る白い陽を拾うて讀んだ戀物語に、年にはませて潤うた心に、美しう融け行く戀を懷ひ乍ら、ふと同じ心の端に我物と誇る白い肌も肩から乳房にかけての豐な曲線

も、すすきり透いて見ゆる薄絹に覆うた胸を肉を、柔い雨の囁く夜、夢に入る前、靜に寄するは美しい顔の男ではなかつた。私の思ふ事も云ふ事もよく解つてくれる幻の男だつた。豐かなりし情よ。今勉めて桃色の灯をかざしても優しい男の姿は見えぬ。たゞ殘骸と冷えゆかんとする幻影の上に突伏した、僅に丸い我肩と、それにかゝる肩揚げの除れし着物。

私はたまらず膝に重ねた手と手をぎゆうと握りしめた。薄明があえぎ〳〵白い手に纒る。（地苡）

○たなばた

備中　中西りか子

七夕樣とよむんだよといふとはじめの間はたなばた樣、おりひめ樣といひ〳〵するけれど、おしまひにはしちた樣になつてしまつてる。日暮村の馬鹿婿の牡丹餅、牡丹餅といつた話を思出してをかしかつた。けれど私にもあゝした稚い思ひ出がある、私の幼年の歷史を目の前に展開されてる樣でくすぐつたい。八つ頃までは上の姉たちが千代紙を切つて書いてくゝり付けて立てゝ呉れたのを見るばかりで喜んでたものであつた。それがいつのまにか變化を好む子供心は、曉のくろに出て芋の葉の露の玉がぴろうとの樣な葉の上をころ〳〵ところげて、朱盃にうける珍らしさを覺えた。赤や紫の千代紙へやたらにぬる墨の香りのものなつかしさも、綿の樣な心に柔く刻まれた。手傳つてもらう樣になり、手傳つて上る樣になつて十年は夢の樣に過ぎて行つてしまつた。

今はもう喜美さんのお相伴といふにすぎない。とんなつもりで一生懸命に書いてゐるのか知らないけれとならひとなつて幾年かつゞけて行つた後、ふつと觀る時があるに違ひない。丸つこい指でこしらへてくれた紙よりに、短冊だの提灯だのお夜燈だのをつけて、笹の小枝大枝へ配色のいゝ樣にくつゝける。私のこよりはきんと立つけれどこれはたゞない、よりむらが出來て蛙をのんだ蛇の腹のやうな、あんな丸つこい指では出來ないのも無理ではないが——けれど柔くてむすびいゝ。

つけ終つた二本の笹を緣側にたてゝ、笹と笹との間へ赤く熟れた丹波ほゝづきを綠につないで提灯の樣にぶら下る。『たなばた樣、ほゝづきとつてもだんないかだんないだんない』ひとり問答してあけの朝水に流す

までには一つも殘らずぬすんだものだつたといつやら
母が言つて笑はれたことがふつとうかぶ。

一茄子のへたのところへ口をあけてしつぽはなんばきびの毛を入れて目玉は小豆の粒耳は南天の葉、お箸の四つ足、ほゝづきあたまの七夕と織姫を乗せて、錦出の瀬戸ものゝ川へ立てる。

二つの赤いぼんぼりへ灯をともすと、西瓜や味瓜は一ややかにかゞやくのであつた。泉水の燈籠の灯が鯉



はしもの　神田　関口き●ん

のおよぎにゆら〳〵夢の如くゆれて七夕の夜はふけてゆく。喜美さんの顔にはかすかな睡眠のかげがおそつてうつとりして居た。斯くして祭つた明けの朝は、牛も姫も笹も色紙も小田川のながれにすてられて赤に紫に浮びつ沈みつしてあてもなく漂ひゆくのである。小さな努力になつた笹が流れゆく毎年のあすの朝は小田川のへりで小さな人達がやるせない顔してみ送るのがつねである。

千代がみは灯かげにまたゝきながら、笹がなずれは風かにさみしいあたりへ傳つて二人の心にしみてゆく

（人宮）

○かんざし

大阪　町下冬子

私は油氣もない束髪のあたまにも似ず、いつも一ツの銀の平打の簪をさして居ます。長い二本の足が又なく心地よく頭の地にさはるのが嬉しい、此かんざしを祖母からゆづつて貰つたのは、丁度十歳の夏、長くのびて暑くるしい、お河童のうしろの髪を、ピンツケつけてはじめて上げて、牛若丸が結つて居るやうなマゲに結つて貰つた時、祖母が何か大切な實物でも與れるやうに、古ぼけた鏡臺の引き出しから出して、今は最う覺えても居ない、むづかしい文句をつけて與れた物です。

其頃やつと流行しかけて居た、赤い大さいリボンや、花簪を欲しがつて居た私は、かうした祖母の大切さうなかんざしをも、あまりに見ばえのしない、骨物だと物足りなく思ひました。

まうしてともするとまだ根にとゞかぬ、短い髪が多くてマゲがそらそらにゆるむと、足のおもたい此簪は知らぬ間にスル〳〵と私のあたまから脱けて落ちよう〳〵としました。

夏のあそびの星祭り、七夕の夜でした。天の川とか織姫様とか五色のうすい紙に、おぼつかない字で書いた短冊がヒラ〳〵と若竹の葉の下で舞つて居る。軒の紅提灯の下で、最う前髪も上げて大きいチゴワに紅丈長をかけた、十三の姉さんと、それお牛だのそれお馬だのと、茄子や胡瓜をいぢつたり、とびまはつたりして、其夜は夢も見ずに明けた、翌の朝チゴワのそさ〳〵にくづれたあたまに手をやるとかんざしがない、枕の下？寢床の中？ない。祖母さんに見つかつて「ふうさんかんざしは、」ときかれるのがこはさに、ソツとかくれるやうに門に出て七夕の竹の下。

五色のうすい短冊が夜露にしつとり濡れて竹の若葉にぴつたりと、くつ附いて居る。其下の下の方に、あゝ有つた。光つて居るかんざし。小さい竹の枝と枝をまたいでブラ〳〵と長い足が動いて居る――。

うるさく氣をつけられるが厭さに、長い間手文庫の中に仕舞つて置いて、いさゝなかつたのは、それから又二度も落して拾はれた後のとです。

今はハラ〳〵とおくれ髪の多い私の束髪の根にしつくりと心地よくさされて居ます。お芳ちやんも十六の年橋から落ちて死に、祖母も今春の葬れ山吹の花がやる瀬なさうに散る頃遂に逝つて仕舞ひました。

たゞこのかんざしは變りかはつて行く私の頭髪の上にいつもおとなしい、地味な光をして柔かい夢を語つてくれます。

祖母が十七の娘の時、津山の城下へ注文してこしらへさしたといふ、平打の此かんざし、松竹梅の念入りの彫刻よりも、裏だと云ふ方の思ひきり翼をひろげた美しい舞鶴は、今もかなしき私のローマンスの中に生きて居る。

○妹は逝きました

府下　笹本多美子

泉水のさるすべりの下で、蝸牛を這はせながら「でん／＼蟲々、角だせ槍だせ。」と歌って居た子は、今日は冷たい骸に變って居ります。あまりに飽氣ない逝き様ではありますまいか。醫師は腦膜炎と申しましたけれど……。切めて三日も看病してなら、之程までに思ひきれなくもなからうがと、母も乳母も泣きました。

新家のおばさんに教はりながら、緒麻をつむいで縫ふてゆく經帷子の針の目が、ともすれば涙の眼に、さら／＼とあやしうちらついて、手元が狂うて了ひます。

最後のお湯をつかはせて、眞紅い無地のメリンスの袷に、白いエプロンをかけさせ、白紺の大黒帽をかぶらせて照美子を、抱きじまひだとて祖母から母へ、母から私の手に渡された時、あまり、にそのやつれないあでやかな顔を見ては、このまゝ墓に埋めた後、若しや、眼をさまして驚いて泣き出しはすまいかと、たまらなく不安の念におそはれました。

いみじうも
　頬のあかさよ
　　やさ眉よ。
永久にねむる
　たれが知るべき

ふつくらとした頬に、そと接吻けました時、おゝその冷たさ!!!千代紙を貼てんだ過ぎし日に、可愛さのあまり、ぎゆつと抱きしめて、頬ずりした人形の頬よりも、もつと／＼、引き入れられる様な、その冷たさ、あゝ、やつぱり照美子は神様に召されたのです。

三つ身の經帷子が、しつくりと身に合つて、紅緒の草履に、桑の杖持たせた、巡禮の様な姿を、乳母は見て狂氣の様に、身悶えして泣き咽んで居ります。



雲雀山のお話を畫模様にした、友仙メリンスの蜜座蒲團は、ふんはりと、柩の中に敷かれて、照美子が永久にさめざる、柔かきベットはつくられました。

祖母は、遠い旅路の用意にと、耳の藥や齒の藥を、小さな袋に詰めて腰に下げさせました。人形もお菓子も、日頃手にしたおもちやなど、心おきなく入れ終へた時、父に呼ばれて、四人共、茶の間に立った後、はたと蓋を閉す音、つゞいて、胸にくひ入る様な槌の響が……。私は伜と耳を蔽うて、母の膝に俯伏した。

甲板にて

下谷　山田いま子

小さいお膳たの、紙花たの、放鳥などを先に、五つの祝着にとて新調された、紫地に、源氏雲と、菊花とを、有職風に現はした、派出な友仙の晴着をかけた小さい柩は、一緋の衣や、紫の衣の人に守られて、しづしづと門を出ました。行列は、やう／＼に穂の靡きかけた稲田と、すゝきの多い雑木林とに挟まれた道を、うねり／＼てゆきます。武蔵野を、北より南に、吹き分けてゆく初秋の風は、柩の下に垂れて居る緋縮緬の附紐を、ひら／＼と舞はせて、奥の柱にからみました、夕陽は今、御嶽の頂上から、最後の金箭を、しきりと、しめやかな行列に向ってそゝいで居ります。

○短刀

播州　田中落葉子

野の廣さが中に生ふる草の實の紅さを拂ひ落せとてか、誇らかに野にさく花の數々をきりとれとてか。

あゝ我に與へられし短刀の光のうるはしい事よ。

少女の心は狂ふまでにその輝のうつくしさを愛でたのである。

播磨の野の靜けさに生きて、やすらかに死をまつべく諦めた人の子であるのに。

さはあれど少女の心はそゞろにそゝられて。

無法な七月の太陽は、強烈な午後の光線で眞紅な百合の花の瞳を射つぶさうと企てたのだらう。我がパラソルの上にふりかゝる光は恐しい位であつた。

私は丘の家を出た。たゞ出た。

町はづれの鐵の橋を渡つた。紅い帶の後姿が死した樣な眞晝の町に現れたのを知つて居るものがあるだらうか。そのやさしい姿かい。

こゝまで思ふとき胸の血は音をたてゝ全身をめぐる。我手はおとなしく膝にくまれて、ぬき放つた短刀は濃緑の草の上にすてられて、夕の沼の水は冷く、熱した視線を吸收した。

幾軒もつゞいた黒い屋根は疲れきつた吐息をもらし、戸毎にたれた日蔽は死したやうな姿であつたあの町。

かうした家の或一軒に強い刄の輝を見出したとき少女の心はたまらなかつた。

強き男の腕にだきしめられたやうに輝きは強く我をひきとめた。私は店の中に入つた。

幾ふりか氷のやうな短刀をぬいて我が前に並べられたとき我が手は最も光の鋭いのを握つたのである。

靜かに白鞘にむさめ胸にひめ、パラソルにかくれて強い滿足を感じた瞬間強度の恐怖に抱きしめられた。

惡の子の樣に無言で求めた短刀。

迷のやうな短刀。握る毎に我が血は躍るのであつた。

今我が前に捨てられてある。たれかきて鞘にをさめて草にかくしてください。

この沼水の底ふかく捨てゝさへ。けれど光がなつかしい。またおそろしくなつた。矢張すてないで…………。

播の山や野や水や笑みつゝ我を死に近づけてくれる。

今日も一日の道を、明日もだらう。明後日も。

草の上に短刀は光つて居る…………何か訴るやうにあの疑惑の光が！光が！おそろしいのだ。

赤い草の實はホロ〳〵と莖をはなれて落ちて行く。

○ある夜

東京　奥座明子

海の上から來る風に輕い單衣の袂をゆるがせつゝ遠い海のかなたを眺めて居たけれど淋しい心は限りなく、

十分たち二十分たち三十分たつても薄闇のたちこめて乘も下りの人が往來してもなつかしい聲をきく事は出來なかつた。それでも自分は今かいまかと待ちわびて居た。

廣いはてしもない空と海に、日の樣なあかい〳〵まるい月は笑つた。夢の樣に浮き出てゐる棧橋の影から笑つた。ポツトしたその姿を見た時の自分は堪へられない程に淋しく感じたそして私は夢二の畫にある悲哀の姿に愁の瞳をまたゝく女の樣な氣にもなるのでした、赤い月は雲にかくれて海上から吹く夜風は冷たかつた左手にある洲崎の方にらら〳〵と灯がつらなつて恰度向うの海に浮いてゐる樣にみえて、海には小波がよせては遠くに潮音を傳へて居た、二十五分の後月は青い光を下界に投げた中天にかゝりし月影は青かつた小波よする海上に、そして單衣に寒い程夜風は涼しくたえまなく吹いて居た、淋しい心に幾度か泣き幾度か汽笛の悲しい音を聞いても逢ふべきときは來なかつた。

佇み待ちあぐんだ後やるせない心に月影あびてトボ〳〵歸らうとする

自分の姿が心に哀れなさせない者の様に思へた。

淋しいながらも美しい月、あの夜の月私の眼に映じた夜の夜の様・何時までもあそこにあゝして居たかつたのでした、そぼ降る雨の日あなたに逢うてうれしかつた、その時の自分と鮮かな月夜に只一人歓楽の悲哀にあつたことを思つて居ります。

その後十日になる。

○門によりて

神戸 緑

強い言葉を残して…………………… 振り返りふり返つてゆく。黒目勝な大きな瞳とまつかな唇と……真蒼のあかるい天地のものに煩はしい極めて明るい顔、

一しきり未だ色づかぬ木々のひと葉一葉をざわめかして初秋の風は腹立たしげに四つ辻へパッと埃を舞ひ上げる。……と見返せば一線路の行きづまりに水色のパラソルと金茶色の帯とが浮いて、

「左様なら」 声がかすれて寂しかつた。言葉なき母様は肩に手をかけて抱へるやうに、私を抱いた秋に入りて蘇がへれり……と仰有つた方も想はれて。

○白飛白

埼玉 佳の華

忍びく日盛りに、捨て除して居た時代もの、羽二重の小紋を膝から辷らしたまゝ、うつとりと、庭の松葉牡丹に見入つて居た時、丁度鉄の扉から出て来た母子がある。九歳ノ手柄の赤い、それから……あの鋭い針で私の神経を刺すやうな泣声の主とであつた。

大切さうに抱へた見覚えのある桔梗色メリンスの風呂敷包みを解いて中から白がすりのメリンスを出した。明後日故郷の海の家に三年振りで帰省するに就いて、兄なる子に着せる晴着を私に縫つて頂きたいとて私は無意識に受取つて仕舞つた。涼しげな柄に心惹かれた訳でもなく、又柔かな手触りに快い感触を味はうとしたのでもない、たゞ、あさつてから二ケ月の長い間あの鋭い泣声に遠ざかり得る嬉しさに――。

私は早速取り散らした例の時代物を片付けて日の翳くなつた座敷に裁板を運んで、姉と並んで坐を占めた。些々たる努力に伴つて断らしく襟元に、じみ出た汗は、のどを傳うてぼたりぼたりときものゝ衿の内側に落ち込む。忍びく堪らなく忍い、此の暑さに何故まあ私は受取つて仕舞つたらう、へラの利がない、折りのつかないメリンスなんか、と思うと一寸手が出ない。

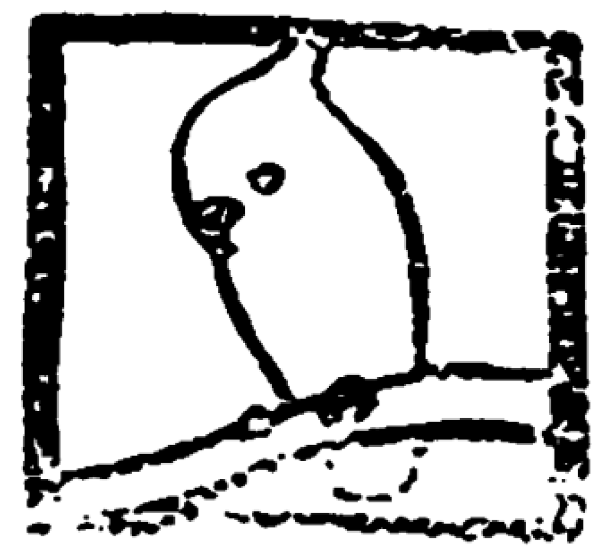
が、ぢきに又、彼を明日早く仕上げて了つて、他のしごとを出す程でも無いと云ふ中途半端な時間を利用して、ひとの分担である水撒きを引受けよう。乾き切つた地面はいくら撒いても、いくらまいても直ぐにスーツと吸ひ込んで仕舞ふ、又撒く、引く、根気よくそれを繰返して居るうちに可い加減草臥れる、さうしてお湯に入つて汗を流すとすがすがしい気分になる時の心持を連想しては些かもためらはずに、裁板の上に延べられた白飛白に向つてへラを執つた。

○疲れたる母に

松田玉子

寝ぬるに安らかな床と、食するに甘き飯と…………

不憫な物語りを聞いた時など、其港のうち深くつながれてある小船のやうに、しつかりと大きな母のかひなに抱かるゝ身の安らかさを、感じて居た、それは幼なき日、父なき子の不幸を、身に沁みて深くおぼえそめたや、年たけた頃は、あた・かなりし港内より、波よする海邊に進みし身の、我身にのみよせ来るらしき波に、おどろいて泣いてゐたが、一歩一歩展開されゆく大海の広さ、色々の事を人に書に學んで、様々の世態より、深境にたつ身は殊に多くの刺戟を感じた、遂に、世間はかうしたもの、と大海を見渡しきつたやうな老人じみた考へ――實際年にはませた考を持つやうになつた、うはべに未だうら若い世間見ずの處女のさまを装つて心の中は生意氣に、年たけた大人を、猶も三ツ兒の心をよむといふやうな態度で、眺めて居ることがある。かうした今、ふつと見違る我母の、みすぼらしさ、たよりなさ。私は悲しくなつた、餘りに多くの缺點を母に見出した、ことに子に對する母の柔らかの心を見抜いた私は、六人もの兄弟が一人としてものにならなかつた深いため息に、今更の如くがつかりして、双鬢とみに白髪を増した母のすがたを、何とも云はずに手を退いて眺めるばかり、胸にたき入つて泣く事は出來なくなつた。



七擒八縱

張　三

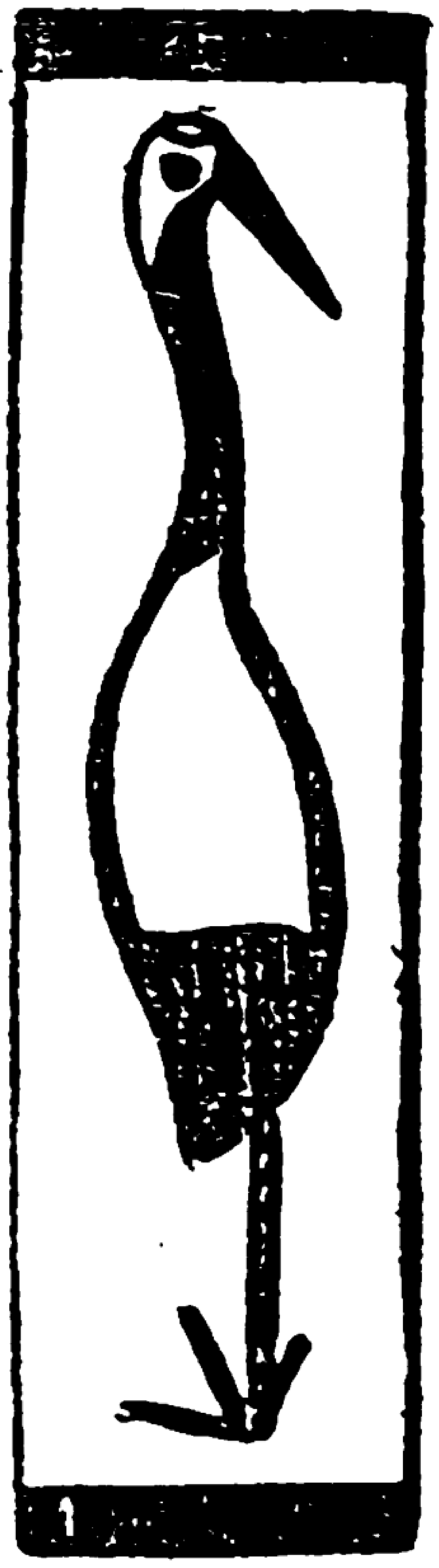
△七擒八縱をシツテンバツトウと讀んだ人があると聞いた、この樣子だと、張三といふ名もハルザウだらう位で濟ますに違ひない。むたびとらへて八度はなつ殺活自在の意味でつけた題である。むかしは一休和尙の書いた殺人劍活人劍の六字を、殺の字が有つてはよめないし且緣起が惡いと殺の字を削つて（即人の劍は人を活かす劍となにして）あつたら名幅をダイナシにした話がある、投書家諸君は創作に苦しみ私共は選評に苦しむからといふので七顚八倒と讀んだとすればヘウキンな方ですけれどまあ心細からずに、見ていから。病勢險惡にすゝまぬかぎり次號には夜雨氏の「最後の一響」が出ます。△さやく／＼と衣ずれの如き音して、あゝつ、姉さん！耳ん中ア蟹ォ妹の聲は奔走つた、異稿をちぎりし如きかる萱の花一面にふはり／＼と（德島行雲）かしの萱の花が飛んで來で耳に入つたのらしい、われ／＼都會人には想像も出來ぬ、と書く／＼と傍からちや花世さんに聞くさといふ、マダムぶりゆゝしき君もげに／＼阿波の人なり△眞紅の小波（三保の人）兄さんを思つたのか弟さんを戀したのかわかりませぬ、美しき手を持てる人也△叔父（岡山の桃の村女）この君も手は美し△其夜（戸塚ゑん子）おらアはアと話すが女か男かわからぬ△この心（しうん子）一羽流れるやうに飛んで來て又すうと流れる樣に急いで行く△男はとをどりした父は急に男の手を握つたどうだい矢張同じかい（淡路花子）眼鏡をかけたい～若衆でありながらメソ／＼と泣いてる男△兄さまに（岡山明……とはよめるけれど、其したのが夕のやうでもあり月とも見える、あんまり名筆すぎます△日記（石川秋雨）激越△妹は逝きぬ（府下笹本タミ）やはらかな筆づかひが美しき人格の人を想像させる、妹を棺へ入れる時はたに誰もおぬやうなのがをかしい△短刀（播磨落葉子）詩から來た人だけにヒント確につかまへ得たけれど散文にはもつと落ちついてほしい△宿にて（備前S）本氣で言つたのか戯氣でいつたのか△頭ちやんはお一人子、大きうなつたら與八人とよくからかつた久作は死んだ、蝉を捕りたい、（音羽千代）蝉を捕るよりかお母さんを取らねばなりません△夢の一日（猪口古屋ちかよ）夢を見てふるさとの母をおもへるもの、あはれなり△影（羽前高山まち）筆の「行きつまりて」を模したらしい土藏の中で鈴蟲の聲を聞いて死をおもふとある△白日（米子笠木白菊）一たい私達の逃場はどこなんだらう△さこたる影（山形ほゝづき）拙。……一本お面をまゐります、拙と一字ですましては粒木さんびいきの法師にもすまないのだが△鐘の音（大分みね子）前の「月光」と同じ技巧なれど、この人のこの作はかねての名の上に多少の重みを添ふるものである「行きつまりて」はどこがいゝのか解らないと言つた人がある、それは夜雨氏に聞くことだが、私達のいゝと思ふ物を人も皆いゝとばかりは言はぬは致方がない。一二度當選したのを鼻にかけて修養を怠りつゝある大家の君達をあはれに思ふばかりである。この君の向ふと書いた所は感心だが、寂しゆう、閉ぢ追ふて、など矢張ちがつてゐる。△によりて（神戸蝶髮子）緊張した文△街（金澤中野お京）神秘の光をた門よる門付は一昨日も昨日も來た、店のこも被りばかりが大きく匂ふわいな藝者たやらあねこたやらわからぬ人の書いたもの。匂ふわいなには驚く△經るべき者あらば（秋田さぎ草）神に對ひて誓ひを立てんと思ふ時まづ己の心に問へ、淸涙汝の胸を洗はん△吃（今市三吉よしみ）お姓が三吉でお名がよしみです、棕梠繩を買に來た男をからかつた記△田舍（土佐佐藤おしか）郵便局へ一里有るつて聞いてるけれどわが夜雨君の如きは三里もあつて、おまけに一日一回の配達である、今年も氷水を見はぐつたと言つて來た、アイスクリームの製法を親切なお嬢さんが敎へてやつたけれど可哀さうに其氷が三里歩かなければ買へないのだ、尤も冬は有るさうだ△八年ぶり（加古うすみどり）八年ぶりで上坂して見る物每におどろいてゐる、いづれ膽を道頓堀へおとすでせう△月の夜、蚊にくはれるのも知らないで彩さんを思つた、二人は別れるまで戀をさゝやく折がなかつた、岡山山本ふで△生きた花、中川さんのおたきさんが馬に横のりにのせられてチヤラン／＼と通る、嫁に行くのだ、長野市吉おやす行久麥二の繪にこんなのがあつた、上に栗毛の駒に鞍おいてと題して

あつた、「花守」から取つたのだ。△待間(大森根岸そめ)一人でさした傘ならば片そでぬれよう筈がない、この君の――平塚さんの評る所によればお十八位な美しき方であるといふ、八疊の間を四方簾でかこふてお琴を遊ばす時、簾をへだてた荒くれ男の唄を聞いてやさしい心にどんな衝動を受けたらう。沖を漕いで通るは漁ざがもと舟がさて櫓ではやらいで唄でやる、早く磯の池の米踏みしまひ播磨灘をば唄でやろ、詩は無瑕巖也、探れどもつきず、うたへども際りなし、△姉(瀧谷光子)二十三年薄命の姉をかなしむ△夜雨樣に(茨城西の女)原作中上たうムいますけれどと題すべき樺に長い名だつた、文中夜雨の名は一つも無いが事實夜雨君に宛てた文だから勝手に先生のお名を拜借した譯んでお詫します、何の事かわからぬタアイの無い文章もはじめて見られる也△初秋の野にて(京花子)お千代さんといふ女が花子さんに戀人が出來たと聞いて、絶交をする氣が知れぬ、お花さんは又お花さんで、あゝ私一人ぼつちよと泣いてるがあなたはＩさんがあるぢやありませんか△泣蟲(福州内山小久子)天涯孤身、親に離れて唯一人と賴める御主人に叱られては泣くのが御尤です、私どもは新婚十九年、未だかつて泣したこともなければ、泣かされたこともありません△勞れたる母に(金澤松田玉)新人と舊人との心のくひちがひを嘆く、いら〳〵した心持がよく出てゐる△求め得ぬ心(岡山筑紫原綻穎野)山羊を野に放つて番をしてると、お讀誦り後から鐘笛が聞えて來る、笛の主は准教員といふだけに氣の毒な氣がする、まつたく山羊を飼ていらすのですか、姓名からしてふまじめだから何とも評へません△秋雨(深川矢澤燊子)度々おてんばさんの文を書いて叱られたせいか、生れかはつたやうになつたしかし……△父へ(伯耆文子)おさは伯母に連れられて唯一度まことの父をたづねた事がある、それから十幾年父を見たとは母にも言はぬ今の父にも言はぬ小說でせう△雨のたえま(水口はたる草)細野すゞらんと、何とかいふ山へ登つて何とかいふ小川へ下りた、あとは忘れた△Ｓへ(特名)特名といふのもをかしな名だが、Ｓ樣私は今うれしくて一行になつてる、二十四字詰ひ半分にも足りぬ△かんざし(大阪町下冬)あまりローマンスでもなさゝうだが、きりきりしたいかにも銀の平打が似合さうなおもかげが偲ばれる、醉若の手元に繪葉書になつたこの君の寫眞はあるのだが△しやくり書き(備中英子)急がしい〳〵と足下から鳥を追立てる人が、船車で二十四本の線を引いて二十四の字を詰める癖のあるのが感心です△磨中、夜炎の燈に立つて夏宮の祭を見たのは嚴島宮垣はつ代の君どうして見えたのかもからぬ△黑暗の中にて(伊賀行々子)棄てられた母を戀ふるのか、二度目の母を迎へた夜を恐ふのか、あまり大きな材なので、振廻し切れずヘタンコと坐つて了つたかたちです△日記(備前おてんば)許嫁の君に死なれて大いに悲觀してたに、もうおてんば日記を出ずやうになつた、嗚呼去るものは日々に疎し、先生の登場人を歎かんや△いてふの孔(若狹里子)久しぶりで杉若さんの文に接した、も少しで結婚除料のうき目にあふのでした。うき目は憂目にあらず、うれしき目のれしが脫けたのです△いら〳〵(熊本閑花)ちら〳〵とちら〳〵と微風にやさしく身を投げかけて花がちる、靑春の怨をやう〳〵に覺えそめた十六の上げたばかりのわが髮に、と讀んで來て、私は起つてカーテンを引いた、あゝ才ある人よ、廣江嶋子さんが戀しい。どうしたら文章が書けやうか△汽車にて(茨城田村紫色女)蜜月の旅せる新夫婦を、大衆中に呑氣だなどゝ仰有つて、御當人二等室へ乘てるのだから面白い、花嫁はデブ〳〵と太つた丈の低い髮の縮れた顏の丸いナツトビユーテーであると、さりとは罪もないのに花嫁こそ災難なれ△弟に(三次高橋しぶき)やさしい姉さん△青顏(筑前長澤美也)青い顏の女を見ると、結婚が迫つてるんぢやないかと思ふことは奇拔なり、夜雨君がよろこびさうな文句だ△幼き友(小石川草苺)それ者の子だつた友が紅燈緑酒の裡に沒して終にきぬあきうど、かけ落しした筋書といふよりももつと略した書きかたで、これでは同情がされない、ひとり此れにのみ言ふのではないが、兎角文章はしまひまで書かずに暗示をあたへておけばいゝのに△見送(伯耆田村よし)箭を落したことを、道具屋の上さんのことが主になつてかんじんの見送りは二三行ですんでゐる、これでも困る△嵩子(相川秋香)兄妹同じ寺に貰はれて來て、後兄の他の寺に住むことゝなれるを悲しむ、深いにも淺いにも事情は無いらしい、やがて乾く涙ならずや、いかに△見えがくれ(大阪緑萩)雷雨中行きなやめる少女を見つけたのはよいが、又一頻又一頻と何が一ピンしたのかわからぬ、一しきりの降りだらうか、頻はしきりにとは訓むお仕切りとはよまないでせう△浮草だより(東京のん子)住所も無し姓名も無し、

ままかのん子といふお名ばはあるまい、藝者さんのよし△夜半落城の昔を忍ぶ(美濃糾鉄子)寂しゆうと悲しゆうて、もう／＼泣かずには涙拭はずにはをられぬ。何故かといへば百草にすだく蟲のねを聞いたからと答へる△まつ宵草(福岡小岩井なみ)夕に咲いて夕に萎む月見草、わが子は死んだのである、宵々に暗き墓をぬけ出て寂しき花と咲くいとし子の魂よ、わたしい寂しい！△尼(千住白妙女)若きはたちの尼を悲む、やさしくしをらしき君哉、この君のたど／＼しき文字は多くは活字に組まれねど、われ等は早くより其人と為りを愛してゐた、たゞ願ふ長くやさしき女たれ△七夕(岡山中西りか)岡山縣の投稿家は長野縣と東所相呼應して盛んに書いて來る、中西さんは其中で優逸な地位に立つ方である△或夜(東京魚生貝)ともする程にといふがあり、二十五分たつて月が出たといふがあり、あひびきの機を失した戀人に贈れる書△遺傳の秋(京すゞお子)精神病に罹れる弟の爲に兄妹の苦しめるを寫す、孤兒となりてより三年とあるから、三宅さんのいたましき涙は長いものである、一ときさに婚期を過さうとするのを思うて薄命なる人の子の爲めに泣かれる△時雨の日(浪速西山冤)お杉といふ女がろくでなしの男に添うて苦しめる事を書いてある同情文學の一△綠の中に(札幌ゆかり)珍らしく張切つた聲のねを聴くやうである、「行きつまりて」に倣へる文の一△電車にて(小石川田村よね)さかしき都會の少女姿がおもはれる、心にしみるを泌る、廻りをまはりと書いてある、沁と泌のかいため位は御存じでせう△聲はナア仲のりさん聲はすれどもナンチヤラホイ姿は見えぬコイヨイ、私や野にさくたんぽゝの花人にふまれてあとにさく(木曾月見草)△行秋(山形無花果)同じくば秋の大野に宿しめてと高師出身の師から上の句を出されて月と蟲とに我世經なゝんとつけたのが校友會雑誌に出た、自分の寂しい思ひはその時から湧いたとあるが、梢にでも落ちたのか知らん、蟲のねも紅葉の色も時のまのものと思へばつれなかりけり、とよんだのがほめられたなども田舎だけに面白し△或夜(山口鳳原美女)肋膜から肺になつたらしいので無暗に涙がこぼれる逢ふ人毎におやせになつたと言ふがお前は今に死ぬぞと嘲るやうに聞えるはかない△森ケ崎にて(芝石井まこと)瀕死者を視ること雲煙の眼を過るが如し、見ず知らずならそれが當り前だらう△白がすり(埼玉桂の花)おとなりてキー／＼泣く子が海岸へ行くときは暑い中を進んで着物を縫つてやつた、あしたからあの泣き聲を聞かぬだけもうれしい△星あひの夜(若松りき)七夕でも過れば豆名月でも過る、かういふ風に融通の利く「夜」を書いてはいけません、私の心は空つぼだなんてすねずと、長恨歌でもよんでごらんなさい、あなたも身にしむの沁むを分泌の泌と間違つてますね、心と必はやつぱりこゝろとかならずですよ。

散文欄の合併

散文欄を自然と人事の二つに分けたのは、本年の初めからのことですが、又來年からは二つを併せて別に普通の『小品文』と云ふ欄にします即ち今一回十二月號で自然と人事が發表されると終りになります、記者は散文の内容から見て斯く二つに分けたゞけのことで、更に形式の上で小品文と云ふ一つの欄に併せたからとて諸賢の投稿なさる心持には何の變りもない筈です。それはそれとしてふりかへつて自然と人事に分けた本年の結果を見ますに、自然人事のどちらにも出して居た人もあれば、一方だけに手を伸した人もあります、人事にだつてもだいぶ新しい顔が現れてきました、九州の人や東北の人や、盛んに新顔があります、是等も小文品となつても盛んに活動する人だらうと思ひます、自然の方では毎も投稿の數も少く、また純自然を描寫した文章も少かつたのです、其中で獨り目に立つたのは百瀬美水さんでした、此君は徹頭徹尾自然描寫でおし通して來たゞけに振つて居ました、廣江さんは單に自然と云ふより博い目で見た自然、乃ち人事も籠めた自然の作家だらうと思ひます、此人の將來は見込があります、其の外に鈴蘭、竹村楓など女性らしい自然の讃美者でした、なほ五六の熱心な人もありましたが、惜しいかな手腕が自然描寫には餘りに淺く、小さく、狭かつたのです、自然を描くのは女性には聊か無理な註文であつたかも知れませんが、今後の女流作家は其素養も大いに必要なんです。人事は無論女に書けなくてはならぬ理由もありますが、自然は然うも行きますまい、一つに其天分と、技能に俟たねばなりません、此處に自然の欄は本號限り廢されても、諸賢が自然をたのしむ心と、味ふ心とを持たれんことを祈つて擱きます。(自然の選者)



和歌

編輯局選

○（天賞）　加賀　さかの子

世の始別れし人を世の末にあひ見んことをまつあぢきなさ

○（地賞）　鹿兒島　山下登代子

この夕遠くより來し心にて停車場出でし群衆に交りぬ

○（人賞）　名古屋　波の花

とつおいつ思ひあまりて三日月に打ちあかしたるはづかしの夜よ

佳作

○　稻子

なりはひに稍なれそめて安けれど寂しき二人となりにけるかな

○　足利町　飯塚米子

上つ毛は溫泉と異清水とわき出るよき里なれば君の生れし

○　山口縣　椰良美那子

たはむれと笑へと君がたまゆらの畔思へば淺ましき哉

○　陸前　小岩りう子

こゝろざま惡しきが故にかばかりに悶ゆるならむ淺ましきかな

○　京都　君子

あゝ永劫に永劫にと云ひて接吻けし人の唇裂きてやらまし

○　大阪　町下冬子

短針の折れし時計のあさましさやぶれしあとの戀をみる如

○　豐後　吉田夕草子

淋しかりし二階廊下を忘れ得ずかの瞬間のあつき血しほぞ

○　備前　我澤竹子

捨てられし人を偲びてやまぬ我れ蔑げ果てたるこの心かな

○　京都市　白き莎子

歌ふ日は短かゝりけり鈴蟲の新らしき籠よろこびし日も

○　大連市　筑紫饒子

果知らず我思ふ事と蓄音器汝が云ふ事とはなれ行くかな

○　近江　鈴蘭

波頭いさゝか見せてすさり行く二見ヶ浦の夕暮の汐

○　岐阜縣　佐藤史子

すれちがふ人ことごとくうつくしう目に見ゆる夜はわれにさびしき

○　山城　木の花

小さくなり數おほくなり白と赤とあさ顏しぼむ秋のまひる日

○　大阪市　小泉貞子

ふんことば聞くことさへも倦みぬてふこのたはれ女に日毎文給ぶ

○　仙臺　橋本秋章

朝早くつみ來し百合も妹もしとゞに野邊のつゆにぬれつゝ

○　京都　壽賀子

若き故戀するものをあげつろう世の人々のうとましきかな

○　小石川　千代子

櫻さく島に生れて美しうそだてられたるよき少女かな

○　伊賀　山中靜子

今日もまた母あざむきてうす暗き森に行くなり罪深き子は

○　大和　露章

秋の夜は宇治の川ぎりふしわけて月の光を流してぞ見る

○　相模　渚の女

逃れ來し山ふところの晩夏は葛むらさきに咲き殘る日よ

○　ハリマ　藤井光澤子

思ひあまり泪ぐまるゝ夕ぐれは水引ぐさをもてあそぶかな

○　三次町　深川幽美

コスモスは君に摘まれぬ君は地にたゞわけもなく落したまひぬ

○　大分　みね子

ぞろ〳〵と男ほしげに夜歩きする女の後の影に唾しぬ

○　下關市　西村文子

月のごと清く日の如あたゝかき君にそむきて暗に入りにき

○靜岡縣　宮下美代子

何故か君に向へば我心白羽二重の衣の如かり

○宮城　齋藤靜子

菊の花たふれやるなと結び付けし白紙の香のなつかしきかな

○千葉　伊東久子

雛げしの花にひそめて愛しみん君の給ひし美しき夢

○京都市　芳子

わがこゝろ君がみすがた見し日よりこの世かなしと思ひそめぬる

○城南の里　鈴枝

君といふ冷えし器はわが熱き血汐を盛るにものたりぬかな

○鳥取縣　露英子

うら若き女の抱く胸に似て開きやすかり夕顔の花

○信濃　長谷川赤女子

此魂よ常闇みの底ゆくとしつ尚天地にたちまとふかな

○岐阜縣　佐藤夕月

はつ秋の夜風は寒く身を吹きぬ人は語らずてはろぎを聞く

○岐阜縣　齋藤鋼子



かの樹より　伏見夢見草

海底に鐘をしづめし龍などの際にはあらずこの一念は

○姫路　靜子

蟲の音をたどりつ行けば山深く茂みのつゆに濡れぬらしけり

○東京　石井まこと

走りつきとめむとすれど走り得ぬ夢にも君はつれなき人よ

○相模　白香

蟲の音の草葉にしげき此の夕はかなき愛に泣く人や誰

○大阪市　大岡さとの

打ちつけてかくとばかりのその問を淋しきことゝ君はのたまふ

○澁谷の里　鈴木光子

何事の足らぬ心ぞものの見れどものに淋しき此頃の秋

○福岡市　小岩井奈美子

吾が魂は待宵草のそれのごと君に逢ふべき夜によみがへる

○堺市　高橋留子

黄昏に月の出づるを見てをれば悲しき聲に蟲なきいでぬ

○北國　冴夕子

肌一重浴衣の白のまづしげに寂しき日なる朝顔咲きて

○備中　小野美登利

駒下駄と雪駄の音ともつれつゝさまよひ出でし大河のほとり
　　水戸市　川崎春子

○

自らもまことの戀とおもはえで只悩ましく暮るゝこのごろ
　　秋田縣　佐藤節子

○

草も木も生きとし生けるもの皆は伏せるまひるよ夏くるはしき
　　廣島縣　宮垣はつ代

○

夕暮れて蟲の聲のみいやまして只淋しげに月は出でけり
　　石川　わすれなぐさ

○

君が窓野ばらの花はゆらぐてふ秋となる日はまだ淺うして
　　周防　若菜

○

この窓に君見ぬ幾日つゞくゆゑ頰は痩せにけり青ざめにけり
　　淡路　國分きよ子

○

若き身のうつろの戀に泣きくづれ小窓によれば芙蓉みだるゝ
　　備中　大西松月

○

我むかくてあれかし朝風に帆もはためかずゆく船のごと
　　越後　かたばみ

○

思ふことわりなく淋しこの夕嫁ぎし人の名を聞きしより
　　山梨　吉田くにえ

○

山といふ山に圍まれある如き國に生れて都戀ふるも
　　大阪市　正木しげ子

○

しのび啼く草園の蟲をきゝながら月の出を待つおばしまの人
　　信濃　酒井治子

○

山人よ山はさびしき秋ならむすゝきを分けて駒をひくかや
　　神戸市　落葉子

○

なやみ多き日頃の我も黒髪をとくひまばかり物を思はず
　　兵庫縣　森谷靜

○

たはむれに戀をやしけん京の人今年は風の便りだになき
　　久留米市外　渓花子

○

灯ともらずしゞまのなかに相語るふたりの顔を照らす稲妻
　　深川　曉子

○

美しき低語のひとゝ語らひて立ち別れけり夕ぐれの街
　　羽後　さゞ草

○

口かけし古き代の孤寂にして白髮の人端坐するかな
　　岐阜縣　わか草

○

コスモスの影にかくれて君とわれ月をあふぎて言葉なきかな
　　府下　笹本多美子

○

いかなればかくも君のみ夢むらむわがうとましさ人には告げねど
　　淡路島　小夜ちどり

○

君ねらふ弓の弦鏑の鳴る音もむなしくそれぬ戀の矢文は
　　新潟縣　新田よしみ

○

さまよひて砂におちたる紅のリボンの主を思ひ見るかな
　　靜岡縣　翠花

○

うらなひもしてみたきばかりあてもなく人待つ宵のつゞく苦しさ
　　加賀　哲

○

惜春の野に他事なき天つ女がうすものにふれ散る花とおもふ
　　舞鶴　郁子

○

杣人の斧の響もたえはてゝまき負ふみちや夕月の出る
　　栃木　N子

○

夕暗に眞白き顔の浮び出ぬ淋しき町のとある角にて
　　湘南　紫苑

○

秋の夜をひとりぼつぼつ歸る路に尾花が衣に露ぞをりける
　　尾張　水谷靜枝子

○

歩みゆく道は深山か谷底か薄ら光りも我に添はざり
　　博多　山村雪花

○

何故か黙して伏せる少女子の白きかひなは濕ひてあり
　　姫路市　九十子

○

うたかたのゆらぎのごとくつゝましくはたかろらかのよろこびの歌
　　大阪市　木下久江

○

月仰ぎ我れ故郷を忍びぬるさびしき夜半にこほろぎの啼く
　　伯耆　新田文子

○

白ばらの花の園にて新星のひとみ戀ひつゝ君思ふかな
　　石川　土田夕女子

○

やすらかに暁よりさめてなつかしき夢も得ざりしものたらぬ朝
日本橋　仙子
○
こほろぎのなく音やう〳〵細りきてまがきの菊に霜の花見ゆ
長野縣　由比麗砂子
○
追憶にすがりてひとり病むわれの若き日ながに夢の花ちる
京都　小芹
○
若草の春にもえ出でし恋なればこの秋雨に冷ゆるもうべか
廣島縣　あし歌
○
秋草の蔭れる中に夢のごと淋しく泣けるこほろぎの聲
奈良　清子
○
強きキスの忘られざるに君は今遠く行くかも歸らぬ路を
越後　芹田紫紅子
○
海を見ていと悲しげに犬なきぬ濱邊の宵のうすらあかりに
若狭　城子
○
初秋の野路の狭路にうすれゆく白リンネルのなつかしいかげ
信濃　峰の嵐
○
君と座す森の静けさ高鳴りす胸の鼓動に小鳥しばなく
大阪市　河盛よしの
○
うす恋きはゝゑみなりき如何にして相見る事をねがひたりしや
筑後　栗田百枝
○
日は去りぬ君を見し日も別れにし日もまた逝きぬ春深み行く
陸前　梓草子
○
暗示なること思はれて忍はれてなげき暮しぬ今朝方のゆめ
美作　西山登美子
○
淋しさにうつしゑとりてながむればいつとてきみをあくときはなし
長野縣　麻田千代子
○
言葉なくはらから三人東なる空をおろがみ涙しまつる
常陸　田村紫色
○
秋雨に暮るゝ夕べの夜の面にしぼむ芙蓉のあはれ氣に見ゆ
福岡　川島和子
○
昨日きし十になる子の子をおひて子守の歌をうたふ黄昏
○
伊賀　福田照美子

只せちに恋といふ名に憬れて處女の誇り捨てにしぞ悪き
若狭　長谷川笑
○
コスモスの六尺ゆたに亂れ咲く家に嫁かんとたはれ言いふ
福岡　筑紫星夜子
○
女郎花そで振りて散るはら〳〵と黄なるはかなき袖ふりて散る
富山　とし子
○
きく人の心こゝろによるならむさはれ一人の秋は悲しや
若州　元山ふく子
○
給はりし君の御文のつれなさに我が袖くちぬあつき涙に
府下　高木多香子
○
思ひ出の悲しさあまりて涙しぬ縁の柱に身をばもたせて
岡山市　富山千登勢
○
悩みつゝもつかれながらも安らけし君てふものを手力に生く
山口　千香
○
ふと見てし其の瞬間のおもかげや夢かと肌をさして見しかな
麹町　牧野銀杏
○
ほの白く諒闇の夜の灯ともれる大内山に秋の風ふく
京都府　竹村楓子
○
ほそ〴〵に秋雨降る日無花果の果の熟れてあり病院の庭
横須賀　美緒子
○
草踏めばわが爪さきに喰ひ入りてのぼらんとするその秋かなし
紀伊　ますみ
○
ともすればまぶしき部屋をのがれきて蟲鳴くやみに吸はれ行くかな
山口縣　田中鶴枝
○
みづ色の少女の襟と燃さめしわれの瞳とたそがれてゆく
若狭　上田美樹子
○
ありし日の君を見しよりいやましに文函に秘むる文のほごかな
播磨　稲岡みつゑ
○
微かにも日ざす光はかき消えて我行く先は暗くさびしき
○
茨城縣　浮舟

秋海棠に悲しき秋の音づれて幸多き子にも涙あたへね　栃木縣　里の花

○

小草など抜き與ふれば馬もまた甘へる如きそぶりの見ゆる　出雲　三吉よしみ

○

さらばともいはで其夜は別れにきされど二人ははなれでありけり　府下　野の百合

○

わりなくも涙ぞ落つる秋の夜は忍ぶになれし我にはあれど　神田　みつ子

○

なまめかしき京は女と花と水われも行かましはや舞踊らまし　京橋　扇花

○

コスモスの花白う浮く黄昏の門にそみわを待つかな　小石川　田村よね子

○

初秋の野に佇めば我が心悲しき戀に泪すといふ　神奈川　浮草

○

老いてゆく少女の胸にいとつよく物思ひすゞ秋の雨かな　札幌　俣野幽香里

○

許したまへ戀ならずてふ僞の證たつるは苦しきものを　和泉　ふ子

○

夜となれば月の光と蟲の音に包まれて我君と野を行く　岡山市　野菊

○

名もしらぬやさしき蟲の鳴きいでゝふるさとこひし物思ふ日よ　岡山縣　柴田銀洋

○

淋しさは逢ひて語るにしかざらむ逢はれざる日の續くこの頃　徳島縣　蔦紅

○

旅なりし十日といふに自らの未だ明るき心を知りぬ　群馬縣　えるい子

○

赤々とわれしざくろを黒絹に包まんとする悲しき心　金澤市　狄野宵

○

夕闇や瞬く星の銀かりき君を思ひて洩らす吐息よ　山形縣　無花果

○

我が心君がみ胸にふれてよりあやしう動く昨をぞしる

○

山脈のくづれて胸をおすごとききこの苦しさをたれに訴らむ　堺市　大澤けい

○

ものみなはこゑをひそめてさ　やき路孫武者おとせし其あとの如　吉備　小田美鳥

○

戀しさは秋にくるゝ故郷のなく蟲とこそ住みなれし家　北海道　小木白蓋

○

一人寝の寂しきまゝに起き出づる肉さびさよ人あらずして　神田　山田たづ子

○

うきふしを知らでや若き舞姫の誇顔して口に紅さす　久留米　岩井原たづ

○

大海や故郷戀ひし母戀ひし君を捨てんと思ふならねど　渡島　伏見屋康子

○

ふた月み月あはれむ月となりしかな君に文かく事も絶ちしより　福岡　喜美子

○

人々の泣くなと云はむそれならで泣けよと云へる君のこひしさ　大分縣　池見白菊

○

君を思ひ亡き妹思ひ今日も又コスモス垣に身をよせて泣く　水戸市　小松崎文子

○

かなしさは我おろかさを心得ず口ぎたなくも人をそしれる後　横濱市　世津

○

何となく物たらぬ秋破れ垣の内外もわかず夜ごと鳴く蟲　府下　白妙女

○

夕暗に笛吹きやめし我盛の疲れて紅き唇を照る　越前　井上美佐尾

○

稲妻の光のうちに現はるゝ萬象清き快よさかな　埼玉縣　地疋霜子

○

わが心委えぬつかれぬうみはてぬ三年ばかりの長き思ひに　麹町　齋藤つな子

○

恐れぬれば恐るゝがまゝに悄然と聖に沈む二人の女　下谷　百合花

○

山口縣　長尾市子

美しき紅葉林の中行けば顔も衣も紅に染む

○　米子驛　笠木白菊子

ゆき函とりて灯かげに髪梳る君が小指は白魚のごと

○　木村紫雲

たのしみの的となる可き或物をあざけりて見る時の淋しさ

○　秋田咲子

戀すればうつむき勝も恥しや額の髮のみだれてあれば

○　淺草みね

強くいひて別れし後をこほろぎのほろ〳〵となくあかつきの庭

○　下野　吉新あさ子

君と我戀するよりも紅の勝れり夕日紅葉に映えて

○　備中　吉備里子

鳥啼きぬ我はた泣きぬ秋の夜のかたぶく月の光の下に

○　上毛　境野松子

蛇多き深山といふに白百合の花の上なる白き胡蝶よ

○　横濱　直子

わがもてる二つの瞳かゞやけば綠の星と星は眺めん

○　福岡市　夜湖

柿などを君に與へてこの庭にまゝごとのとき妻なりしかな

○　福岡市　みさ・を女

高調のピアノの響き流れくる夜の街を一人淋しくゆきぬ

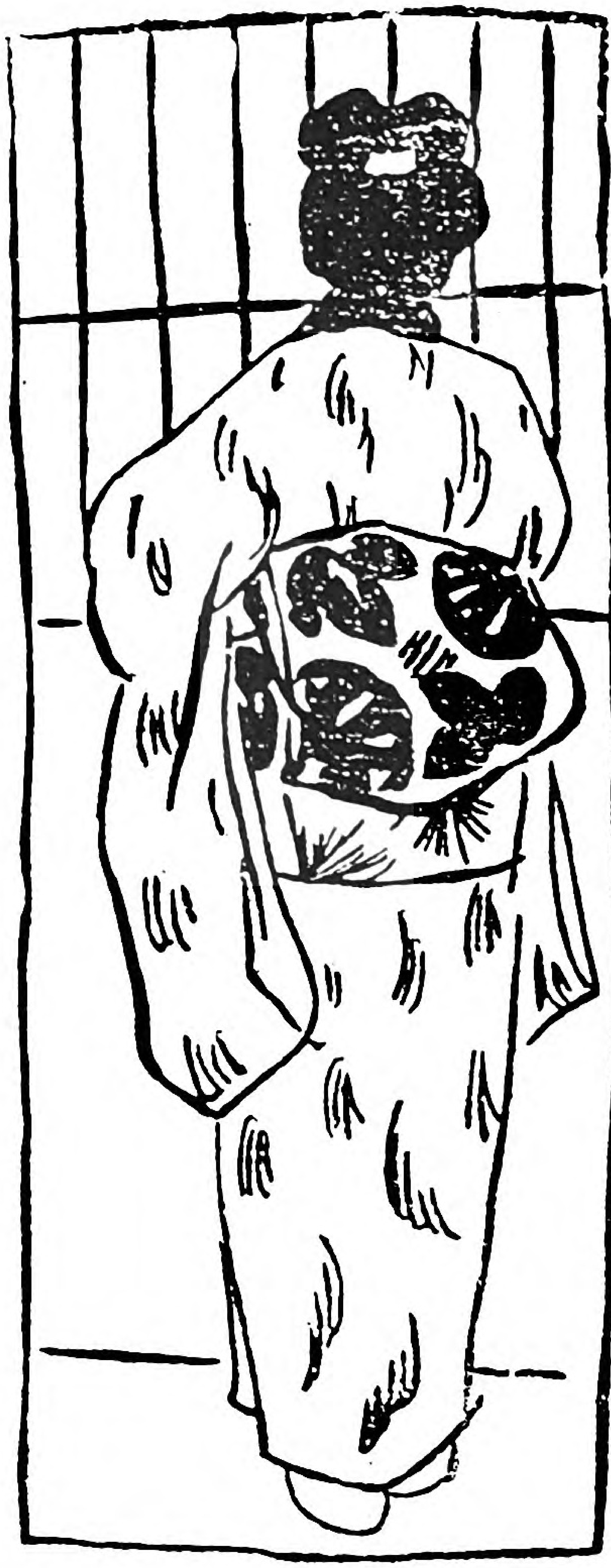
○　大阪　藤井ひさえ

しみ〴〵と儚き戀を語らひし森をよこぎるさびしき女

○　羽前　高山滿智子

ふとみれば枕の下のうすぬくみ二百十日の嵐の夢

○　近江　光子



うしろ姿　芝田島しま

柳ちる村の旅宿の行燈にしみ〴〵秋の淋しさを知る

○　福井縣　土屋智惠子

何の故君を戀して淋しくも涙さめ〴〵泣く日もありぬ

○　羽前　長澤美也子

誰やらの戀と戀とがさゝやきつ流るゝ如き森陰の川

○　長野縣　麻田いと子

一木たにゆるがす空も大地も大静の日の沈める色よ

○　周防　諸女

聞くたびに君まし〻時忍ばれてなく音悲しき時鳥かな

○　土佐　橋田紫葉

遠山の館は霧にかくれしを君が家も亦見えずなりゆく

○　三重縣　中村和子

何となく此うら淋しきこの思ひ戀もつ人は戀しといふかな

○　紀伊　紫陽花女

百人の人の恨はいとはじな一人の君が愛にわれ生く



自然（散文）　編輯局選

○神樂ケ丘の御祈り

京都　廣江曉子

仰げばたちならぶ老杉の梢に、曇り日の影はしげな日光がうすくさびしく漂ふ、岡の低地の小暗く濕つた朝、こつ／＼と石ころの多い息苦しい阪を登つて、無言の人々は一人づゝ鳥居をくゞる、かすかにおこる衣擦れの音、何時となく木蔭の露深き苔地も、白妙の砂の徑も人をもて埋められた。

恐れ多くも聖上の御惱御平癒を御祈りのため、今日此處に集ふ多くの人々は、大かた知り合ひの心安い同志計りなのに、互にかろく會釋し合ふばかり、一樣に眉にこもる憂愁の色は、谷間のやうな森かげをより一層重い深い沈默にしづめて、小鳥は何處へ往つたやら遠い森の深みから蟬の聲が、かすかにちゞぢゞと耳の底を擦るやうに聞えてくる。

千年の昔より空をおほふてそびえたつ老杉の下に、小さく低くたゝずむ社を拜して私は思はず、冷水を浴せられたやうに、ぶる／＼と身ぶるひした。

神官は今しづかに一歩／＼あゆみよつて、重々しゆら階を登る、群集の眼は一せいにその方へと注がれたやがて、ごと／＼、ごと／＼、と扉の鳴るゝひゞき、小暗き岡の森陰にかたく閉ぢられて、一年に祭典の時只一度より開かるゝ事なき扉の鍵に錆びてか、しばしは揺るゝばかり、やゝありておごそかに樹の幹をも、人々の胸をもふるはして、ぎいーつと扉は開かれた、我も人も思はず胸をひきしめられて息を凝らす、數々の供へ物あつて、やがておごそかに、神官の祈りの聲はおこつた、次第にふるひを帶びて迫り行く沈痛なその聲に、聲なき前よりも一層あたりは沈みきつた。

人々は、さつと風になびく草の穗のやうにうなだれて心に念ずる、地から生えたやうにたゝずむ男たち、女はいづれも跪いて。

やゝしばし、老杉の森は深き沈默の中に、神官のいのりの聲のみ、人々の群からはなれて、私は一人はるか後の大樹の幹を背にしてたゝずむだ。

熱い〳〵涙が頰をつたふ、何ともあらはし難い悲壯な感が胸一つぱい張りつめて、今にもぐら〳〵と倒れさうになつた。

肩に鳴る衣擦れの音して、眼を上げた時、人々は靜かに元の姿勢にかへつた思はずほつとしてしつかり太鼓によりかゝりながら、群集の間からわづかに、神官の青色の緋の袴を見た、ついで、純白の二人三人がちら〳〵と神前に見えたかと思ふと、靜かに群集の輪はとぢそふた。



日比谷にて　青山　中村弘子

一時に起る下駄の音、あらためて社前に願をたてまつる拍手の音が入りみだれて、今迄沼のやうに凝つて居た森の空氣はやう〳〵に搖らぎたつ。

男たちの拍手の音高く落ちついて再拜し去るのにひきかへて、女はなんとなう弱々しげにさびしい。

大方人の去りつくした頃、幾分か氣が落ちついたやうにおもつて、私に初めて心から宮に祈りを捧ぐる事ができた、滿ち／＼た潮のすうつとひき行くやうな安らぎを胸におぼへてたゝずむ時、雲が切れてか梢を洩れて社の屋根にさつと明るい一條の光が流れた。

砂路、苔路を緯に金色の縞なりて正午近い日光がさして來た、急に心がかろくなつて、きつと良くお成り遊ばす、から思ひながら、鳥居をくゞつて阪を降りかけた、岡なる宮は森の沈默の底に暗く切なく、人々の熱いまでゝろに封じられた。

樹の幹をめぐつて清々しい夏風が降りゆく袂を音せぬ樣に吹き過ぎる。（天賞）

明治四十五年七月二十七日神樂が阿須賀神社において　天皇陛下御惱御平癒祈願のためにまおりあひて。（曉子）
平素ほどの生氣はないが、沈着にしつかり書けてある。（評）

○新秋

近江　鈴蘭

何時の間にか、燕は旅立つて終つた。南國の明るい光を、したふて――。彼の可愛いらしい、張りのある啼き聲が、未だ私の耳に殘つて居て、ともするとピイピイつてなき乍ら、我が家の巣に歸つて來るやうな氣がする、あゝ、何の國あたりまで吾が愛する燕達は行つたらう?!、お名殘りに置いてつて呉れた、柔かさうな羽毛が、ふらりと巣から下がつて居る。そゝつかしい新秋の風が、軒端をくゞつて、巣の邊まで吹いて行つても、ちりもせず、ヒラ／＼とそよぐ計り、巣の口には、小ひさな蜘蛛がせつせと絲をかけてゐる、留守を見てんでの擅なる、ふるまひの憎らしさ。『噫、夏は徂きぬ』草葉に殘る冷たい露に、觸るゝ時得知れぬ詫びしさ、淋しさに、斯う嘆ずる若い人も多からう……。私も――。眞に夏の徂つてからの、萬象は、慘じめなものである。あの光澤やかな、ハート形した魯桑の葉も、漸やく疲れ、前のやうに旺盛な勢が無くなつた、桑畑に下りて餌をさがしてゐる鳥の羽毛も、朽葉色の雀の羽毛も、些とうすくなつてゐるやうだ、時々物思はしげに、首を傾むけて、大空を見上げる樣子が、云はう樣なく淋しく頼りない感じがする。空は此の五六日、降らず照らず只だ鈍よりと曇つて居て、時々あららかな風が吹く、貿易風の餘波なのか知ら?。風が吹く度に、細かな、そして美しい、紫蘇の花が、ホロホロと、もろくも黒い土の上に、蒔いたやうに落ちる、朝顔の蕾が日に／＼細つて行く、それは可笑しい程、

小さな花が咲く。金功蟲や蟋蟀が、草の中庭の隅で、物哀れに夜も晝も、啼き續ける、嗚呼、此の小さな蟲までも秋を知つてゐるのか。(地貧)

燕の歸つたあとを思ふのは味ひが深い、此君も自然には注意してゐる一人だが、今度の作は殊に好かつた。(評)

○初秋の頃

信濃　百瀬美水

うすく曇つた空を雀の一團が、ドーと音を立てゝ、散らばつたりかたまつたりしながらまつてゆく。しづしづと、大輪を描きながらとんびは山の方へ行く。入日の光が雲間から、わづかにキラ〳〵と洩れてゐる。

私は庭木の中の楓の下の石に腰をかけて、木々の葉の風にざわ〳〵と鳴る音を聞いてゐた。一陣の風が過ぎ去つてしまうと、靜かになる、とまたさあつときてさわ〳〵と音を立てる。翅の破れたからすあげはがさんしやうの葉うらへ卵を生んで行つた。散つた花の引懸てゐる南天の梢の蜘蛛の巣は、顫へてゐる。鳳仙花の實がはじけて、こぼれてゐる。仰いで上をみると、楓の上の枝に蜻蛉のやうな實がたくさんなつてゐる。高い梅の木の葉は、たえず小さくゆれてゐる、上の方には風があるのだらう。二葉三葉、黄ろくなつたのがあわたゞしく舞ひたつた雀に蹴落されて、ヒラリ〳〵と落ちてくる。梢を透かして東南の隅に紺青の空が見える。山には淡く霧がかゝつてゐる、波打つ稻田の上を面白さうに赤い蜻蛉が飛び廻つてゐる。

終日、濃霧に包まれてゐる西北の山を越えて、越後の方から吹いてくる夕風のさても涼しいこと、栗の梢は淋しくザー〳〵と鳴り、やゝ重くなつたいがゞ、ドサリ、と落ちる。樂しい栗拾ひが間近い……。

無邪氣な弟は、夕餐がすむと早々夕方ビールの空瓶へ泥ガスを取つておいたのを持ち出して、燃すと云つて騷ぐので、私は一所に外へ出た。弟がマッチをすつて瓶の口へあてると一所に、私は中へ水を注ぐ、と、瓶の口で青い火がノロ〳〵と燃える。暗い晩、木の下闇で、眞青い火が音もせず燃え立つ、そばの二人の顔は青く照らされて……。やがてガスは燃えつきて仕舞つた。表の道へ出てみると、稻田を越えてあちらこちらにあか〳〵と、近所の家の灯が見える。生垣の中で機織蟲が、スギーチッチヨンと鳴いてゐる。足もとでキヨロ〳〵キヨロ〳〵と、玉を轉ばすやうな美くしい聲で蟋蟀がなく。田甫の中のくるまやで、水車がカタ

ン〱と廻つてゐる。キユツ、キユツ、と何かのすれる音が交つて聞えてくる。遠い闇の彼方で、人の叫ぶやうに五位鷺か何かゞしきりに啼く。

小川の方へ靜に歩んで行くと、水際で名知らぬ蟲がやさしい聲で、ガ――とないてゐたが、そばへ行くと足音にハタと鳴き止んでしまつた。（入賞）

『上の方には風があるだらう』と云ふやうな不用意な間に出て來る好い句が、此作者の自然觀を新しくするのだ。（評）

○梅雨の頃の夜

羽前　貝砂

何頁か數へるほどのわづかの讀書に眠氣がさしてくると、輕い欠伸がしきりに催して、目には生温い涙がたまつてしやうがない。この頃のじめ〱とした梅雨の時候に病的な私の身體はどうかしてゐる故であらう

こんな時すぐ寢られたらどんなに心持よいことであらうけれど、これから明日織るほどの管を卷かねばならない。

ランプを持つて次の部屋にはひつてゆくと、ぐるりの壁や襖に動いた陰が片隅の管卷車の前にランプを置いて坐ると、すべての陰影もおちついた。

もう〱〱と泣きながら呟くやうな車の唸りに、口に銜へてゐた絲のはしは、つと軸に吸ひついて、見る〱大きく卷かれてゆく。卷かれた管はくづれぬやうに甘茶の葉を敷いた箱のなかに並べてゆく。暗くなつてから妹に庭の隅から摘むでこさせたのである。

葉肉の厚い柔軟な[illegible]の大葉は明いランプの光に水々しい光澤を帶びて、心持よく目に映つた。

去年の春、まだ植場にいつてゐた頃はよく夕方になど暇して、裏の野に雜草の葯など採りにいつた。或る夕など柳の茂つてゐる川のほとりで、薄暗くなるまで、話をしてきたこともあつた。あの時の夢のやうであつた暮れてゆく山の色、野の色などを思ひ出すと、ほのかになつかしい、管卷きあげて、小窓を開けてみると、戸外は眞暗、すぐ閉めてしまつて床に入つた。枕におちつくより目を瞑ると蛙の歌がきこえる。おい〱おいと、あらゆる蛙が聲はりあげて歌つてゐるかと思はれる諧調な聲が暗い天地にひゞいてゐる。じつと耳を傾けてゐると、一秒一分の絶え間もないので、呼吸がつまつてくるやうな氣がした。

拭いても、こすつても、嬉しくも悲しくも感じのない熱い涙は閉ぢた瞼を浸み出て溢れるまゝに寢入つた。

質素な農家生活が分る、文章は例の如くうまい。（評）

○蒼白い刺戟

長崎　三根知佐子

つと電光の樣に閃めいて、不意に眼を射た強き鋭どき蒼白の光線。

アツと忙はしくまたゝきながらつぶつた眼にも、凄き燐きの色は瞬間、薄明るうのぞまれて、光の中間に振り放されたかと覺ゆる、私は無意識にかたく兩袖を振り締めて居た。思ひがけもなく鋭どい光を投げ付けられた時。

横町に締めた暗い板戸の透間から、流れ出る薄赤い洋燈の灯の幾つかを、チラ〱と、往き擦りの瞬間に覗いて來た私の瞳は、黒う並んだ木柵にしばらく馴れた闇の名殘を沁み〲と味はひながら、寂寞な停車場構内の闇を點々と物なつかしう染めた軟かい、薄桃色の柱燈の火光にこころよい刺戟を與へられてゐたのであつた。

光に吸はれて、おど〱と立すくんで居る私の周圍を離れて、すうつと一刷毛薄い桔梗色の空を刷いた儘、どこにか蒼白い色をかくしたあの光線が、再び鋭どい力を以て襲ひ來はせぬかと、弱き瞳は怖れに顫へてゐた。

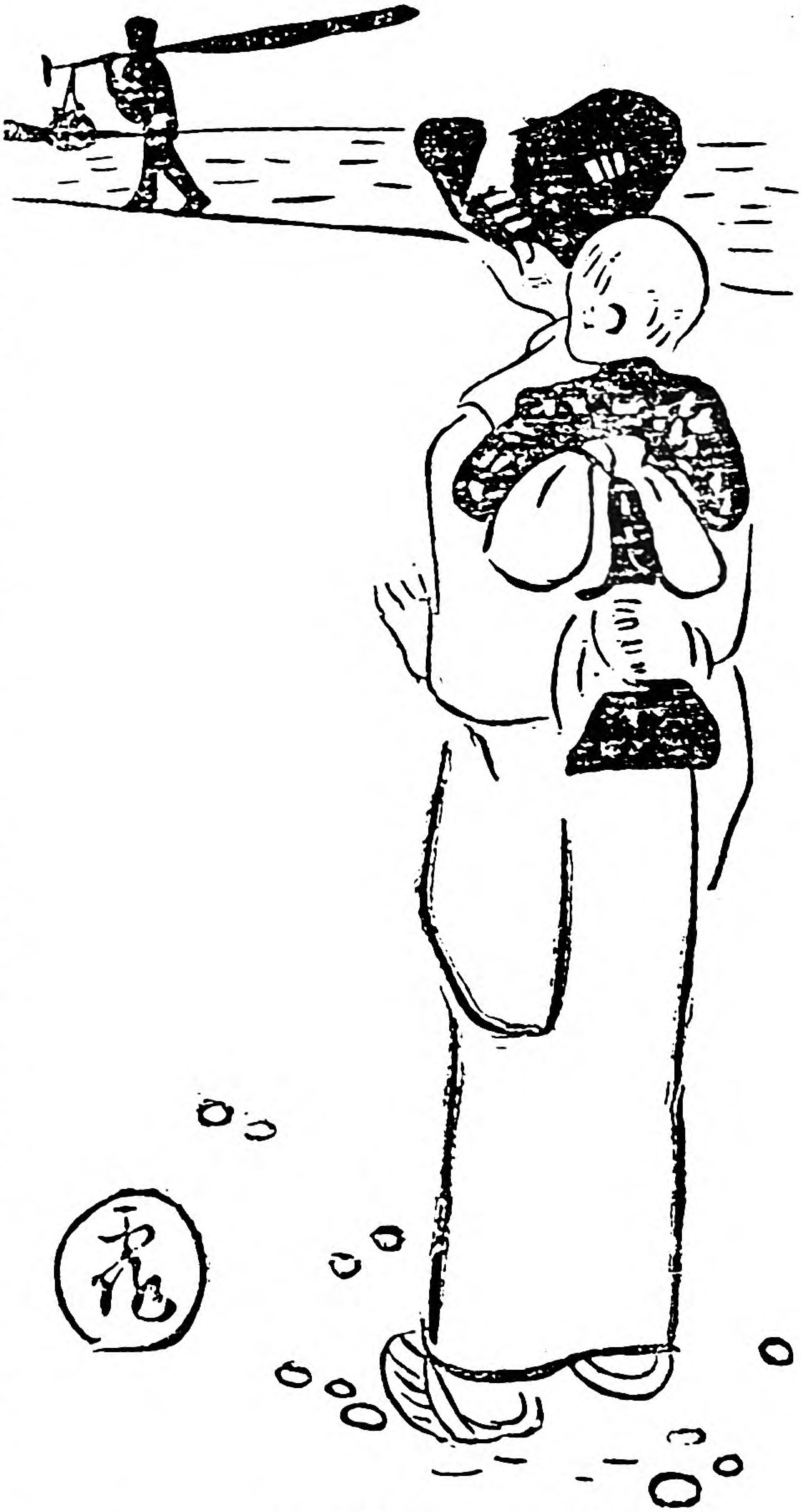
異童の動かぬ水面を黒い薄絹透して覗いた樣に滑らかな賑はひを包ん

ゝ暗紅色の夜の鏡底に聲うと凹へた道往く人の深刻な姿を、此の瞬間の垣間見より、永遠に逢ひ見ぬ面影の人々であらうと此の様なやはらかい印象を朧ろな物の影に刻まれて來た私の瞳には、餘りに、むごい刺戟であつたものを。

高熱な燭光に映ゆる水銀色の平らな鏡に、くつきり浮んだ女理髮師の純白な上着、きやしやな指先で、キラキラと動かす、銀色の金具にチカ／＼とまはゆい刺戟を受けぬでもなかつたけれど。

古井戸の底でもわーッと叫ぶ樣な聲が耳近く響いて來た。と再び走り來た光線がツヽと私の前をよこぎつて背後の山の側面を明らかに照した。

暗緑色の木立もまばらな山家も中腹から頂まで隙よく開かれた姫も一樣に権威ある光の前に赤い姿をあらはに投げ出させて微かに動めく物の影をも透すまじと凝視する鋭い光よ。



それは黒う沈默を守れる港の穏やかな水の上を幾日もなくて去り行くいふ新造××艦の甲板から閃めき出るサーチライトの光であつた。

強烈な日光に向いて、銀扇さつと開いた樣に細い玻璃の火口を扇形に流れ出た蒼白い光はくるり／＼絶え間なく向を變へて、山の中腹をつらぬいた時、波りの多い頂は徑に浮んで物靜かに揺られ、灰色の空をなむる時、星の瞬きは刹那に薄れて、靜かな海山を照した光の中間に錨を投げた船の帆柱が黒い線を描いて幾つとなく漂ふてゐた。

夕の海邊　和歌山市　露子

蒼白い光の中に白う色變へて、渦捲きながら默々と泳いで往く工場の煙あらゆる物に鋭い刺戟であつたらう。

凡ての秘密をうかゞはふと窓たらで見まもる探海燈の光線よ、力ある蒼白の神秘的の光ではないか、どの樣な胸持つ人の子が、其前に一刹那の暗き思ひを辿り、暗がるとおもふ行ひをなし得やう、私の頭は凄じい刺戟に疲れてゐた。

藝術の用意は窺はれるが、少しくどい、此出發點からつゞけるとえらいものになるが、間違ふと困つたものになる。（評）

○烏賊

鳥取市　婦美

命令されるがまゝに、水下駄をはいて庭に下りた。ちよつと臺所を覗いて、今八百屋のもつてたところのバケツに入れてあつた三尾の烏賊を持つて、井戸端に行く。

ポトンと釣瓶を下し、すう〳〵と水を汲み上げて、バケツに入れるとどうだらう、よく澄んでゐた水は早や汚く濁つてしまつた。

『まあ、ずゐぶん古いぢやありませんか』と、顏を顰めながら臺所に居る祖母にかう云つた。『さあ、なか〳〵古いがな、よんべ捕つたんだからな……。無理において行くもんだから。』

仕方がない、夜から車に揺られて市場に持ち出され、それから又、八百屋の手に入つて籠に入れられ、強烈な夏の日に照りつけられて、こゝまでやつて來たのだから、漁夫に捕へられてからもはや、十五六時間も經過したらう。

烏賊の身體組織は、大分壞れかゝつて、骨が落ちてぐつたりとなつてゐる。腹部と足は、容易に取離された。墨袋が破れた爲に、濃な墨は白い滑かな身を汚しまはつてゐる。私は一々それを丁寧に落していつた何時か、水彩畫を書いた時、セピヤを含ませた筆を舐めて、その甘いのに驚いて、唾を吐き出したことが思ひ出された。

一通、荒洗をすますと、烏賊は別の器に移して、洗汁は、畑の植物にかけてやつた。すると、底に殘つてゐた烏賊の足が、一つ落ちたので手を延して拾ひ取ると、片手に持つて井戸端に足を向けたとたん、はつと思ふと、恐怖に襲はれてブル〳〵と身顫がした、氣がつくと烏賊は土の上にある。私はある探偵小說で讀んだ。ある冒險好の多年が偶然の事から惡者の家に泊まらなければならなくなつた。しかも人殺をした室に寢るのだ。夜中ふと少年が眼を覺して、燈で四邊を見まはすと、白い細長いものがある。手に取つてよく眺めると、女の指なのだ。剛氣な少年も思はず蒼くなつて、それをなげすてたといふ話が念頭に上つたのだつた。滑かな細長い物が手に觸れた時、何を考へる暇もなしに、一時に恐怖に襲はれたのだ。

右の外、佳作と認めたるものは左の如し。（選者）

▲草むしり、岩代、光子▲すゞしろの蚊帳、久留米市外、岩井原たづ子▲長崎を去つて、長崎市、町田とし子▲野の家、伊豫、行々子▲暴風雨、播磨、龜岡みつゑ▲裏の山、紀伊、ますみ▲遠き國よ、横須賀、美葩子▲野に立ちて、姫路、九十子▲輕井澤にて、信濃、宮坂いね子▲雨乞、茨城、浮舟

準佳作と認めたるは左の諸作なり。

▲我庭の朝、近江、瑠璃香▲曇りの朝、加賀、中崎於京▲初秋の夜、案山子▲暮行く窓より、新潟縣、紅雨▲涼み臺にて、山口、千香▲あけ方、岡山市、富山千登勢▲山國にて、美作、うれひ▲暮行く野にて、茨城、田村はつ子▲湯殿、越後、芹田紫紅子▲畑邊に立ちて、筑後、柴田百枝▲夕の田舍町、土佐、あや子▲初秋、北國、泮夕子▲苗圃の朝、三重縣、藤堂蒼萬▲灯の追憶、埼玉、桂のはな▲月下舞鶴城下の逍遙、福岡、疋田德子▲夕燒、佐賀、花野しづく▲疏水畔にて、京都、蓉貫子▲朝の彷徨、鳥取、糸井衣子▲掛川八景、靜岡縣、良水▲生石山の朝、紀伊、紫陽花女▲暗い日、伯耆、田村美子▲七月夜の天王寺公園、大阪、小西愛子。▲森、長野市、吉村安子、▲白萩、肥前、すゞね。

誌友評論（一三）

一記者

▲四國（下）

◎長曾我部菊子と其生國を同じうし、其系統を同じうしてゐる松竝紫花は、其出發に於て菊子より一歩後れてゐる、若し菊子より一歩先んじたならば、紫花の文名は更に誌友に喧傳されたものであらう。

◎多くの若く花々しき誌友達には、紫花の文章の引立たぬため、其價値を認めぬものがあらう、紫花の文章は成る可く主觀を避けて、感じとか、思ひとかより或る事件を描すに適してゐる。之は多くの若き女性が好んで爲さゞる處、又爲し得ざる處であらう。

◎自然を自然のまゝに描くと云ふことも、進んだ人がやるのなら立派な事業で、藝術の極致であるかも知れぬが、小さな狹い輕い心でやつてゐると、之はまた恐ろしくつまらないことだ、寧ろ主觀的に、自分といふものを投げ出してかゝつた方が生命の聲としては貴いものが得られやう。

◎けれども、つまりは其人の持つて生れた能力で、紫花女に向つて、主觀的のものを書けと云つた處で無理な注文でもあり、餘計なことだ、矢張彼女は彼女として飽まで自家の立脚地に立てば宜い。

◎『鑛抗内探檢』（前號）のやうな記事は尤も彼女に適してゐるので、描寫も細かいし、觀察も面白い、只斯う云ふ人に希望する處は、其修養を怠らないことだ、兎に角地方に居ながら、中央都會に居る人と竝んでも恥かしくないだけの描寫を爲し得る努力を、むだに消耗させないことだ、わるくすると段々精力が失せて、描寫にも精神が籠らなくなると、全く彼女の生命が薄くなつて了ふ。

◎紫花は賢なる婦人であらう、群衆の眼から見れば、良い婦人でもあり、間違ひのない人間であらう、斯う云ふ人は、女として蹉跌がないから安全だ、ほんたうに自覺して居る女だ、他から動かされたり、誘はれたりする女でないから、彼女の生活は安全だ、安全に生きて安全を倫まぬやうに、或る一面の苦心、努力――乃ち作物に對する心がけをさへ能く守つて行くやうに

したら、吾人は外に言ふことはない。

◎土佐の人は同じ四國でも、阿波の方と餘程樣子が異つてゐる、全體の風土人情の上から見ても然うらしいが、二三の誌友の行動に見ても然うだ。

◎菊子や紫花を產したやうに、土佐にも槇田順子や梶原重子を產した、順子の方は多く本名で發表してゐるから明瞭だが、重子は匿名を用ゐるから一寸分らない今强ひて明かにする必要もないが詩に於ける村山咲子は重子の別名であつた。

◎詩にも個性はあるが、告白文に於て彼女の個性は能く表はれてゐた、利かぬ氣で、吾まゝで、理窟張で、且一方に烈しい感情がある。

◎兩人とも感情を抑へる性質ではない、感情のまゝにふるまはうとする、處が世の中はそれを許さぬ、ますますじれる、暗い氣分になる、放浪的になる、自棄になると云つたやうな處があつて、不知不識の間に彼女等は自らの感情を破壞したり、弄んだりして居る、所謂時代の犧牲に近い女性等で、彼女等は内に眼を開けてもらつたゞけに、飛んだ苦しい際に遭つた。

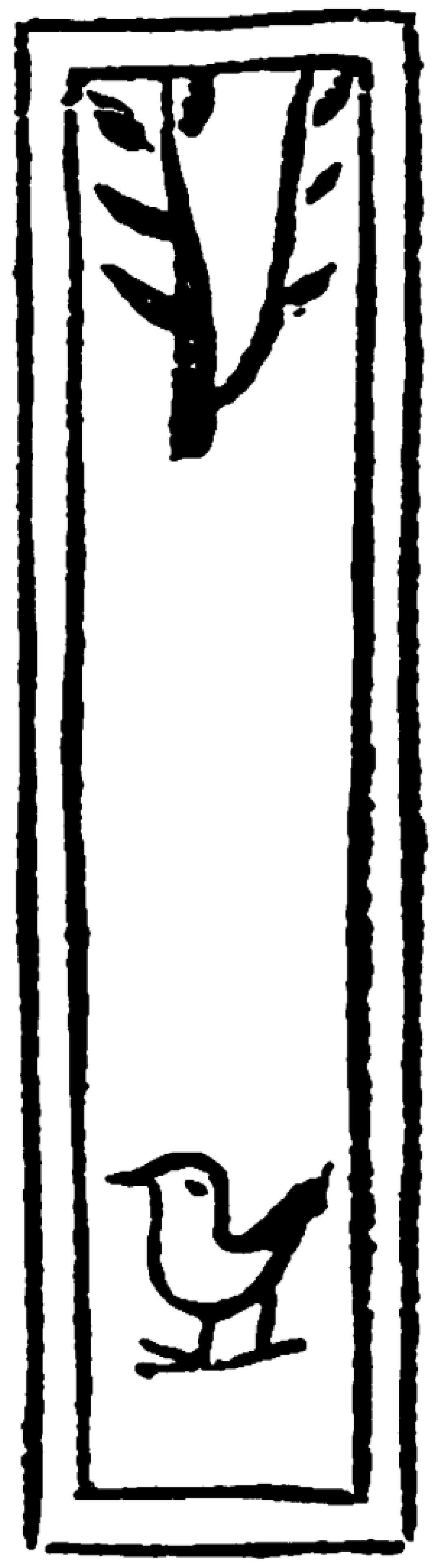
◎彼女等は二人とも土佐に生れて、土佐に居ない、或る地に在つて苦しい煩悶を抱いてゐる、彼女等自らの力に依つて之を切拔けるのは困難であらうと思ふ。非常に大きな力とか、深い信念とか、何かしら抵抗の出來ないものを彼女等の前に持つて行つて、屈伏させてしまはなけりや駄目だ。

◎然ういふと彼女等は必ず反抗するかも知れないが、記者の天眼通を以て察するに、中らずと雖も、遠からざるを知る、敎へられんとして、敎ふる者なく、據らんとして、據る者なしと云ふ狀態が、彼女等現在の心持であらう。而かも之れ彼女等二人だけの心持ではない少しく新しい時代の空氣に觸れたものは凡て皆然うだ只文章や何かにそれが、はつきりと表れて來るだけのことである。

◎順子が近頃の歌に『わびしさにたへぬ心は鏡とりねころびしまゝうつしみるかな』と云ふのがあつた、此の歌は能く彼女の僞はらぬ心持を語つてゐるもので、恐らく然うした感情に生きてゐるのであらう。

◎文章は重子より順子の方が才分が豐かだ、重子は一本調子で、所謂自己告白流のものだ、順子は自然を描いても、人間を寫しても、かなり自分を離れて味ひ得る丈の藝術氣を持つてゐる、若し相當の用意を以て進んだなら決して誌友の間でも下には落ちない。

◎留子は重子の妹らしいが未だ幼い、伊豫に一人、政子と云ふのがある、鄰國、行々子などの雅號があつて相當の筆の動く才を持つてゐる、現れゝば宜い。



評論　　編輯局選

○徒歩旅行選手と其記事

武蔵　桂の華

昨夏初めて萬朝報によつて行はれた徒歩旅行の記事を中途で止して了つた事を未だに殘念に思つて居る、私は更に第二回の企てが有ると聞いて、心密かに期待して居つた。割合に同じ樣なことと許り掲げて居る新聞の記事としては新しい興味のあるもので、私は毎日の配達が待遠しくて堪らない。

日本海方面の佐々木選手は、嘗つて本誌に『オキザリスの花』を書いた人だと云ふ事を此頃になつて知つた。氏の文章には深く印象されたことがある、其れはその眞摯な態度であつた。好母と云ふ優しい懐かしい名にも拘はらず、氏の係又文には何故か一脈の暗い影が偕めるやうに思はれて、いつも親しみにくい叔父さんと云ふ感じが倶ふて來る、此事も近頃になつて解決された、といふのは清水選手が幾度となく、『好母君へ――』と青森で別れた人の名を呼んで旅の便りを傳へたにも拘はらず默して答へなかつた彼が、何日だつたか『都代二樣へ』と優しく呼んで湯の宿よりを書いた事があつた。『好母といふ名を持ちながら母の面影さへも見知らぬ男の拙ない性は……』の一節は、不思議に私の胸に鑄つけられて死灰の如き冷熱の子は熱い涙を流し乍ら點首いたのである。

青森より越後へかけての旅路は、太平洋沿岸に比して暗い故か、彼の紀行は晴れ〳〵した日本海に臨んで書いたものでも何故か山路を越ゆるそれの樣な氣分で綴られた、一つは彼の淋しい性に由るのではあるまいか而して其文は幽禽叫ぶ深山の影を寫して緩やかに山裾を繞る深碧の水にもたぐへやう。

清水選手、うら若い旅人は憧憬多い少年の夢から醒め切れぬやうな、燃ゆるやうな感情に、其日〳〵の便りは飽く迄華やかであつた。既に倒れんとする刹那まで若い悲哀は全文の上に流れ乍らも、堪へ難い懊悩と困憊の色を強いて隠さう〳〵としたやさしい努力の痕が痛はしい迄に讀める。初め私は紙上に掲載された寫眞を見て、稍蒲柳らしい體格に二百里の行程を蹈破し

得るやと危ぶんだが果して彼は病んだ、けれども其背部の腫物が發程以前に催して居つた事を聞いては、病を負ふても尙其責任を果すべく病苦と灼熱と戰ひつゝ七十里まで進んだ勇氣に感嘆しなければならない。

夏の夕、公園の青草を靜かに蹈めば、蹶の不安のうちに青草の香が心地よう胸に泌み入る。それによく似た感情を此人の文に依つて味はしめられたのである。

淸水選手の交代として立つたのが久米選手である、此人は總べて自己を中心として物に動じない態度を取つて居る、自分在つての人と云つたやうな人を人とも思はない風が面白い、そして氏は非常に觀察眼の鋭い人である、と同時に學術上の造詣の深いことが時々古刹に接し、或は偉人の遺物を見る時に於て表現せられる、最早憧れをもつて旅を續ける人でなく、すべてを白眼で見透して行かうと云ふ人である。又一方に於ては無邪氣な誇張と諧謔とに富んだ人であつた、何かにつけて眞面目な苦蟲を嚙みつぶしたやうな顏の出來ない人であらうと思ふ。

私はあの仙人掌の花が知らぬ間にすく／＼と延びて行つて、まばたきする間にパツ／＼と一ひら／＼開いてゆく不思議な心持を其儘此評に代へ度い。一夜の內に形造られる白い大きな葩と、其の高い香りと。（池寬）

長き旅より歸つた若き才人は是を讀んで首肯するや否や。（評）

○若杉樣と前島樣

伯耆ふみ子

一面の識もないのに、こんなことを申上げるのは、失禮かも知れませんが、常のお作物を見て妾はお二人につき左の如きことを思つてゐるのです。

若杉さまと前島樣――此のお二人は天秤にかけたらきつと、棒がしはるだらうと思ひます。

意力の勝つた、凄艶な眉の濃い黒い大きなパッチリした目の女を思はしめる若杉樣と、こつてり厚いお化粧の人形の樣な顏に、緋鹿の子の半襟かけた十五六の舞姬を思はしめる前島樣とは、實に好い對照だと思ひます。か〻る對照をもつた二人の若い天才の人は、何れも女子文壇でお生れなすつて、多くの誌友の羨望の的となつてゐらつしやるのです。先づ、

若杉樣――冬の夜の、大空に皎々としてゐる白い月の樣な、冷靜で、意力の勝つたお方の樣に思はれますそして若杉樣は平凡な事が、すつかりお嫌ひぢやありませんか、從つて獨創力の強い凡ての事に、一歩進

んだお方と見受けます、又、非常に好奇心の強い、自尊心の高い人のやうです。そして、之れらの、御性格は、若杉様の外貌や、お作にちやんと現はれてゐると思ひます。着物とか其の他の装飾品などにつき一般の人の好む流行物では、お氣に召さず、一歩超えた一種の若杉式とでもいふやうなことを、お始めなすつて、それが、品の好いおからだと、美しいお顔とによくうつつて、他人から見ると、非常にハイカラのお方の様に見えるだらうと思ひます。

お作は、若杉様のは、甘つたるい軟い感情のものは少なくて、多く、人の生といふやうなことに着眼なさつてお書きのやうです。ですから、生きんために、苦しき世と戦つてゆく其の刹那の感想とか、辛い生活に對する心情などを哲學的に、一句々々が胸に針を刺す様な奇警な語句や文字をつかつて、お書きになるのが此の方の得意の様です。そして眞面目な血の涙でも滴らしながら、眞情をもつて、お書きなさつた様に見えて何となくチヤームされます。又筆づかひの、意力の勝つた重い調子なのが一層、讀者の胸に強く響きます

次に、

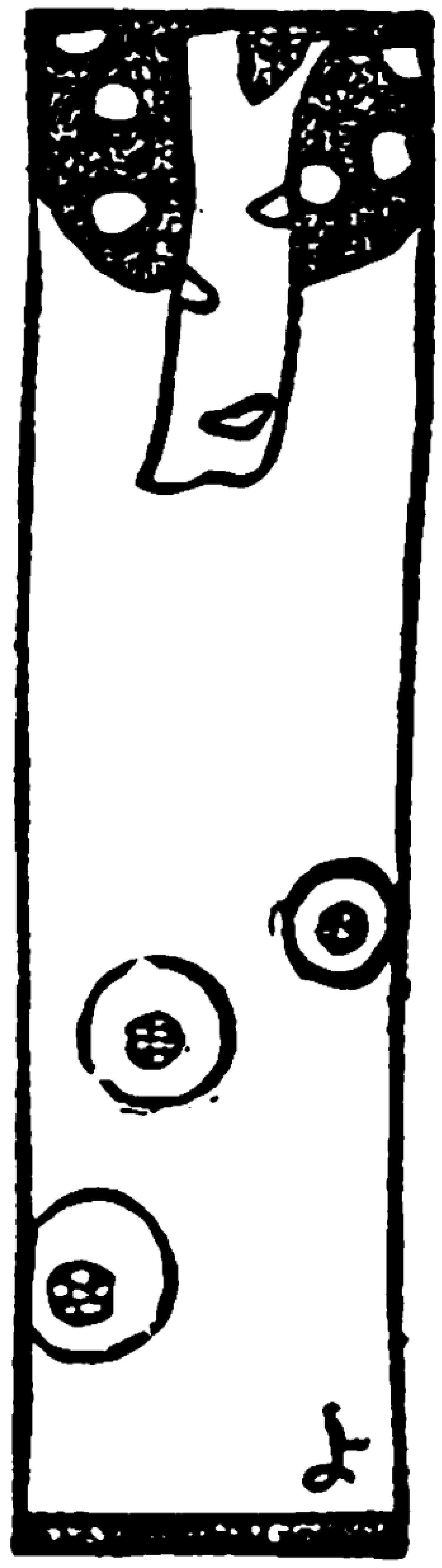
前島様――あの春の野に咲くれんげ草の様な、罪のない、可愛らしい人を、チヤームする様なお方と思ひます。誰れでも前島様と相對したら、無邪氣な心になつて、話せると思ひます。

お性格は極めて圓満な、いつも光明なお胸と思ひます。そして此のお方は、一寸情的の様に思ひますが、姿は意力の強い知的に物事を判斷なさる賢い人と推察します。従つて、人一倍お斷念の好い方でせう。

併し、眞綿のやうな、軟い温いやさしい情は、常に前島様のお胸には漂つて居ると思ひます。つまり、前島様の感情は、充分陶冶せられた情緒ではなく、高い尊い情操に近いものだらうと思ひます。お作には、右に申上げた御性格が常に現はれてゐます。高い尊い感情でお書き遊ばすから、下等な花柳の紅い燈のもとを御書きなさつても、少しも嫌味がなく讀まれます、そして、前島様は元來美しい外形を描出なさるのが、お得意で、讀者の胸に、あつと、目のあたりに美しい光景をお見せなさるのが、何人も及ばない所です。そして、筆づかひが輕くて、それからそれへと、少しもとみがなく、走馬燈のぐる〳〵、まはる様に、行くのが前島様の天才が閃めいて居る所です。

終りに、お二人の御幸福を、祈つて置きます。（人實）

殆ど肯綮に當る、婦人にしては鋭い批評眼だ。（評）



俳句

内藤鳴雪選

○（天賞）
名月や古人の其角なつかしき　堺市　高橋茅草

○（地賞）
沖遠く火を吐く島や秋晴るゝ　札幌　俣野幽香里

○（人賞）
千生りの十にも滿たず秋の風　常陸　霞水子

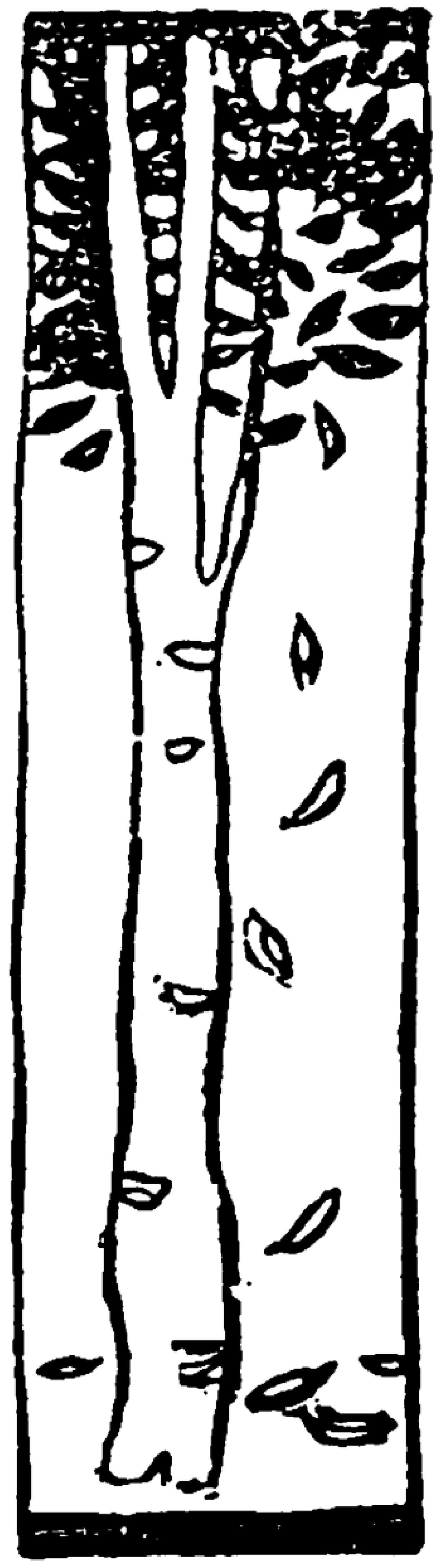
佳作

秋の水小さき魚の泳ぐなり　橫須賀　美葩子
幼君の抱かれたまふ神樂哉　牛込　畑中小子
わが心つれなき秋となりにけり　麴町　牧野はん子
背水の陣を圍りて蟲の聲　米子　笠木白菊
名月の山路につゞく小荷駄哉　牛込　鈴山廣子
濡よ人の音信もなく暮るゝ秋　岡山市　桃の村女
目の覺めて庭園かけたり秋の朝　高知　森村紫華子
まろび寐の窓をのぞくや三日の月　大阪　繼子

寫生すや縁臺に映る秋の雲　下谷　小原あい子
佛像の眼に秋の日ざし哉　岡山縣　粟田銀茄
秋風に自ら誇る案山子かな　德島縣　山ざくら
訪問や名月の夜も酒盛り　阿波　平田清子
翠柳や湖畔の家に雨けぶる　大阪　村田擣子
芭蕉葉の破れける日を包まんとす　靜岡縣　菊地つさ子
米つけば響く家や春日和　鹿兒島　山下登代子
月島へ渡る夜舟や川千鳥　上毛　境野松子
夕蜻蛉悠々として秋の空　木崎町　少女
野につゞく校庭廣し秋の月　深川　曉子
見殘し夢を辿らん天の川　大阪　村田擣子
宿屋の縁の稻や柳散る　日本橋　小林政子
登山者の白髮哀や夏の月　久留米　淚花子
夕月に駒つなぎたり萩の家　神戸市　落葉子
染袖みい乙女やさしきはゝかむり　豐橋市　八木秋
大寺の柱冷たき灯かな　宮城　寄志靜子
白熊や氷の海の月の下　大阪　三木白菊
見返りて蟲の鳴く野をひとり哉　石川縣　北郭
腰掛けたまゝ秋雨の小憩哉　近江　光子
笠掛て人の默坐や初時雨　上野　高村たき子
名月や簞笥の上の立鏡　信濃　サヽガニ
媼女の姿に秋の月昇る　上毛　小澤光枝子
山の井や汲む人もなくて萩の散る　大阪市　良女
總知らぬ女も泣くや秋の雨　京都　齋賀子
白壁に夕日射すなり菊の影　周防　重原美女子
神饌の米研ぐ井戸や風薫る　新潟　村山ぎん子
名も知らぬ佛に菊の供養かな　小石川　千代子
草の露葉毎に月の光かな　信濃　保科伊津子
雨晴れて小松の下に蕈の香を　水戸市外　百日紅
庭に來る蚊もなつかしや秋の雨　下關市　西村文子
子を抱いて母をたすけて月見哉　北海道　小林白薑

奉納の手拭古し鹿の堂　佐賀　花の舎
諒闇の夜を淋しき砧哉　渡島　伏見呈溪子
渡船場の人さまぐや今朝の秋　茨城縣　小畑とし子
名月や二三騎渡る川の上　東京　根崎久子
秋の雲傾城は只眺めけり　水戶市　緋紗子
白楊の影より暮るゝ秋の水　山口縣　郷良美那子
萩の道戀しき人を送りけり　足利町　飯塚米子
落暉の笛の音戀し夜の街　京都　扇花
秋風や三笠の山を走る鹿　伊賀　中村こま
秋雨や海邊に船を呼ぶ女　茨城縣　浮舟
秋の夜の袖も露けき野道哉　茨城　谷口英子
露こめて案山子消えたり秋の暮　播磨　龜岡みつゑ
朝霧や一きは目立つ樵男　東京　草苺
秋立つや思はぬ草に風の立　小倉市　渡邊よし子
葉鷄頭夕の水に映りけり　京都府　竹村楓
雲低く夜風吹く野や蟲の鳴く　淡路　清水花子
衣更へし遊女の庵や夏の月　淡路　高田君枝子
岩上の一本松や蟬のなく　若州　元山ふく子
枯桿したゝりて水に秋立てり　福岡縣　川島和子
涼しさを知らで過しぬ氷室守　日光町　吉新秋子
明月や一人眺めて興多き　佐賀　泥子
秋雨や日記の紙に繪など書く　常陸　田村紫色女
橋の上金吹きちらす銀杏かな　加賀　村田いと子
朝顔の花にも戀や狂ひ咲き　近江　瑠璃香
青竹の切り口に秋も立ちそめぬ　土佐　福田紫葉
絲萩の露かゞやきて秋の月　羽前　長澤美也子
下闇や痩せたる草の三四尺　長野縣　麻田千代子
別れしてかへる山路やほとゝぎす　すゝき
池の面に萩の花散り雨蛙　福州　內山小久子
青あらし天女が開く扇かな　山梨　吉田くにえ
行く秋の宵を雨きく書齋哉　玉島　大西千登世

初猫や紅緒の草履脱いて來る　伯耆　田村英子
君に似る秋七草にうた添へて　舞鶴　雪子
秋風や都の人を慕ひ吹く　栃木　ゞ子
木犀の香冷たし今朝の雨　三次町　高橋しぶき
名月を縁に眺むや大原女　京都市　宮貴子
國境山なつかしや雲の峰　博多　山村露花
蛩鳴くや池に朧の山のかげ　木崎町　松の舎
人送る古驛の雨や雞頭咲く　靜岡縣　秋野たけ子
秋立つや桐の一葉の音たてゝ　下野　水山紫子
濱風や湖上の松に大島の　德島縣　百日紅
あじきなや河原に晒す秋の布　周防　若菜
笈を負ふ兄は歸りぬ秋の暮　筑後　原中牟田
湖涼し山影青く水に落ち　長崎市　蘆花子
木枯に荒馬を追ふ野道かな　大阪市　河盛よしの
御料地や五尺の稻に風香る　岡山縣　鈴木辰子
蟲鳴くや桔梗の花萩の露　日光町　吉新やす子
月を背に笛吹く人に落葉かな　深川　矢澤柴子
雁なくや濱路を辿る小提灯　越後　芹田紫紅子
明月や名妓は病みて部屋の內　福島縣　ゑし歌
湯を出て姿見に向ふ浴衣かな　京都　小芹
百八の鐘の中なり初烏　美作　橋本紫葉
ゆめに笑む妹の顔に秋の月　廣島市　村上きよ子
名月を仰いで酌みぬ酒一斗　下總　あらゝぎ
端居して笛吹く人や青嵐　水戶　重子
名月や今宵を蟲の啼き競ふ　山口　卯花子
笠ぬげば秋の風吹く廣野かな　山口縣　郷良美那子
朧影もなき月の夜や竹の春　備前　柴田紫子
秋日和小さき花の咲きにけり　岡山市　野菊
對岸のすゝきにも秋來りけり　筑後　栗山寬子
四阿に圍碁の音あり秋の雨　札幌　佐野幽香里
浮草に月見してゐる蛙かな　石橋露子



創作　編輯局選

○雨の朝

上毛　阿久津雲路

今日は朝から細い霧の樣な秋雨がしと〳〵と降つて、まだ花の咲かぬコスモスの葉を柔かく濕させかすかに光からせてゐる、私が鏡臺の前に坐ると其のかすかに光つてゐるコスモスの葉の間になんの悲しさもなきなんのおもひもなき、私の顏が露の樣な甘い喜びをして映つた。春の雨の樣な柔い雨も映つた。

ふと身をもたえるとカンナのすく〳〵としてのびた葉のかすかの光りが映つた。花は映らなかつた、私は其の花がたまらなく見たくなつたさうして頭を壁に摺り着けてのぞきこんだ。松の下枝までとゞかんばかりのびたカンナは七つか八つかたまつて黄い蜜の雫をたらして咲きほこつてゐるのが見えた。あゝあのカンナはこぞの春前橋のおばさんが持つて來て下さつたカンナだ……今頃は前橋もこんな細い霧の樣な雨が降つてゐるだらうか金ちやんはもう口がきける樣になつたらうか私は前橋がたまらなく戀しくなつて行きたくなつた。

頭をおこそうとするとふと火の樣な玉が見えた、苦しくも又頭をたれて色々に見やつたすると松の根本に血い雫のたれさうなダリヤの花が見つかつた、ぽたり〳〵と松の雫の下る度ごとに雨に醉うてうなだれた花は葉の陰に身をかくす。こんど私が前橋に行く時にはあのダリヤを土產に持つて行かう。(天賞)

價値のある創作です、伸ばせば伸びる好い才能を持つてゐる少女だと思ふ。(評)

○二年見なかつた本誌

金澤市　京ひな

私が女學校の寮舍に入つてました頃は、もう月の一日になるのが待遠しくつて〳〵、月末になると何遍も書店へ無駄足をつかふ程、一心になつて愛讀しました。ある日、それは彌生の頃、東京では雛の節句とて、少樣がお白酒よ、草餅よとさわぐのに、北陸ではまだ雪空のはれやらぬ日のみ續いてゐました。私はいつもきまつてもたれる室の西窓で、お晝の休み時間に、本誌を開いてゐますと、直ぐ眼の下(後庭)を過るクラスの方々が、口々に、×樣(私の名)は森先生(國文)のお花と道埋よ、女子文壇の才媛の文を燒直しするんだもの』聞えよがしに罵つて、冷やかに見あげて、がや〳〵と過ぎゆきました。口惜しう御座いました、只々人々の口の怖しさに、身を震はして泣きました。身の潔白を知らせたい爲、私はこの日この時、もう卒業するまで、文壇を斷然やめると誓ひました。そして高く積まれたのを惜しかつたけれど、皆は驚きの眼をみはりましたのを、私はどんなに氣味よく眺めたでせう、斯うして文壇を覗かなかつた、二年の星霜はいつしかたつて、再びこの懷しい文壇にまみえる事が出來ました時、暫しは會心の微笑を禁じえませんでした。(地賞)

ありさうな事。(評)

○顏

小果女

何故妾の顏はこんなだらう?
どうせ女に生れた私、おそのちやんのやうに綺麗に、美しく生れたか

つた。神様は随分不公平だわ、——さう〳〵、こんな事を考へるのではなかつたに、働かねばならぬ妾ですもの、何故こんなに考へるのだらう自分ながら可笑しいわ。まだ年が若いんですもの、たつた十七よ、おそのさんとは三つも違ふんですの、おそのさんは十七の時に貰はれて行つたんださうです、何でも大盡の旦那ださうだが？……。

此間も見違へる程美しくなつてきたわ、白粉をぬつて紅をつけて、ほんとに私誰かと思つたわ。妙に美しい女がきたと思つて近づくとおそのさんなんでせう。私きまりが悪くつてよ、白い手や、白い足を見るにつけても私の眞黒に日にやけた顔を合せるのが、羞しいからそつと行き過ぎやうとすると、

『おきくさん！』と聲をかけられた時は、極楽で鬼に遇つたやうでしたわ。それでも黙つて通るわけには行きませんからまあ時候のあいさつをして『急ぎますから……』つて云ふて逃げちやつたのよ。

私の顔は何故こんなに醜いんでせう、いやな顔ぢやないの、眉がつり上つて……、まるで夜見の國の醜女といふやうですもの。あゝ、これも皆世の……あゝ。

駄目々々こんな事をいくら考へたつて美しくなるのではなし、考へずによく働きませう。そして後の世をうつくしく、楽しく、嬉しくくらしませう。その方が餘程いゝわ。

おそのさんだつて、今に皺だらけのお婆さんになるのぢやないか。そして亦今のやうに美しく楽しく暮して行けるであらうか。

今の旦那がお婆さんになつてまで楽しくして下さるであらうか、いや〳〵あるまい。その時になつていくら後悔したつて仕方がないわ。それより今の内に働いてお婆さんになつてから楽しく暮しませう。さう〳〵それが一番いゝわ。(人宜)

少しわざとらしい。(評)

○悲しい

東京府　橋爪中子

泣して下さい、泣して下さい、淋しく母なくそだつた子は、この淋しい涙がなぐさめてくれるのでございますもの、淋しい時かなしい時、一人袂をかんでなきます、灰色の中に沒つて哀愁に生きてゐる兄は、赤い世界に日を送らんものとは露おもひませんもの、思ひのまゝ泣して下さい、幼い私をのこして涙のないもたえのない美しい國へ逝つた母さんは、情にあつく涙にもろい人であつたとやさしいおばさまにをしへられました。三十にもならない若いむくろを此の世にのこして逝つた薄命の人の血をわけてうまれた私は、やつぱり涙にもろくそして辛多い、身ではありません。月のあかい夜も、花散る夕も、涙にむせびます、義母さん泣して上さい、思ひのまゝ。

『お前みたいにすねてゐては一生一人でくらさなくてはならないよ』義母さん私は、私は死ぬまで一人で行きたうございます、決して〳〵たのしく夢みてくらして行きたくはありません、けれど義母さん、こんなすねた子にもやさしくなぐさめて、くれる友はあります、異身の姉妹もおよばない程あいしてくれる姉様の様ななつかしいこひしい友をもつて居ります。何もおつしやつて下さいますな、義母さん！、こひしい姉様の様な友のやさしい腕にいだかれて泣いてそして時たてばやさしい母さんのもとに行きます。

誘惑に氣をおつけなさい。(評)

○表紙を見て

筑紫　民枝子

雛の大壇で、久しぶりにいらしつた、姉様と話して居ると、ゆるくつくろつたふところを寛ろげて、お乳をいぢつて居る。

『あら〳〵可笑しい歯が皆んなかけてしまう事よ』と云うと、姉様のお袖の下に隠れてしまふ。俊ちやんお幾歳ときくと、おぼつかない手付、でも得意さうに、『四つちゆ』ほんたうに、振ひ付きたいほど可愛かつた四歳一號にそつくりだと思ふ。本年の七月號を見い〳〵談笑して居ると突然『姉ちやんこれ化物』つて、勝つちやんが聞く『どうれ』とお祖様とも上げて『あゝ、美人だね……』『あら日本人よ』と云ふとふだつて目が青

光りよ』『でも髪が黒うございますわ』『魚が泳いでるね……一二三四つ女が水泳してるのだらうね……姉ちやん』『得たり顔して男さんが云ふ。『いゝえ海の底の様よ、羽の様なのは、昆布に違ひないわ』『ぢや乙姫様ね……』菊ちんが大発でさも得意さうに云つた、皆吹き出してしまふ、後ちやんまで一所になつて、お祖母様すました顔して、『さうね――』ゝ目鏡をかけなほしながら『目が青光りで髪が黒くつて海の底に居るなんて並ぢやないね――、ただ、乙姫様は、もつと美しい筈ぢやが、な――』と笑つておらしつた。

あまりの面白さに好奇心の強い、子供等相手に、四五十冊の女子文壇の表紙ばかり批評して、日の西山に傾くまで大賑合しました。

表紙の評判はおもしろい。（評）

○お稽古

済水よね子

今そとから歸つて着た母は、私の顔を見るなり『また行かないのかい何をぐづ〳〵してゐるの、早くお行き』と云はれて、しぶ〳〵ながら家を出た。暖な小春日、さしてゐる日傘の上を、何度か赤とんぼにかすめて通つた、なんだかうらやましい様な氣もした、あゝ嫌なお稽古、一昨日であつた、お雪さんとこの、よく人の惡口を云ふ女中があなたの姉様は何してゐらつしやるのと聞いた、私はカツとなつて默つてうつむいてゐると、顔をのぞきこんでニタ〳〵と嫌な笑をした、あの時くらゐくやしかつた事はなかつた。あゝ、姉さんは藝者だ、春野屋から出たのは、十六の十二月であつた、あゝ私も早十六になつた、もしや今年の、あゝ私等姉妹はと思ふといつか涙が滲み出た。そして人に顔を見られるのが嫌さに、成丈うつむいて歩いた。耳もとではしやいだ笑ひ聲がおきた、驚いて頭を上げると、島田に結つたいきな女と、俳優の樣な男とが、角の料理屋から出て來たのであつた。それを見ると自分が何か罪ををかした樣な氣がした。そしていろ〳〵な事を考へながら、いつかお稽古屋の前へ着いた。お雪さんが來てゐはせぬかと中のやうすをうかゞつたけれども聲はしなかつた。中へ入ると美代ちやんおそかつたねと云つて師匠様は私の顔をみた。私は返事をすることも嫌な氣がした。

あなたは決して藝者になりなさるな。（評）

○思ひ出の繪端書

大阪　白露子

ふと本箱から出た此繪端書、懐しいわ此スタンプ。鮮やかにポンと捺された二つのスタンプよ。一つは比叡山、一つは比叡山四明ケ嶽。チラと見てホロ〳〵と涙が出た……あゝ此峰よ此湖よ。

太陽は今出た許りの強い光線を靜寂な天地に投げて居る。四明ケ嶽は只與黒に、琵琶湖は白く、美しい明方の空は空高く懸つて居る。

思へば明治四十二年五月三十日であつた。先生が七人有志の生徒が總十人。六人ばかり此登山の催し。

梅田出發が五時何分、七條で降りて先づ加茂神社に参つた。道はどう取つたか、見に何美しい大原女の花の薪を頭にのせてユタ〳〵と得山降りて來る道だつた。しつくりとよく落付いた京の山水、それに配された雅な大原女……。大きな石のコロ〳〵した河も渡つた、細い山道の花を分け〳〵て谷へも降りた。時鳥の聲も聞いた。二抱も三抱もありさうな杉の立ち茂つた森、そこには色々の苔が柔かに天鵞絨の樣に繁茂して居つた。齒朶の根に雪の下の白い花と、紫の匂菫を見付けた時、若い血汐はふるひました。延暦寺の古い御堂、此處に歴史を聞いた師の君よ……。茶店で力餅を買つて繪端書にスタンプを捺して貰つた。初夏の空はかつり照つた。道は次第にとドくなる、足は疲れる、と、咽喉が乾いて〳〵二十歩十歩、只もう夏蜜柑と水筒を命の綱と頼むのであつた。『そんな事ぢや今夜中に此山は越せませんよ、三井寺も琵琶水もどうするんですか』――琵琶水といふ一言に皆の足は急に早うなつた。

『近江富士が〳〵』遠くの頂に此聲を聞いた時、親友三人憧れの子は一勢に駈け出した。渺茫の湖面に浮いた近江富士を見た時の嬉しさ、思はず肩を組んで手を握つて歌つた。下りはわけもなかつた。汽船で唐崎の松を見た。三井寺ではそろ〳〵暮れかゝつた。琵琶水は恐ろしくもあり面白くもあつた。梅田に着いたのが十一時過と思ふ。疲れた足を家迄運ぶのはもうつらかつた。『此まゝ此處で三人でいつ迄も〳〵寐て見たいわ』汽車を出る時から云つた友、今はすでに人の母となつた。一人は果敢ない失戀の子、あゝ思ひ出の此繪端書、私は永久に私の手元から離しますまいよ。

読友くらぶ

交際

○ MISS H. AKIYAMA
105. S. SANPEDRU, ST.
LOS. ANGELES, CAL. U.S.A.

▲母國の姉様方　私は米國の野に淋しく暮して居るものです、誌友の皆様方絵葉書の交換をお願ひですわ。（北米、秋山春子）

○ MISS. T. SASAHARA
659 S. MAPLEACU
LOS. ANGELES CALS U.S.A.

▲米國より　私はオレンヂの花香るアメリカの空になからく居ります、故國の空恋しくてなりません、せめて絵葉書になりと故國の便りを知りたく、皆様の内で下さる方があらば嬉しく存じます、私も當地の珍しい絵葉書でお返しをいたします。（笹原露子）

○ 福井市元濱町七十九番地　木村等子

▲寫眞　誌友の皆々様不束の私へ御交り下さいまして此の段謹重にも伏して御禮いまします私寫眞狂ですから御交換を願ひます。

○ 小笠原父島大村　青木貞子

▲小笠原島より　私は當年二十二歳幼年時代より波瀾多々家庭に生ひ立ちし女でございます本年四月人妻となつて生れし郷より小笠原へまゐりました それ以来本誌の愛讀者です身は小學を卒業した限り至つて無學ですが文學や和歌が大すきでひまさへあれば机に向つて書きたい物をかいて居ります 和歌文才に富んだ方とへだてない御交際を永久に致したうございます 思召しのある方はなにとぞ御玉章を。

○ 京都府相楽郡加茂村字大野　平岡たつゑ

▲寫眞　を送つて下された御方には必ず私の寫眞を御返し申します

○ 岐阜縣東濃加茂郡和知村中組　佐藤八重子

▲私は木曾川　のほとりに一人淋しく暮して居る不肖なものですが何卒風景絵葉書の御交換お願ひますよ。

○ 香川縣丸龜市西平山町吉田方　香菊

▲二十歳前後の方　昨年學校を出てからは本誌を朝夕の友と親しんでゐるのですが 姉様方お差支へなくば清き御交通をお願ひ申します餘り勝手がましいのですがなるべくなれば二十歳位のお方へお願ひ申します。

○ 靜岡市鷹匠町三丁目十六番地の乙　石垣靜子

▲靜岡の方に　美くしき詩の國に遊ぶ姉様方私の様な淺學不才な者ですが御交り下さいませ特に靜岡市の姉様方に御願ひ申します。

○ 北海道旭川字神楽町二丁目三番地　島崎いま子

▲北海より　誌友の皆様御慕はしき玉章や絵葉書の御交換を永久におねがひ申します。

○ 備後神邊町　村田よし子

▲起[illegible]雜部より　誌友倶樂部の御交際を御願

致します少女で御座います　私には姉妹と云つては誰も居りません只々此淋しい離れ屋にて女子文壇や鳴く蟲より外には親しい御友達なく下手な音樂を調べて居る者で御座います　何卒々々以後は姉妹として御交際下さいませ　きつと御返事致します

○

京都府伏見町字加茂屋小谷様内　悠　星　子

▲高瀬川畔より　冷たい大石にもたれて、凋落の秋の靜寂に耽して居ります。私は學校を去らねばならぬ運命となりました。運命!!さうです、絶對に私等の抵抗を許容しない運命だものどうしやう。アメリカへ行きたい、毎日こんな事を思ひつゞけて居るのです、温い心よりの御手紙下さいませ、寂しい生活をつゞけて居る此私に――丹後の御姉様方に特に御願ひ致します

○

久留米市島町佐野方　中島みき子

▲「回繞畫集」　うら若い者が洋畫研究を目的を以て「ベニフデ」てふ回繞畫集をこしらへますから同志の諸姉様方何卒盛んに御寄稿下さいね原稿を送つて下さつた方には屹度廻しますよ、規定としては一人ハガキ形位の大さに五枚以内水彩鉛筆コマ畫ペン畫何れにても隨意但し臨畫を除き寫生及作畫の事佳作には薄貨を呈しますね皆様本月二十日迄に御同情下さいね。

○

岡山市大工町二五山本惣次郎内　山　本　峯

▲涼しくなりました　私はしばらくこちらに居ますからどうぞ御たより御聞興下さる時には何卒こちらへ未熟ながら御返事きつといたします。

○

▲三層樓上より　遠山藤乃　眞に勝手な申し様ですが、誌友の皆様!御情あれば此拙なき女に一度お玉章お恵み下さいませ　私はそれを處女時代の思ひ出草として、永久に保存して置き度うムいますので……え、そりやあ屹度お返事にしてよ。住所は本所區清水町六マニラ麻鋼玉商店内加藤方として解し易く宛名は「ふうちやんへ」と書き添へて下さい。

○

茨城縣多賀郡日立村大字宮田　根　本　玉　子

▲田舍に生れし　無學者にして哀しき我が身何一つ樂しみはありませんの?只月に來る雜誌となつかしき友よりのお便りを待ちて淋しく暮して居りますの?あゝ情深き誌友の君よ哀れと思召し給はゞくるかりがねに託して御水ぐきの跡見せ給はずや屹度御返事を差上げます。

○

岡山縣川上郡高山村　川　上　利　之

▲御懐しき　誌友の皆様よ　私は草深くこもり居る片田舍で毎日さびしい　さびしい月日を過して居るものですどうか哀れと思召されて長しへに御交際をお願ひいたします。

○

秋田縣河邊郡新屋町一五六七　高　島　幸　子

▲繪葉書　何卒繪葉書の御交換を願ひます私は屹度　秋田市名所繪葉書で御返事いたしますわ

○

富山市赤十字病院　篠　原　み　ゆ　き

▲追々寒むく　なりました　誌上の諸姉様御變りはございませんか此の好時節を逸せずお遊び遊ばされよ。

○

相州三浦郡浦賀村田浦一二一六
田面榮次郎方　久　米　本　英　子

▲田浦の里より　御懐しき誌友の皆々様私は戀しき故郷を後に此淋しい島に只一人文壇を友として日を送つて居る者でございますが何となく誌上の皆々様が戀しくなりました何卒レターや繪葉書寫眞などの御交換を願ひたう存じます

○

横濱市港町二丁目八十番地日下國方　藤　と　み

▲私は騷くさい街　に住む者ですがいつしか世につれまして今月より愛讀者となりましたから永久に御交際遊ばして下さい懐かしき御手紙も戴きたう存じます必ず御返事いたします。

○

山梨縣甲府市横町村松様方　今　泉　幸　子

▲山深き　甲斐の國にて夜中つめたき夢路をむすびかねては淋しさ悲しさに幾夜も一人で泣き明して居る　私はわづかに心をなぐさむるは女子文壇のみで御座いますの　何卒誌友諸姉様よ一片の御同情あらば御手紙を下さいましなきつときつと御返事してよ　又私ね三男子の曲、四季の月、須磨の曲、露營の夢なゞ存じて居ります故御望みの方には御送り致します。

○

信濃筑摩郡廣丘村　保科伊津子

▲歌を好む方●●●●●　我が筑摩野にも藝術化した人が澤山出る樣になりました。誌上同趣味の方私に御手紙下さつた諸愛讀者樣御無沙汰致しまして誠に申譯ありません。この後も御見すてなく。

○

三河岡崎町字傳馬　神戸代志子

▲妾は風景繪葉書●●●●●を好みますが交換して頂戴な、當地もずゐぶん名跡の多い所です。

○

靜岡縣磐名郡笠井町　金田方　松乃しづ子

▲田舍の町●●●に寂しく情なく暮らしてゐる少女をあはれと思召し下さいましてお手紙や繪葉書の交換を遊ばして下さいますならば封書でお願ひ申したうございますの。

○

豐後速見郡中山香村　小川紅き花

▲大分縣投書家の皆樣●●●●●●　私共二十幾人の男女で、每月一回づゝ、回覽雜誌を發行する二葉會といふものを組織してをります、皆樣の中で思し召しのある方は何卒御入會下さい。

○

宗谷町札幌通り二八　佐々木加津枝子

▲北海の岡より●●●●●●　私は今度初て女子文壇(九月號)を見まして　皆樣方の花やかな、文章を讀みました　どうぞ御交際を願ひます。

記者より

▲米國から名畫を送られた方に御禮申します。

▲無名女さんに、紀行文の投稿は結構です、少しも差支ありません▲岐阜の若草さんに、夜雨氏の住所は常陸下妻大寶、橫瀬夜雨氏です▲新潟のまり子さんに、少女から本誌へいらつしやつたとのこと、お仲間は澤山あります▲大分の桀子さんに、御病氣のよし、お氣の毒です　大切になさつて一日も早く御全快を祈つて居ります▲會津の梅津りきさんに、暴風の御見舞として美しい肉筆の繪ハガキありがたう▲紅い日さんに、本誌の繪の選拔は山中古洞先生です▲吉田夕草さんに、神經衰弱の爲め別府溫泉御入浴中との事、御自養なさい、繪葉書は有りがたう▲上州の十六女さんに、初作とは只初めて作つたばかりでなく、初めて公にすると云ふ意味もあるのです▲こと子さんに花守日記が手に入りましたさうで、宜しうございました、二十八宿と花守とは記者もさしあたり心當りがないのです、二十八宿の方は何うかすると市中の古本屋にあります、聞いて御覽なさい▲七月號のバンクバーの山本秀子さんの誌友くらぶ交際のアドレスが大變違つておました、本人の申込もありますので此處に正誤します(MISS H YAMAMOTO. 845 POWELL. ST. VANCOVER. B. C.)▲下野のヴヰナス會女學部の代表者ゆき子さんに、會が盛んになつて發會式には百三十五名もお集りの由結構でした、なほ一層盛んになることを祈つて居ります、但し御申越のお寫眞は事務部よりお返した筈です▲夕草さんに　御尋ねの答は　かね子さんです▲佐渡の萩香さんに、もはや今月から自然、人事の區別が無くなりました

小品文として御投稿下さればよろしいのです、お尋ねの同封は差支ありません▲靜岡の狩野京子さんに、折角の投稿でしたが、論旨が透徹しないと思ひます、一部〳〵の言葉尻を囚へて何か言つてゐるやうで、全體の根柢が分りません惜しいが紙上の發表を見合せました▲遠江の白梅女さんに、毎度いろ〳〵の御注意ありがたう、參考にいたしませう、御作を載せよとのことですが、毎月澤山の埋れ木があるのですから何ともいたし方がありません、能く自明して埋れ木の花さく春をお待ちあそばせ。

書籍交換

○ 埼玉縣秩父郡大宮町　地疋福子

▲皆樣のうちに、本誌增刊今の婦人、都會の婦人、地方の婦人、の内どれかお持合せの方は御座いますまいか、若し御不用でしたら私の婦女界增刊處女生活、女學世界第十一卷八號、同增刊さま〳〵の家風の何れかと御交換願ひ度うぞんじます御一報願ひます。

○ 大阪府南河内郡道明寺村大字澤田　池田春子

▲持つてゐる書物。多くは女學世界增刊、月宮殿、花かご、悲劇十番、心のひみつ、順境と逆境、さま〳〵の家風等尚大阪發行の女學生畫報、四十五年三月のと六月のとを持つて居ります。△讀みたき書物。四十五年四月の淑女畫報、「本誌增刊嫁時代」「本年九月の淑女畫報」「夢」「國秀小說十二篇」「夢二畫集旅の卷、秋の卷」右の書物御持の方は何卒御取かへ下さいませもしおのぞみの本が私方に無い節には左樣申上ます。

○ 奈良縣八木町東八木西川トク子方　孝子

▲不用の物。少女世界、少女、女子文壇、少女の友、婦人世界、日本少年、幼年世界(小說)新桜君、男氣、にせ紫、(書物)高等女學校用各學科教科書四年まで、オルガン教科書、家庭教育の仕方、新案はがき用文(小野鵞堂著)新式普通書翰文、文の林、女子美文と消息、言海、字引、中學英和辭典、英語熟語ノート、ハーモニカ、手風琴、風琴△入用の物。青春、魔風戀風、女夫波、男波女波、夏子夫人、思出の記、青鞜、夢二畫集、バイロン詩集、藤村詩集、其他有名な著者の小說。望の方は御一報下さい早くネー。

○ 富山縣高岡市坂下町境井辰郎方　土谷靜子

△山口縣の柴蕉樣あなたの、太田三郎樣の草花繪物語を拜借いたしたいと思ひますがあひにくあなたの御望みの物は持ちません外の物で間に合ひましたら何卒ね繪葉書もいゝ物は持ちませんが交換いたしませう。

○ 新潟縣中蒲原郡早通村下　澁谷登喜子

▲妾の處に「(消息記事美文韻文)女子作文大成」(梅子女史著)が不用になりました。△御入用のお方は「作文百科全書」(桂月著)か「俗語辭海」か若しくは「言海」をお送り下さりますればお換へ申して上げますが一度ハガキで御照會下されませそれから(晶子著)「新譯源氏物語」上卷御不用におなり遊ばしたお方は相當の書籍と御交換下さいませんか。

○ 南滿洲公主嶺滿鐵社宅六八　小池敏

△佐久間信恭氏和英大辭林か中辭林、井上十吉氏新譯和英辭典、今井信之氏中學英作文講習書、和文英譯編習書及英文手紙の研究、右御不用のお方は御讓り下さいませんか、私所持の書籍と交換して戴いても宜しうございます。英語に趣味をお持の方と、和文か英文で、心からの御交際をお願ひ致したうございます。

○ 愛知縣碧海郡矢作町大字橋目本村永田中衛方　花枝

△皆樣の内に本年四月十五日發行悲劇十番(女學世界增刊)御不用の方がおありでしたら御ゆづり下さい。御禮は乾度致します。▲又左の書が不用になつて居ますから御望みの方は御一報下さい。春陽堂發行「紅葉全集」第四卷(金色夜叉、寒牡丹、心中船)及ゴールキイ作、中村氏譯「暮れ行く海」

○ 宇都宮市二條町三十一番地　白石喜子

△「早稻田文學、三田文學、夢二畫集」を讀みたいんですの、どなたか御持の方は御讓り下さいませんか御禮はきつといたしますから。

個人消息

○ 和歌山市鍛冶屋町近藤節藏樣方　春子

▲紀伊の宇田すが子樣、甚だ申兼ますが本年八月號九月號の本誌御手許にありましたら御貸し下さいませ、田中落葉子樣かねてのことを實行いたしました私は目下右記の處に居ます。

○　京都西陣　布川千代

▲福井市の芳代様、前號には結構なるお品をお持ち遊ばさる由私は御大切なお品で申しかねますが拜借さして下さるわけにはまゐりますまいか御住所を紙上で。

○　登美子

▲私がね——房州からの歸りに上野公園前の都の田へ泊りましたの、そしたら丁度泊り合せた女學生團體そりあ、つゝましやかな優美な人達私が無作法にも寢衣のまゝお風呂へ行く途中すれ違ふ人毎にもくれいしてお出でなさるんですもの、ほんとに感心してしまつたわ、女中に尋ねたら信濃の奥だつて、明日は江の島の方にいらつしやるんですつて、自分の寢衣姿が恥しくて穴あらば入りたい思ひでした、其の中の一人十六七の可愛い方私永久に忘れますまい、何でもカミイナとか云ひましたわ、皆様のうちで其の團體でいらしつたお方がもしか御座いませんでせうか私ね——何となくあの時がなつかしくつてしやうがないのよ それで誌上を借りてお尋ね致しましたのさやうなら。

○　山口町　楢貴美子

▲山口高女の香川みやこ様其後お變りはございませんの 私は貴女様をよく〳〵存じて居りますのよ、私誰か御わかりになりますの、みやこ様何か女子文壇にも投書遊ばして下さいましね 私も少女の愛讀者の一人でございましたのよ 貴女様のが載つてゐないと物たりない様に存じますな撰ひ下さい。

○　千葉縣長生郡水上村大庭　伊東さく

▲桂の華様。御人違ひでせう、私は東京の學校に參りし事はありません。然し乍ら御身の上よく似させ給ふのに哀はしく思はれます、私は文學好であります、前生の涙の歷史を捨てようとして文藝に引きつけられて行きます、散花、花蝶子として散文、詩、などにあるのは私です、御差支なくば御住所姓名御知らせ下さい、私は裁縫學校に在學中です。

○　常陸にて　姫島俊梨枝

▲堺の始なる八田郁瓦子様、望みの品を御送附下さいまして誠に有難う存じます、御禮申上度また御返しの物も御送り致し度う御座いますからくはしく御住居御報知下さいまし。

○　豐橋市　八木秋子

▲小石川區音羽四丁目のゆり子様、御手紙拜見致しました母様が御亡くなりなさいましたつてね御察し致しますわ まことに申し兼ねますが少し差つかへますから御交際はおことはり申し上げますどうぞあしからず。

○　長崎　町田敏子

▲岐阜のわか草様、十月號では有難う存じました、私からこそ御交りの程お願ひ申上ます、御住所をくわしく御知らせ遊ばして下さいまし。

○　さゑ子

▲山口町の楢貴美子様、もしや兵庫縣加東郡にゐらしつた方では御座いませんか何卒お暇にお手紙頂戴ね待つて居ります。

○　土佐宿毛　野村喜久

▲高知の篠村栄穂子様、お懐しうムいます 私英女の詩、ふたつの花、讀んでチャームされて了ひました。あの和歌も拜見致しましてよ。オヽ、、何故に英女は御本名で投書遊ばさないの? え? 千枝子さま!!! 御閑には レター頂きたいね

○　コスモスの宿にて

▲御なつかしき太田よし子様!!! 淋しい此の砂沼のほとりにもゆかしき龍田姫おとづれ給ひて荒れにし山家の秋? 一種の趣味がありますのよね 入らつしやいな、私たれか御存じですか當てゝ御らん遊ばせ。

○　岡山市　武子

▲美記子様——レター出しても御返事下さらないのとうなすつて 田舍の秋をおしのび頂戴な私は淋しく暮してをりますのよ。

○　富山　いなき

▲諸嬢様の中に福井武生町の黒田梧雨様とお仰しやる御方御存じの御方一寸誌上にて御知らせ下さいませんか もし御本人の御方の御目にとまりましたら無音の罪御許し下さいネ 以後もよろしくネ。

十一月

十一月は淋しい月ですが、またいろ〳〵の事柄が積極的に運ぶ活動の月です、主人も能く働く、子供も能く勉强する、諸君も能く仕事をすると云つたやうな月です。自然が冬の眠りに近づくと同時に、人間が貯へやう、働かうとする時で、收穫の時期です、されば宮廷でも此月には新嘗の祭が行はれるのでせう

菊は此月中咲いてゐます、山茶花、乙女椿なども咲く、併し一體に草は枯れ、木は落葉して外へ出ても滿目蕭條たる晩秋初冬の自然は人間に親みを持つてゐません。獸は穴にかくれ、人は家に親む時です、何處の家でも夜は遲くまで窓に灯火の影がさして居ます、外には寒月皓々と冴えて、昔は町行く辻占賣の聲に戀のあはれを誘ふて行つたものです。あれきけと時雨聞く夜の鐘の聲と歌つた頃の、暗い町を思つてみますと十一月は淋しい、靜かな、おちついた月です。冬になり切つたと云ふ感じもするので、それが暖い國では時雨、寒い國では雪などが降る爲に一層心持がおちつくのでせう。

日曜　三日　十日　十七日　二十四日
新嘗祭　十八日

▲注意　本誌は本年度より從來の增刊を廢し、年四回（一月、四月、七月、十月）定期號を特別三百頁の大冊として發行することになりましたなほ左の定價表を詳しく御覽下さい

○本誌投稿及び懸賞規定

▲投稿は凡て女子に限る　▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女士文壇社宛（未納稅は斷じて受付ず）に送ること、　▲小說と詩は擬假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十乃至五十行、初作は三十行以內▲各種類毎に一人一篇に限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす、▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を送る長さは二十四字詰二百行內外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて畫き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◎投稿は毎月十五日到着を以て既に締切る

▲小說と散文は　▲天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』圖畫『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す（但し短きものは此限にりあらず）▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

女子文壇　定價　毎月一日發行

四十五年一月より左の通り改定す

◎特別號一冊金參拾錢　送料貳錢
◎普通號一冊金拾五錢　送料壹錢五厘
◎半年分（特別二冊 普通四冊）　前金壹圓九錢　送料拾錢
◎壹年分（特別四冊 普通八冊）　前金貳圓八錢　送料貳拾錢

特別號は一月、四月、七月、十月號なり、其他の月は皆普通號です。

▲從前の定期增刊は無くなりました

申込注意

注文は總て前金のこと。振替貯金にて拂込の時は必ず雜誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと、郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵券代用は必ず壹割增のこと最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▼廣告掲載料

申込期限　發行前月十五日

壹等割引　一頁貳拾五圓
貳等割引　一頁貳拾圓
參等割引　一頁拾五圓
（一頁廿四字 三十二行）
半頁拾圓
一行四拾錢（一行廿四字 二十四字詰）

取扱所　博報堂。電報通信社。文明廣告社。弘報堂　其他いづれの取次店にても取扱申候

大正元年十月二十五日印刷納本
大正元年十一月一日第八年第十一號發行

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本魁
印刷所　東京國文社

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十二番地　女子文壇社
振替東京壹七貳九番　電話京橋六〇七番

特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂、東海堂、眞明堂、大阪盛文館外

●火事は小火の間に消せ、病氣は感冒の間に治せ

官許

登錄商標

感冒解熱特効薬

寶効散

▲定價▼

三包入 金五錢
七包入 金拾錢
拾五包入 金貳拾錢
四拾包入 金五拾錢
特別九拾包入金壹圓

主治効能

第一 總テ熱アル病

例之 四季感冒（鼻加答兒、喉頭加答兒氣管支加答兒）流行性感冒、肺炎、肺勞、肋膜炎、扁桃腺炎、耳下腺炎、舌炎、咽頭加答兒、急性胃加答兒、肝臟炎、麻疹、風疹等總テ熱アル病ノ類

第二 總テ疼痛アル病

例之 筋僂麻質私（肩胛强痛上膊筋痛等）關節僂麻質私（腰痛骨節痛）等其他諸種神經痛ノ類

第三 總テ神經性ノ發作アル病

例之 頭痛、癲癇、喘息、百日咳ニモ効アリ

▲本劑の特色▼

從來ノ解熱薬ト稱スルモノ多クハ服用後溫煖スルヲ常トス然レトモ本劑ヲ服スル者ハ平常ノ衣衾ニテ可ナリ之レ本劑ノ新妙藥ト稱シ弊舖ガ熱心ニ世ニ公言スル所以ナリ

一二三本舖

東京市神田區
末廣町十九番地

天然堂謹製

求婚廣告を見て

近頃の新聞には、求婚廣告といふものが大分見えるが、是を仔細に調べて見ると、今の人が何を標準として妻君を撰擇して居るかゞ分る、即ち何の廣告にも「身體の强壯」といふことを第一に置いてあるから、此「身體の强壯」といふ事が標準であるといふこともすぐ知れる。

昔は妻君を床飾り同樣に心得た時代が有つた此時代には容貌さへ好ければ、それ一つで易々と玉の輿に乘つた者も少くなかつた、併し今日は自分の妻といふものに付て、眞面目に考へる樣になつて來た、それで、容色本位で妻君を撰ぶ人でもあらうものなら、無智の人不心得の人として、他人から笑はれる樣な始末である。

扨て妻君を撰ぶ標準が、何故こんなに變化したのであらうかと云ふと、全く生存競爭の結果である、人口はドシ〳〵殖えて來る、同種類の職業は增して來る、そこで人と人、職業と職業の競爭が始まる、今日の樣な烈い競爭の世の中では、商賣をやつても中々うまい儲けはなし、給料なども各方面共に昔より相場がズツト下つて居る、で、これからの人は相當の教育あり技倆があつても、僅か許りの給料で辛棒せねばならぬ次第である、それで、上流社會は別として中流以下の家庭では、女中も置かず妻君自ら水もくむ、御飯も炊く、洗濯もするといふ風にして、少しでも夫の負擔を輕くせねば、一家の經濟は保つて行けない。

處で身體が弱かつたら、いくら意氣込みが旺んでも、ドフコイ身體が動かない、夫の負擔を輕くする處が、反對に高い藥を飲んで夫の負擔を重くするといふ具合で細腕一つで活計を立てゝ行く夫には實に堪へ切れない現今の人が妻君の體格に重きを置くのもこれが大原因である、それで今後の女子は身體が弱いと結婚上非常な損がある。

獨り結婚前の女子許りでない、既に嫁いた人でも同じ道理である妻君がいつまでも身體が弱くてぶら〳〵して居ては遂に小言も出る、品行問題からの痴話喧嘩に花が咲いて、出すの出るのと騷ぐ樣な次第で結局自分の不幸を招く基となるのであるから「健康」といふ事には大に注意せねばならぬ。

然らば婦人の健康は如何にして計るかといふに勿論中將湯を服用するが一番安全且つ迅速である、中將湯が子宮血の道から起る諸症及び月經に關する色々の障害それから、產前產後の故障等婦人病一切に有効な事は、世既に定評あるが、中將湯が他の婦人藥に比して甚だよく利く譯は他の藥の樣に一藥萬能主義で無くて各病人の容態に應じて十數種の加減藥を調合發賣して居つて、病人が自己の容態を詳しく書き添へて本舗へ申込めば其容態にキツシリ當てはまつた加減藥を送ることになつて居るからである。

猶ほ婦人病の起る原因や兆候及び治療の方法等に付ては「婦人衞生手引」に詳細記述してあるから早速取寄せて一讀するがよい、本書は東京市日本橋區通四丁目或は大阪市堺筋大寶寺町津村順天堂へ申込めば、無代進呈するから希望者は遠慮なくハガキにて同所へ至急申込むがよい。

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）
▲女子文壇 定價金拾五錢